異世界で聖霊少女とフリーダム！

くろぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界で聖霊少女とフリーダム！

【Ｎコード】
Ｎ１００４Ｗ

【作者名】
くろぬこ

【あらすじ】
気づけば異世界に飛ばされた高校生の少年と
その少年の記憶の一部を持つ聖霊少女達とのドタバタ劇（予定）
すべての聖霊少女達が揃いし時、異世界の住人達をも巻き込んだフリーダムでカオスな物語になる予定（笑）

◆基本的にその時に思いついたネタを書いてるので
かなり不定期更新になります。

◆習作です。小説を書く練習のつもりで書いてます。
処女作で自由な作風なため、読みにくい点が多々あると思いますが、
それでも良いぞ！っていうかたは宜しくお願いします。
（※挿絵も描いてますが、ほとんどが元ネタ有りのパロ絵です）

【序章】登場人物紹介・用語補足（前書き）

作者の脳内は常に桃色お花畑です。

＞i338873—39993＜

【序章】登場人物紹介・用語補足

◆登場人物紹介

・本条（ほんじょう）　拓也（たくや）

黒目と黒髪のどこにでもいる普通の高校生。

卒業式に3年間片思いだった憧れの女性に告白するが気付けば魔法や聖霊や魔王だとか訳の分からない異世界【フレードム】へ飛ばされていた。

口下手。人見知りが激しいが、自分の分身である聖霊には気さくに話す。

趣味は読書、ニコニコする動画鑑賞。

早く元の世界に帰りたい。

・火霊（ヒレイ）

火の聖霊。

【封印の間】といわれる場所に１０００年に渡り、聖剣と共に封印されていた聖霊。

拓也（たくや）が聖剣を抜いた事によりこの世界に出現した。

紅色の瞳と髪。（髪は首の後ろ辺りで縛ったツインテール）

火のエーテル（魔法の素）で構成され、少女の姿となっている。

聖剣に選ばれし者を真の聖剣の使い手になるよう導く役目を持っていたはずなのだが・・・

『私は主様の事を、性欲の対象にしか見てません』（真顔）

拓也（たくや）の股下の性剣にしか興味が無い変態（せいれい）。

頭の中は常に桃色お花畑。

得意なのは聖獣召喚の中でも最高難度の竜召喚（火竜）

『中二病』という異世界には存在しない
無属性魔法（？）を使える。

＞i315576－3993＜

・ルメリア（光国の姫様・第一皇女）
髪は長く、白髪。（白髪は光国出身者の特徴である）
陽の光を浴びるとキラキラと光り、白金と例えられる。
笑顔を絶やさず、おしとやかでありながらも
常に明るい性格から国民の人気も高い。
しかし、聖剣復活により今まで築いてきたものが
無残にも崩壊していく。

・リディア（光国の王妃）
ルメリアの母。竜姫。
火国出身。
髪と瞳は赤。
竜と戦った時に左目を負傷。（当時12歳）
火国の王で有り、竜王と呼ばれる現国王の弟の娘。

・フウ＝リン・メイ（光国の城に仕えるメイド）

拓也(たくや)の身の回りを世話してくれるメイド。
城のメイドの中ではただ一人の風国出身のメイド。
明るい緑色の髪と瞳が特徴的。

・ダイナ
光国(コウコク)の城に仕えるメイド長。
赤髪。火国(ヒコク)出身。

・魔王
3年前に竜の大群を操り火国(ヒコク)を襲撃。
目撃者によると黒髪に黒目の少女の姿をしていたと聞く。
髪と瞳が黒という人間は異世界には存在しない。

・アラン（元竜王親衛隊の隊長）
リディアの師匠でも有り育ての親とも呼べる人。
亡きリディアの父の親友。火国(ヒコク)出身。
リディアの唯一尊敬する人。
竜王親衛隊の隊長という身分でありながらも竜王の事は嫌っている。
リディアと同い年の子供がいる。

・火国(ヒコク)の第一皇子
現竜王親衛隊の隊長。

歳はリディアの2つ年上。
最年少記録を持つリディアへの競争心から
15歳の時に竜殺しに挑戦したと言われてる。

・ヌシフェル
火霊(ヒレイ)の妄想世界に住む堕天使。
背中から黒い翼を生やしている。
ちなみに服は着ておらず、裸。
拓也(たくや)と同じ姿をしており、火霊(ヒレイ)の
主(あるじ)に対する悩みをやさしく聞いてくれる
ありがたい存在。
彼曰く自分は”ツンデレ”という種族の
デレ属性を持つ堕天使とのこと。
ヌシフェル『そんな妄想で大丈夫か？火霊(ヒレイ)』

◆用語補足
・聖剣
伝承によると【封印の間】に1000年以上前から封印されていたとのこと。
拓也(たくや)の身長と同じくらいの長さが有り、振り回すのにはかなりの訓練が必要である。
鍔(つば)には聖石をはめるための8つのくぼみがある。
成人男性程の重さが有り、剣というよりは鈍器のイメージが強い。

・聖霊
異世界に存在するエーテル（魔法の素）が人の形を持ち、
さらには意思をもったもの。
（召喚者の一部の記憶をベースに構成されている）

特徴としては
（1）エーテル（魔法の素）で構成された体なので通常の攻撃では
傷をつけることすら不可能。
（2）魔法を唱えるためには
詠唱→構築式の完成→魔法という手順なのだが、
その過程を完全に無視して魔法を好きなだけ使える。
（ノーモーションで上級魔法を連発し放題。）
（3）聖獣を召喚する魔法はあるのだが、これはあくまで異世界
に存在する
生物の形をした魔法を出現させただけであり、意思をもってい
るわけではない。

・異世界【フレードム】の世界地図
火　氷
風　光　水
雷　土

・光国（コウコク）

拓也(たくや)が聖剣を抜いた【封印の間】がある国。

・火国(ヒコク)

７国の中で武力においてもっとも大きな力を持つ国。
本世界で最強とされる生物である竜を倒す程の実力者が多く、竜人と例えられる。
３年前、突如現れた魔王の襲撃により中心地は大きな被害を受ける。

・古竜(こりゅう)

１０００年以上も前から生きていると言われる竜。
溶岩(マグマ)の中を泳ぐ事もできる程の硬い鱗を持ち、
火国(ヒコク)の竜人と呼ばれる実力者達の魔法を受けても
傷一つ付けられない。
過去に聖剣の勇者との約束により異世界の人々には不干渉という
状況であるため
そこまでの脅威は感じられていない。
ただし、大切な卵を壊そうとする者達には容赦なくその牙を向ける。

第1話　ズボッ！

今から3年前――――――――

『まずいことになったな……』

眉間に皺を寄せ、苦悶の表情を浮かべ白髪の男性がため息をつく。

普段から苦労を抱えてるためか老け込んでるようにも見える。

――――――――――コンコン

――――――――――ガチャ

ドアを開ける音がして、一人の少女が入って来る。

『失礼します。父様（とうさま）、先ほど火国の使者が参られたようですが、何かあったのですか？』

『ああ、ルメリアか……』

父様（とうさま）と呼ばれた男性は部屋に入ってきた娘に気付き、顔をあげる。

（ふむ。髪の色は私と同じだが。面影は母親に似てきたな）

その髪は白であるが、陽（ひ）の光に当たるとキラキラと輝くことから、白金（プラチナ）と例えられる事が多い。

『実はな……』

男性は使者から渡された手紙の内容を少女に伝える。

『そんな……まさか』

少女の顔が青ざめる。

『そうだ、火国(ヒコク)が襲撃されたそうだ。
街はかなりの被害を受けたようだ』
男性が苦悶の表情でその事実を娘に告げる。

『ありえません！
火国(ヒコク)はこの地でも最強の武力を誇ると言われる国です』
信じられませんと驚きの表情を隠せない少女。

『いったいどの国が火国(ヒコク)を攻め入ったのですか！？』
白髪の男性はまた深いため息を吐いた。

『魔王が現れたらしい』

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・〜・〜

今日は卒業式。
俺は3年間、片思いを続けていた女性に告白をした。

間違いなく校内ではトップクラスの美人ではあるが周りと話てい
る所を
見た事は無く、まったくこんな良物件を逃すとはこの学校の男性共は
何を考えてるんだ！と思った。
でも、余計な虫が近づかないから自分的には良いんだけどねぇ……
と妙な理屈で納得してしまう自分がいる。

学校ですれ違う度にその長い黒髪が綺麗になびくのが印象的だっ
た。
触ればきっとサラサラなんだろうな……といつも思っていた。

声を掛けようと決心した事もあったが何を話して良いか分からな
いし
口下手なため会話も続かないだろうと思い結局断念していた。

卒業すれば二度と会えないかもしれない。
これは最初で最後のチャンスだろう。
とりあえず、校舎の人目につかない所に来てもらい、今の自分の
想いの
すべてを伝えた所だ。

緊張し過ぎて声を掛けたあたりから記憶はすでになく、
自分が何を言ったのか思い出せない。
リアルは脳内シミュレーション通りにはいかないようである。

分かってはいたんだが……
きっと断られるんだろうなと自嘲気味な笑みを浮かべ
はぁとため息をつく。

『嬉しいです』

一瞬の沈黙の間があった。

『えっ？』

予想もしない答えである。

彼女は本当に嬉しそうに蔓延の笑みを浮かべている。

（あれ？まじで！？）

本当に予想もしてない展開である。

いや、嬉しいっちゃ嬉しいんだけど……と思いつつ

何か裏でもあるのかな？とひどい思考が始まる。

物事がうまくいきすぎると素直に喜べず、逆に疑ってしまう

このネガティブな癖はなんとかしたい。

『やっと、愛してくれるのですね？』

『はっ？』

愛する？はて、俺の聞き間違いか？

確かに愛の告白ではあるが、愛するとかは大袈裟過ぎないか？

『3年間、ずっと待ってました』

（待っていた……だと？）

もはや、驚きを隠せない。

今の俺はどんな表情をしているのだろう。

少女の差し出した手が少年に触れる。

『主様(ぬしさま)』

聞きなれない言葉が耳に入った瞬間。
世界が突然、黒に染まった。

『……』

状況が飲み込めない。

『……』

今まで見えてた青空が見えない。

『……』

照明が消えたとかのレベルでは無い。
ここは外だ。しかも、昼間。
ありえない。
だが、俺の目の前は真っ暗だ。

一瞬、俺の目が失明したのかとあせった。
慌てて、何か無いのかと手探りでその辺を探す。

『何が起きた……どうなっている？』

動揺を隠しきれない。光はどこだ？照明は無いのか？

そう思って必死に探していると、手に何か触れた。
触った感じ棒状のようなモノである。
それを握り動かそうとすると、何かひっかかりを感じた。

『何だコレ？』

そう思って力を込めて引き抜こうとしたら、ズボッとあっさり抜けた。

『……剣？』

そうだ、確かに剣の形をしている。
そう思ってそれを眺めてる時に気付いた。

（ちょっと待て、なぜ俺は今これが剣だと分かった）

そして、急に明るくなった事に気づく。
視線を上に移動させると目の前には大きな鱗（うろこ）のようなものが見えた。
どうやら、それが発光しているようだ。

これのおかげで室内が明るくなったようだ。
その鱗（うろこ）のような大きくて長いモノを目で追い、
気付けば天井を見上げていた。

そこには、蜥蜴（とかげ）を思い出すような顔をした何かが
自分を見下ろしていた。

（・（・（・（・（・（・（・（・（・（・（・（・（・（・（・

（・（・（・（

――――――――ドォオオン！！

部屋全体がガタガタと揺らぐ。

白髪の少女が驚きの声を挙げる。

『何事ですかっ！？』

（何かが爆発した感じ？）

（でも、何だろうこの感じは……大きな魔力の流れを感じる）

部屋の外でバタバタと人が走る音がしたあと

――――――――バタンッ

自分がいる部屋のドアが盛大に開く。

『ルメリア様、た、大変です！』

兵士の一人が転がるように部屋に入ってきた。

（この者は確か、【封印の間】がある建物を警護してる衛兵の……

……）

『【封印の間】の扉が開きました！』

『な、なんですって！？』

（そんな馬鹿な。あの扉は私達王族の者しか開けられないはず……まさか！ありえない！）

考えるより先に足が動いていた。

『あっ、姫様！！』

部屋に入ったときに転んで、起き上がるのにもたついてる兵が叫ぶ。

『あなたはこの事を他の上級魔導士に至急、伝えて下さい
私は【封印の間】に行きます！』

『いけません！姫様っ！！』

衛兵の制止を振り切り、【封印の間】に掛けていく。

（なぜ、このタイミングで？）

（まさか、父様（とうさま）が？何のために？）

ありえないと自分の中で想定できる最悪の結果を想像しつつ、【封印の間】に急いだ。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・
～・～・～・～

『どういうことですか？』
【封印の間】に到着すると本来開いてるはずのない扉が本当に開いていた。
中の状況はどうなってるのかと中に入って、下をのぞいた。
この建物は地下に向かって深く掘られた構造になっており、円柱状の建物の壁に沿ってらせん状の階段が地下深くまで伸びている。

その階段の手すりから見下ろした先には竜がいた。
正確には召喚魔法の類で出来た聖獣であろう。
火の魔法が竜の形となって召喚されている。
この場合、火竜とでも呼べばいいのだろうか。

しかし、竜を召喚するのは聖獣召喚の中でも最も難しいとされるモノである。
火国から我が国に派遣されている上級魔導士でさえ実際に召喚し、操れる者は何人いるのだろう？

だが、そんな事は考えている暇は無い。
聖獣がいるということは強力な魔導士、もしくはそれ以外の何者かがいるということだ。

（何者が……！？）
白髪の少女が火竜の首元にいる何者かに気付いた瞬間。

火竜の首が暴れだした。

――――――――ブォオオオオオオオオ！

その口から大量の炎を吐き出し、建物の天井は火の海となっていた。

火竜が火を吐き出した瞬間、身の危険を感じた少女は瞬間的にそこから飛び降りた。

普通の人なら足の骨が折れても良いような高さから着地したが少女は何事もなかったかのように顔を上げる。

『母様（かあさま）……あなたの娘である事に感謝致します』

ボソリと独り事を言った後、少女は竜の首元にいる者に駆け寄った。

『おいおい、マジでコレなんだよ』

状況がまったく把握できない。

とりあえず、蜥蜴みたいな顔のでかくて長い首が大きく左右に揺れている。

俺も首まで土を埋められたら、こんな感じで外にでようともがくんだろうか。

割と冷静な判断の思考に驚きつつもその視線の先のモノに釘づけになっていた。

『何をしてるんですかっ！』

耳元で突然、聞こえた叫び声に驚いて声の方向に振り向く。

そこには自分の腕を掴み必死の形相で少年を睨む白髪の少女がいた。

（白髪……苦労が多いのかな？）

と、またもや訳の分からない思考が始まる。

『あなたがこの聖獣を召喚した者ですか！？

一体何を考えてるのですか！！』

自分の腕の服を強く握り締めブンッブンッと揺される。

（えっ？えっ？えっ？）

（何で俺が怒られてるの？）

訳が分からない。

『早くこれを止めて下さい、でないと大変な事に……！？』

少女が彼の足元にある剣に気付く。

『これは？』

【封印の間】の最下層の中心に深く刺さってる剣。

その剣先のすぐ隣に、過去に剣を刺したような跡が

一瞬目に入ったが今は深く考えなかった。

『これが伝説の聖剣？』

実物を見るのは初めてだった。

伝承にのみ伝えられる伝説の剣であり、その形はその時々により違う。

【封印の間】にあるとされているが、その時が来るまでは何人も入ってはならぬと

されているため、【封印の間】に入る事自体が初めてなのだ。
今、立ってる少年の胸元あたりまでの長さがある。
刺さっているからもう少し長いのかも知れない。

――――――――――ブォオオオオオオオオ！

びくっ！

火竜から吐き出された炎の息吹の音で、今の状況を思い出す。
今はこんなことをしている場合では無い。

『兎に角この状況を何とかしないと』
（この火竜をまず消すためには）
動揺し過ぎて、まともに思考が働かない

『あ、あのさぁ……』
少年がこちらに声を掛ける。

『少し静かにして下さい！
ぐぅっ！駄目だわ、どうすれば良いの？
火竜を封印するなんて今の私の力では……』
う～ん。う～ん。と思考を巡らし、この状況を解決できる最適な答えを探す。

そもそも、この少年はどうやってこの火竜を召喚したのか？
よくよく考えてみれば、なぜ少年が私達王族の者でしか開けることができない
【封印の間】に入ることができたのか？

なぜ？

なぜ？

何かがおかしい？

『あなた、どうやってこの火竜を召喚したの？』

一番、最初に思った疑問を聞いてみた。

『召喚？』

（召喚って言えばファンタジー系のゲームとかで聞く言葉だな。

竜とか空想上の生き物を出現させる的な意味合いの）

そう思って、自分が少女から竜と言われるモノ。

それが出てきたと思われる原因を思い出すために今までの記憶を辿り、

それを実行した。

少年は剣の柄を握り締め。

『召喚っていうか、こうやってこの剣を抜いたら……』

――――――――ズボッ

聖剣を抜いた。

伝説の聖剣が抜けた。

（ズボッていって私の目の前で抜けた）
いとも容易く。

『ハァァアアアアアアアアア！？？？？？？』
少女の叫びと同時に首だけを出していた火竜が空に舞い上がった。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・〜・〜

聖剣の束縛から解き放たれた火竜は
翼を大きく広げ飛翔した。
天井近くまで飛び上がり、それ以上は移動できないと気付くと
ホバリングをしつつ下を見下ろす。
『最悪の状況ですわね』
白髪の少女が厳しい目を天井に向ける。
『やっぱ、やばいんかなぁコレ？』

その手に聖剣と言われた長剣を持った黒髪の少年も天井を見上げる。

少女に火竜と云われたそれは何かを伺うようにこちらを見ている。

火竜と少女と少年による睨み合いがしばらく続き、
黒髪の少年はふとした疑問を口にする。

『降りて……来ないね？』

『確かにそうですわね、攻撃をしてくるわけでもなく
様子を見ているだけという感じですわね』

白髪の少女が眉を潜めつつ、しばらく長考する。
『もしかしたら、召喚者の指示を待ってるのかも知れませんね』

『指示？』

『はい』
白髪の少女は隣にいる少年を見る。

『もしあなたがあの火竜の召喚者だというなら
あなたの意志に従う可能性があります』

『例えば？降りて来て下さいとかでも言えば良いの？』

『そうですね、何でも良いので……！？』

少女が何かを言おうとした瞬間、天井近くで飛び続けていた火竜が
突然こちらに向かってくる。

少年と少女は身構え、ぶつかると思った所まで火竜が来た瞬間
【封印の間】はまぶしい光に包まれた。

そして、その光は人の形を作った。

二人が目を開けたその先には一人の少女がいた。

燃えるような紅色の瞳と長い髪をなびかせ、白髪の少女を一瞥、
そして黒髪の少年を見てニコリと微笑む。

『火竜が人の姿に……もしかして聖霊？』
白髪の少女が聞きなれない言葉を口にする。

だが、黒髪の少年の意識は違う所にあった。

（髪が赤……そして、下の毛も赤）

そう、少女は裸だった。

（公然わいせつ罪だな……露出狂か？）

第2話　性霊

【封印の間】と言われた場所でのドタバタ劇がとりあえず終わり、白髪の少女に従い少年は客室と呼ばれる所に移動した。

『改めて自己紹介をさせて頂きます
私はこの国の皇女、ルメリアと申します』

（あ～この人、お姫様だったんだ）
後ろの窓から差し込んだ陽の光に、その長い白髪はキラキラと輝く。

『あの、お名前を伺っても宜しいでしょうか？』

『え？え？あ！え～と、じ、自分は本条（ほんじょう）　拓也（たくや）って言います
あっ！？拓也（たくや）で呼んでもらって良いです』
あまり見ないタイプの女性だったため、つい見とれてボーッとして急な問いかけにどまついてしまった。

『タクヤ様ですか？
こちらにはどのようにして来られたのでしょうか？』

白髪の少女にたずねられるが、正直自分でもまだよく分かってないため
答えるのに困ってしまった。

とりあえず、自分が分かる範囲でここに来る直前の事を話してみる。

『はぁ……ガッコウですか？聞いたことが無い地名ですわね』

しばらくお互い要領を得ない会話が続き、結局お姫様には
分かったような分からないような表情をされてしまった。
たぶん、分かってないんだろうなと思った。
訳の分からない状況が連続して発生して混乱していたが、時間が
経つにつれ
少しずつだが思考が冷静になってくる。
これ以上は何を説明しても無意味だろうなという空気になり、
もう話すネタもなくなってきたので、個人的に気になった事を聞い
てみた。

『え～と、さっき聖剣とか言ってたけど……
あっ、言ってましたけどそれは一体何でしょうか？』
【封印の間】であった一部始終を思いだし、
その時疑問に思ったことを聞いてみた。

『聖剣ですか？私も伝承でしか知らないので
実物を見るのは初めてなのですが……』

私の知ってる範囲で宜しければと話を続ける。

姫様の聖剣の話を要約すると、
聖剣とは【封印の間】に１０００年以上前から封印されていた剣
ということ。
世界が危機に瀕した時、聖剣に選ばれし勇者が現れ世界を救って
くれると。

『３年前、火国（ヒコク）に魔王が現れました』
白髪の少女は険しい顔で答える。

『魔王？』
少年は聞き慣れない言葉に反応する。
『この世界、フレードムには７つの国があります』
『私達がいるこの国が光国（コウコク）』
『そして、その光国（コウコク）を中心に
火国（ヒコク）、氷国（ヒョウコク）、水国（スイコク）、
土国（ドコク）、雷国（ライコク）、風国（フウコク）と６つの国があります。』
『その中でも火国（ヒコク）はこの世界では最も大きな力を持った国です
しかし、３年前の魔王襲撃により街は大打撃を与えられたそうです』
うなだれるように姫様は答える。
『しかし、聖剣をもつ勇者様が現れたとなれば話は別です』
ガバッと少女は顔を挙げ、少年の手を掴む。
『お願いです！魔王を倒しこの世界を救って下さい！』
『え～と、救えと言われましても』
困惑する少年。
『もちろん世界を救った際には莫大な報酬がでます』
どうでしょうか？と少女に問いかけられるが、少年はう～んう～んと唸る。
『いや、ていうかどうやって魔王を倒すんですか？』

『う～ん。そうですね。
聖剣の力を最大限に引き出すためには８つの聖霊の力が
必要だと言われてます』

『当面はその聖霊達を探す事が目的となるのではないのでしょうか？』

（聖霊ねぇ……）

正直めんどくさい事に巻き込まれたなと思いつつ、少年は隣に視線を移す。
視線の先には瞳と髪が紅い少女がこちらを見ていた。

とりあえず、裸のままでは問題があるのでルメリアに服を用意してもらった。
なぜか、少女は服を着る事に不満をもっていたが、それだと俺が困ると言ったら
しかたなくと言った感じで着てくれた。

『これじゃあ、主様（ぬしさま）を誘惑できません』
といった言葉が耳に入ったがとりあえず聞き流した。

しかし、これが俺が召喚したものだと言われてもいまひとつピンッと来ない。
とりあえず、ほほに触れてみる。ぷにぷにしている。
少女はくすぐったいですと言いながらも、嬉しそうに視線をこちらに向ける。

ていうか、今気付いたが妙にほほが赤いのは気のせいだろうか、

ていうか妙に瞳が潤んでるようにも見えますが。

『主様(ぬしさま)……』

赤髪の少女と見つめ合う黒髪の少年。

『せ、聖霊様？』

その妙な空気にルメリアがおもわず声をかける。

『何よ？』

聖霊と呼ばれた少女は明らかに露骨に嫌そうな顔を声のするほうに向ける。

『え～っと……聖剣のお話ですが』

何だろうこの温度差はと思いつつルメリアは話を続ける。

『興味ないわ』

『え？』

予想外な言葉に驚く。

『いや、聖剣の真の力を発揮しないと魔王は倒せないと思うわけでして……』

『魔王にも興味はないわ』

『え～と、そうなると世界が滅んでしまうかもしれないわけでして……』

『どうでもいいわ』

すべてを否定する赤髪の少女。白髪の少女には既に興味をなくしたその少女は

となりの黒髪の少年に視線を移す。

『私が興味があるのは主様(ぬしさま)だけ』

甘えるような声を出し、己の主と認める者にその視線を絡ませる。
もたれかかるように少年にその体を預け、その腕を少年の首に絡ませる。

『ちょっ！せ、聖霊様！』
このままではなんとなく危険だと判断するルメリア。
『そ、そういえば聖霊様のお名前は何と言うのですか？』
ふとした疑問を聖霊に問う。

『名前？』
めんどくさいなぁという視線をルメリアに向けつつ、考え込む少女。
『名前は無い……』
どこか寂しそうにつぶやく少女。
『でも、名前が無いとこれから呼びにくいんだけど……』
少年の言葉に少女が反応する。
『では、名を頂けますでしょうか？』
少女は上目使いで少年に名をくれと懇願する。

『名前ですか……火を操る聖霊となりますと
どのような名前が良いのでしょうかね？』
ルメリアの呟きに、赤髪の少女はお前になど頼んでないといった目線を送る。

『じゃあ、火霊（ヒレイ）とかは？』
『火霊（ヒレイ）ですか？』
少年の呟きに赤髪の少女が反応する。

『火を操る聖霊だから……火霊（ヒレイ）、駄目？』
『タクヤ様さすがにそれは安直すぎるのでは……』

とルメリアが苦笑する。

『うれしいです……』

『えっ？』

ルメリアの予想を裏切り、赤髪の少女は好反応のようだ。

『それが私と主様(ぬしさま)を紡ぐ真名(まな)となるのですね？

ではその名を心に刻み、主様(ぬしさま)と最後まで共に歩もうと思います』

（なんか愛の告白みたいな雰囲気になってるけど大丈夫かこれ？）

少年に何か妙な一抹の不安がよぎる。

『では、真名(まな)を頂けたので後は契りを結ぶだけですね』

そう言って火霊(ヒレイ)はおもむろに手を拓也(たくや)の胸に触れ、

その手をふとももに移動させ、そしてカチャカチャと音を立てながら

ベルトを外そうとする。

『あのさ？何やってんの？』

とりあえず、身の危険を感じで火霊(ヒレイ)の手を掴む。

『む？何って契りですよ？』

何か問題でも？と言ったような目で少年を見上げる。

『え～っと、火霊(ヒレイ)さんの言う契りとは何でしょうか？』

『……？セックス？』

さらっと火霊(ヒレイ)が問題発言をする。

あまりにもさらっとし過ぎて反応するのに時間が掛かった。

『召喚された人型の聖霊、主(あるじ)の命に絶対服従、これだけおいしい

設定で

契りとなれば成人本ではセックスやりたい放題という流れが

定番だと思ったのですが？違いましたか？』

何か、妙に気になるキーワードが飛び交う。
『え～っと、火霊（ヒレイ）さん？』
『あ～主様、大丈夫ですよ』
火霊（ヒレイ）は少年の不安な顔から何か気付くものがあったのか、安心して下さいと会話を続ける。
『エロ本とAV（アダルトビデオ）の知識はちゃんとありますので、その辺は大丈夫です』
さらっとまた問題発言をする。
ばっち来い！ですと親指を立ててグッジョブ！のサインをする。
『火霊（ヒレイ）さん？知識って何ですか？』
少年はさらに問う。

――――――――ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

少年はこの世界に来る前の記憶を思い出す。
（確か、テレビとかの生放送で放送事故が起きた時とかにモザイクが掛かってこんな音してたよな）

――――――――ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

少年の前にいる火霊（ヒレイ）と名を与えられた少女は自慢げに己の持つ知識を披露する。
だが、少年の耳にはそれが入らない。

――――――――ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

いや、正確には声は聞こえてるんだが記憶に残らない感じ？

右から左へ受け流す感じ。

（ていうか、これって……）

――――――――ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

（俺の中学時代の記憶じゃねぇかぁあああああああああ！！
！！！？）
（しかも１８禁ネタオンリーかよ！）
（しかも若干、中二病な妄想入ってるし、やめろぉ！！）
『やめてくれぇええええ！！！！』
『イヤァアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！
！！！！』

少年の叫び声はそれよりも大きなルメリアの絶叫でかき消される。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

～・～・～・～

『死にたい……』
黒髪の少年がつぶやく。
『主様(ぬしさま)、大丈夫ですか？』
赤髪の少女が心配そうに少年の顔をのぞきこむ。
今は先ほどの客間から移動し、自分用の部屋だとあてがわれた部屋のベッドで横になってるところだ。
『うっ……泣きたい』
少年の目が涙で潤む。
『主様(ぬしさま)……かわいそう』
ぐすっと少女がもらい泣きをしたような仕草をする。
（いや、全部お前のせいだからね！）
声にならない怒りを心の中で叫ぶ。
先ほど、客間から移動したと表現したが
正確には追い出されたと表現した方が正しいだろう。
そう、この目の前にいる赤髪のアホ聖霊がこともあろうか国の姫様の前で
１８禁で伏字を使ってもまだ足りないという表現の話を
ペラペラとしゃべり、姫様にドン引きされた上に絶叫されたのだ。

その悲鳴を聞いて何事かと城内の兵士達がワラワラと部屋になだれ込む。

俺はとにかく誤解を解こうと姫様に近寄るが、

『主様(ぬしさま)は私という女が有りながら、他の女に手を出すのですか？ひどいですぅ～！ケダモノですぅ～！』

と訳の分からないことを言って喚(わめ)き出し、それをさらに誤解したルメリアに

『ひぃ！ち、近づかないで下さい！』

と完全に俺をケダモノ扱いする始末、そして、そこに兵どもがなだれこんできたので

誤解が誤解を生む負の連鎖が完成する。

ルメリアを守ろうと攻めてくる光国の屈強の兵士達

あ～俺死んだなと思った瞬間、俺は聖霊の力を目の当たりにする。

『主様(ぬしさま)にきやすく触るんじゃねぇ！！』

という火霊(ヒレイ)の怒号と同時に客間は炎に包まれた。

炎に包まれた少女の体は人の形でなく竜の形になり、

火竜となったその口からは大小さまざまな火の玉が飛び出る。

逃げ惑う兵士達。

唖然とする俺と火に巻き込まれてはあぶないと俺を盾にするように背後に

ちゃっかり移動するルメリア。

（この人は長生きするタイプだな）

そう思いながら少年は白髪の少女を見る。

ルメリアは興味津々に食い入るように火の聖霊と光国(コウコク)の兵士達の

命がけの鬼ごっこを見ていた。
『すごい……』
ルメリアは驚きの表情を見せる。
『何がすごいんですか？』
火竜の息吹がこっちに向かって来ないか内心ハラハラしながらルメリアに問う。
『私達が魔法を使うためには本来、「詠唱」「構築」「魔法発動」という
三つの手順を通る必要があります』
睨むような厳しい目つきでルメリアは少年を見る。
（うっ、まだちょっと怒ってる？）
『一つ目が、この世に存在するエーテルという魔法の素を集めるための「詠唱」』
『そして己の中に存在する加護を通し魔法を「構築」』
『この二つの過程を通してようやく魔法発動となるのですが』
ルメリアは少年に向けていた視線を聖霊に向ける。
『先程の火竜をいきなり召喚するところから見るに、
どうやら聖霊には「詠唱」というものが必要ないようですね』
『聖獣召喚の中でも竜の召喚となると「詠唱」にかなりの時間を要します』
『下手をすれば「詠唱」「構築」だけでまる1日潰れる事も有り得ます』
『えっ？そうなの』
『はい』
体の中に構築式でもあるのでしょうかと、ルメリアはつぶやく。
そう言ってると、目の前で一人の兵士が火竜に吹き飛ばされ
窓を突き破って外に落ちていった。
『う～ん
とりあえず、死人がでる前に止めたほうが良いでしょうかね？』

少年がつぶやく。
『ぜひ、お願いします』
がしっとルメリアに腕をつかまれ睨まれながらも懇願される。
（うっ、怒ってるんだろうけど、俺を使って兵士を守らないとって感じで
葛藤してるんだろうな……）
『はぁ……』
深いため息を尽きながら、炎の嵐の中へ少年は歩を進めた。

第2話　性霊（後書き）

一応、念ための補足

１８禁の成人本とか中学生じゃ購入できないんじゃないの？
って意見があるかもしれませんが、例えば親が隠し持ってたやつ
だったり、友達のお兄ちゃん（１８歳以上）から（以下略
ということで中学時代に見る機会があった
という設定でいきます。

以上

第3話　歩くエロ本

カチャカチャとナイフが肉を刻む音が小さく聞こえる。
大きなテーブルにポツンと一人寂しく座る少女。
『はぁ……』
ふと、食事をしていた手が止まり、少女はため息をつく。
（最近、慌しい事が多くて疲れましたわ）
本来なら同席してるはずの両親は外交中であるため
今日も一人さみしく食事をする白髪の少女。

せっかくなので一緒に食事でもどうですか？と黒髪の少年も誘ってみたのだが
まだ聖霊がうまくコントロールできませんし、この前のような悲惨な結果になってはと
断られてしまった。

（たしかに、あれをまたやられては困りますわね）
白髪の少女は先日起きた騒動で客間を黒コゲにしてしまったことを思い出す。
（あ～父様（とうさま）と母様（かあさま）になんと報告すれば良いのかしら。）
両親が帰って来た時の良い訳についていろいろ考えてると少々憂鬱になった。
『はぁ……』

聖霊がうまくコントロールできるまではと別の建物にいる
黒髪の少年のことを思い出す。

少年の今いる所は上級魔導士を招いた際に宿泊をしてもらってる建物である。
あそこであれば多少の上級魔法を唱えても、光の加護による特殊な壁が
それをはじくので早々に壊れたり、建物が燃えるはずは無い。

少年と話してみた感じ、悪い人ではなさそうなのだが
問題は一緒にいる聖霊である。
『う～ん、聖霊ねぇ……』
少々自分の想像していたものとかけ離れていたイメージに頭痛がする。
世界を救う勇者として【封印の間】に現れたのはどう見ても普通の少年、
勇者とはとても言えない人物。
そして、それに従う聖霊は……この間の一幕を思い出して赤面する。
『聖霊というのですからもう少し清らかなイメージがあったのですが』
大変ショックである。

『はぁ……』
何度と分からないため息をつく。
『フウ＝リン、ちょっと良い？』

姫様の食事の世話係りとして並んでるメイドの一人に声をかける。
『はい、何でしょうか？ルメリア様』
声を掛けられたメイドがルメリアに歩み寄る。
フウ＝リンは光国（コウコク）の出身者が多いこの城内で
ただ一人の風国（フウコク）出身のメイドである。
光国（コウコク）の出身者は白髪なのであるが、フウ＝リンは

明るい緑色の髪と瞳が特徴的な女性であるため城内では嫌でも目立つ。

『タクヤ様の様子はどんな感じ？』
『はい、最近は部屋に篭もって熱心に読書をされてます』
『そうなの？』
そういえば少年のいる建物の近くを寄った時に、頭の高さを超えるほどの
本を積み上げて移動するフウ＝リンの姿を思い出す。
（ていうかフウ＝リン、バランス感覚がすごいわね）
とその光景をみて思ったのだが

『今は何を読んでるの？』
『はい、主に聖霊に関する物が多いですね
後は魔法の方にも興味があるご様子でそちらの方も熱心に読んでるようです』
『へぇ～、魔法ねぇ』

少年がどんな本を読んでるか少し興味がわいた。
『先ほど、タクヤ様にお願いされた本を届けに行く用事がありますので
もし、宜しければ一緒に行きますか？』
『あ、うん。お願いするわ
ごめんね、フウ＝リン
忙しいのにいろいろ押し付けちゃって』
『いえいえ、伝説の聖剣の勇者様を近くで見るなど滅多にない機会ですから
楽しくお世話させて頂いてます』
クスクスとメイドは楽しそうに笑っている。

『じゃあ、食事が終わったら後で一緒に行きましょう』
『はい、ルメリア様』
メイドが拝承しましたとペコリとおじぎをする。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・〜・〜

『う〜ん』
黒髪の少年が眉間に皺を寄せ、苦しそうな声で唸る。
『聖霊ねぇ……アイタタタ』
長時間に渡って同じ姿勢で本を読んでいたせいか、腰と肩の周辺に痛みを感じて揉みほぐす。
先日、自分の身辺の世話係としてついてくれてるメイドのフウ＝リンに頼んで
聖霊に関する本を大量にもってきてもらい、それをひたすら部屋に篭もって読むだけの
ひきこもり生活が続いている。
椅子の背もたれに体重をかけ、机に目をやると本が山積みになっている。
（ていうか、リアルでメイドとか初めてみたな）

緑の髪と緑の瞳という自分がいた世界ではありえないような
組み合わせのメイド姿を思いだす。
（どうみてもコスプレだよなアレは）
『主様（ぬしさま）はメイドプレイの方がお好みですか？』
『なんだよ、メイドプレイって』
げんなりした顔で少年はベッドに腰掛けてこちらの様子を伺う
赤髪の少女を見る。
『それはもちろんメイド服を着て、にゃんにゃんすることですよ』
少女はニコッと笑う。
『にゃんにゃんってなんだよ。
そんな比喩表現は最近の若いやつは使わないぞ』
絶対その表現は下ネタだろうと思い、少年は苦々しい顔で少女を
見る。

（本当、最悪だな
聖霊が召喚者の記憶の一部をベースにできてるっていうのは良
いとして、
なぜこいつは俺の一番隠したい性的な部分のみを抽出して構成
されているんだ？）
少年にとっては歩くエロ本という認識になりつつある、聖霊を見
る。
『火霊（ヒレイ）、絶対に外ではそんな事を言うなよ？』
目の前にいる聖霊との最近のやりとりを思い出し、無駄だと分か
っていながらも
一応釘を指してみる。
『分かりましたご主人様。
今日はどうなさいますか？胸でしますか？』

とメイドを意識した言い回しをしながら、両手で自分の胸をもみもみする聖霊。
『胸でするってなんだよ？』
答えは分かってるが、少年は一応聞いてみる。
『パイズリ？』
赤髪の少女は迷う事無く答える。
『遠慮します』
キッパリと少年も断る。
『むぅ……主様（ぬしさま）冷たいですぅ』
どうして私の誘惑が聞かないんだろうと目の前の少女はブツブツと呟く。

（フッ……悪いな火霊（ヒレイ）、時代は変わったんだよ
中学時代は確かにお前のようなタイプが好みだった、だが今は違う）

そう心の中で呟き、この世界に来る直前に告白した少女の事を思い出す。
（俺の好みは高校時代になって変わったんだ
今の俺は黒髪におしとやかで一見か弱そうに見えながらも、凛々し気なあの目。
そう、まさに大和撫子を人にしたようなあの女性）

そして、告白をした直後にこの世界に飛ばされたことを思い出しガックリと肩を落とす。
（せっかく、せっかく俺にも春が来たと思ったのに、
あ～早く元の世界に帰りたい）

『ご主人様、元気を出して下さい
ご奉仕しましょうか？』

少女が胸を強調するように腕で胸をはさみ前屈みの体勢で少年を誘惑してくる。
『結構です』
だが少年は断る。
『むぐぅ』
なぜだなぜ私の誘惑が効かぬのだと苦々しい顔をして、赤髪の少女はぼやく。
（まあ、まずはこの歩くエロ本をなんとかしない事には、まともに外も出歩けん）
頭痛がするなと少年は己の頭を押さえる。
―――――――――コンコン
『タクヤ様、ルメリアです
今宜しいでしょうか？』
（げぇっ!? 姫様！）
少年は姫様の突然の訪問に慌てふためく。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・
～・～・～・～・～

――――――――コンコン

『タクヤ様？開(あ)けて頂いても宜しいでしょうか？』

ドアの向こうにいるであろう少年に向けてルメリアは声を掛けてみる。

『ちょ、ちょっと待ってください！ルメリアさん！』

ドアの向こうで、慌しく人が動きまわる音がする。

『おい！火霊(ヒレイ)！

さっきの打ち合わせ通りに早く石になって！』

『え～？なんですか主様？

まだ、寝るには早いですよぉ？』

『そんな事は、良いから！早く！』

『むー、主様の意図するものが火霊(ヒレイ)には理解できません』

『今は理解しなくて良いから！早く石になってくれ！』

『まだ、主様と遊びたいですぅ！』

『後で、またいっぱい遊んであげるからお願い！火霊(ヒレイ)さん！』

『分かりましたよぉ……』

ドアの向こうでブツブツと火霊(ヒレイ)が何か文句を言ってる声が聞こえる。

『『？』』

ルメリアとフウ＝リンが頭に？を浮かべながら、お互いの顔を見る。

バシュゥウウという音と練成反応を感じ、しばらくの間があった後に

ガチャリとドアが開く。
『す、すみません
お待たせしました、どうぞ』
少年がようやく顔を出す。

中に入ると火霊(ヒレイ)の姿はなく、部屋の壁に聖剣が立て掛けられているだけだった。
『あれ？さっき火霊(ヒレイ)様の声がした気がしたのですが』
ルメリアがキョロキョロと部屋の中を見回す。

『あ～、火霊(ヒレイ)なら今はここにいます』
少年がこれですと、聖剣の鍔(つば)を指差す。

聖剣の鍔(つば)には複数の窪みがあり、その一つに紅い石がはめ込まれていた。

『あぁ、なるほど、聖石ですね？』
ルメリアが聖剣の鍔(つば)にはめ込まれた石を興味深そうにのぞきこむ。
『はい、そうです。
さっき読んだ聖霊の本に聖霊が聖石となって聖剣の勇者と旅をしていたという記述があったので、ちょっと練習がてら火霊(ヒレイ)に石になってもらってるんです』
『なるほど、なるほど
その話は聞いたことがあります
タクヤ様は勉強熱心なんですね？』
ルメリアは机の上に山積みのようになってる本を見て素直に思ったことを言った。
『いや、ハハハ、せっかくこっちに来て聖霊とか便利な力が使えるんだし、いろいろ調べといた方が良いかなあっと思いまし

て』
（まさか、中学時代の俺の性癖を暴露されるのが嫌だから
死ぬ気で聖霊をコントロールする方法を探してるとは言えんよな）
ハハハ……と少年は乾いた笑いをする。
『クスクス……ああ、そういえばフウ＝リン
タクヤ様に届け物があるのでしょ？』
ルメリアはそばにいたメイドに声を掛ける。
『あ、はい。
タクヤ様、こちらが依頼された本です』
少年はメイドから本を手渡される。

『あ、ありがとうございます。
フウ＝リンさん、助かります』
『なんの本ですか？げげっ！？』
本のタイトルを見てルメリアが後ずさる。
『？……この本、ルメリアさん知ってるんですか？』

”上級召喚魔導書　竜の書”と書かれたタイトルの本を
少年はルメリアに見せる。
『はぁ～私、召喚魔法系は苦手でしてその本は昔挑戦したことがあるんですけど
さじを投げちゃった本なんですよね』
ハハハとルメリアが苦笑する。

そうなんですかと言って少年はその本をパラパラとめくる。
『いや、自分も興味本位で魔法を唱えれるかなと思っていろいろ本を
読んでみたのですがどうも自分には才能が無いみたいで』

と苦笑して、少年はその本に書いてる詠唱呪文が記述されている
ページを
読み上げる。
一通り内容を読み上げた後、
『ほらね？何も起こらないでしょ……あれ？どうかしましたか？』

少年が顔をあげると目の前にいる少女とメイドが目を大きく見開き
こちらを見ている。
『えっ、俺なんか発音とか変でした？読み方間違ってます？』
少年が不安げに少女に問いかける。

『いえ、逆です。
むしろ完璧だと思います。
あまりにも綺麗な発音の詠唱でしたので驚いたのです』
ルメリアは驚いたその顔を隣にいるメイドに向ける。
『ええ、私も驚きました。
タクヤ様、本当に魔法が唱えれないのですか？』
体の中の加護を通る感覚がないのですか？とメイドに問いかけら
れる。

『あ～その加護ってやつなんですけど、一応、この世界にある7
属性の
基本魔法についての本も読んで試してみたんですけど、
どうやら俺にはどれも当てはまらないみたいでして……』
きまずそうに少年は言う。

『もったいないですわね。
それだけ詠唱が完璧ですと、発動する魔法もかなりの威力を発
揮するはずです
今度、うちの上級魔導士達に調べさしましょう』

『えっ？　いや、いいっスよ。
　別に俺は魔法を唱えられなくても問題無いですし』
　ただの興味本位ですしと言おうとしたがルメリアにさえぎられる。
『駄目ですよ！　さすがにそれはもったいないですわ。
　タクヤ様はその件に関してはご心配なさらないで他の事について集中して下さい』
『えっ、あのちょっと……』
『フウ＝リン、さっそく上級魔導士達を呼んで頂戴、私の方から話をするわ』
『かしこまりました、ルメリア様』
『あのぉ……』
　姫様とメイドの二人は少年をそっちのけで会話を弾ませ、そのまま部屋を後にした。
――――――――――バタン
『えええぇぇ……』
（余計な事するんじゃなかったな……）
　部屋にポツンと少年は取り残された。
〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・〜・〜

『リディア様、お帰りなさいませ
申し訳ございません、お出迎えができなくて』

赤髪のメイドが客間を見つめる女性に声をかける。

『ああ、ダイナ？気にしなくて良いわよ
急ぎの手紙が来たので私も急いで帰ってきただけだし』

声を掛けられた女性はメイドを一瞥した後、また部屋に視線を戻す。

『しかし、派手にやったわね
真っ黒コゲじゃない』

女性の視線の先にある部屋は大火事でもあったかのように家具が燃え変形し黒ずみになっている。
壁も一面真っ黒になっている。

『はい、聖剣の勇者様に従う聖霊の力は予想以上に大きくルメリア様も
苦労しているようです』
メイドが苦笑する。

『聖剣の勇者ねぇ……』
手紙に書いていた内容を思い出す。

突如、【封印の間】に現れた聖剣とその聖剣に選ばれし者と思われる少年。
その少年は黒髪に黒い瞳というこの世界には存在しない特徴を持っていると
書かれていた。
（黒髪に黒い瞳……）

ギリリと歯軋りをする音が聞こえる。
3年前に我が国を襲った魔王。
そいつはこの世界では最強の生物と呼ばれる竜の大群を操り
火国（ヒコク）を襲撃してきたのだ。
突然の襲撃に街は騒然となり、そして街は大打撃を受けた。
（その場に自分がいれば、まだ被害が抑えれたかもしれんという
のが
悔やまれるな）

竜に乗り魔王と名乗ったそれは少女の姿をしていたと聞く。
その髪と瞳は黒。

（まさかな……）
『とりあえずもう少し詳しい状況が聞きたいわね
ダイナ、すぐにルメリアをここに呼んで』
『分かりました、早急に探してまいります』
メイドがペコリと頭を下げる。

『母が帰って来たと伝えて』
『はっ！かしこまりました』
メイドは足早にその場を立ち去る。

そのメイドの後ろ姿を一瞥した後、視線を黒コゲになってる客間

に戻す。

（魔王よ、次会った時は私が必ず……）

しかし、その女性の瞳は目の前の客間を見ているのではなく、はるか遠くにいる何者かに向けられていた。

第４話　ヌシフェル♂

母様(かあさま)は周りから竜姫と呼ばれている。

火国(ヒコク)には竜が好む火山が有り、多くの竜が巣を作っている。
竜と共存する事は不可能だ。
故に度々、人と竜が衝突する。

竜の力はとても強く、竜の前では人など虫ケラのように扱われる。
竜が吐く炎の息吹は人を一瞬にして炭にする。

そんな地上最強の生物がいる地に、火国(ヒコク)という国がある。
火の加護をその身に宿し、上級魔導士となると魔法で
竜の炎の息吹に耐える者もいる。
竜は１０００年以上も前からこの地にいる。
昔は竜がこの地を支配してた時代もあったらしい、だが１０００
年前に現れた
聖剣に選ばれし勇者が竜達をまとめていた竜王を倒し、
この地を人々が住める世界に変えた。

その勇者から生まれた子供達の血を強く受け継いだのが今の火国(ヒコク)の
王族達だと言われれている。
彼らは竜の炎の息吹をその身に浴びても耐える事ができ
その強靭な体と拳で竜の硬い鱗を砕くといわれている。

人の身でありながら、竜と対等に戦う事ができる者達を竜人と呼
ぶ。
母様(かあさま)は竜王と呼ばれる現国王の弟の娘だ。
幼い頃から類まれなるその才能を発揮し、１２歳の時に竜を倒す

という
偉業を成し遂げた。
　数多くの竜を倒した竜人達の記録を次々とぬりかえ、その底知れぬ力の大きさからいつしか竜姫とも呼ばれるようになった。
　ちなみに火国（ヒコク）の王族の男性が大人と認めてもらうための称号として竜殺しというのがある。
　己のその身一つで竜に戦いを挑み、竜を倒す事で勇者の血を受け継いだ者として
認めてもらうのである。
　大抵の者は２０歳を超えてからその竜殺しに挑戦するのだ。
　しかし、母様（かあさま）は１２歳の時にそれをやってのけたのである。
　ただし、その代償はあった。
　その戦いの時に母様（かあさま）は負傷し、左目を失い顔に大きな傷を受けることになる。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・〜・〜

（ヒマである）

己の主に火霊と名付けられた火の聖霊は
主のベッドの隅に座っていた。

（主様が後で遊んでくれるというから、石になって
待ってたのに、ようやく外に出れたと思えばこれはどういうこと
かね？）

赤髪の少女は不満を持っていた。

白髪の少女と緑髪のメイドがいなくなったので、外に出て己の主を
誘惑して遊ぼうとしたら、今度は白髪の少女とその母と名乗る者が
部屋に突然乗り込んできたのだ。

また、石になるのはめんどくさいと主に言ったら、
部屋の隅でおとなしくしてろと命令された。
そして、とりあえず何も喋るなと言われた。

（火霊は大変ご立腹である）
火の聖霊はぷくーっと頬をふくらます。

だが、己の主は突然来た白髪の少女とその母親と名乗る女性との
話に夢中になってこっちをまったく見てくれない。

（しかたないな……アレをやるか）

火の聖霊は目を閉じる。

己がこの地に生まれた時に主の記憶の一部と
何者にも負けない強大な火の力を授かった。

そして、もう一つもらったモノがある。
その力の存在を知ったときは驚いた、まさか火の力以外の魔法を自分が使えるとは思わなかったのである。

（フフフ……主様（ぬしさま）には感謝せんとな）

この魔法には詠唱呪文が必要である。
火のエーテル（魔法の素）から構成されてる火霊（ヒレイ）は火の魔法を使う時には詠唱を必要としない。

（さて、では……）

使う詠唱（スペル）呪文はとても短い。
その詠唱（スペル）呪文をゆっくりと頭で唱える。

『中二病（ちゅうにびょう）』と……

瞬間、火霊（ヒレイ）の中に妄想という名の強大な構築式が完成する。
そして、その構築式が大きく膨らみ破裂する。
火霊（ヒレイ）がゆっくりと目を開くとそこには
一面桃色のお花畑が広がっていた。

～・～・～・

『美しい……』

火の聖霊は目の前に広がる美しい光景に目を細める。
これだけの強大な世界をたった一言の詠唱呪文(スペル)で
構築できるのだ、主様の力の偉大さを改めて思い知らされる。

ただ、おしむらくはこの世界に来れるのは自分だけと言うこと。
（本当は主様(ぬしさま)も連れて来たい所だが……）

どうやらこの世界に来るためには何らかしらの制限があるようだ。
しかたないなとため息を付く。

だが、心配する事は無い。
この世界には彼がいるのだから。

火の聖霊は叫ぶ、桃色お花畑の中心で彼の名を。

――――――――――バサバサ

大きな漆黒の翼を羽ばたかせ、それは舞い降りる。

――――――――――バサバサ

その姿は人の形をしてる、背から大きな翼を生やしてるので
あるいは天使というべきか。

――――――――バサバサ

彼は己の名を呼んだ聖霊を見つけ、やさしくほほえむ。

――――――――バサバサ

空から舞い降りてきた者と目が合う。

『ヌシフェル……』

そう、彼と初めてこの世界で会った時、彼はヌシフェルと名乗った。

『そんな妄想で大丈夫か？火霊（ヒレイ）』

彼がいつものようにやさしく問いかける。

『大丈夫だ、問題ない』

ドヤ顔で火霊（ヒレイ）もいつものように答える。

『ヌシフェル、聞いてくれ！

主様（ぬしさま）が最近とても冷たいのだ

私の誘惑には興味もしめさないし

石になれとか訳の分からないことを言い出すし

私は嫌われているのだろうか？』

火の聖霊の問いかけに彼はやさしく答える。

『火霊（ヒレイ）、君はツンデレという者を知っているかい？』

『ツンデレ？なんだそれは？』

『この世界の魔法に火、水、雷という属性があるように

僕達の世界にも属性があるんだ
そして僕達が持つ属性の一つがツンデレだ』

『それはどんな魔法なのだ？』

『魔法ではないよ
そうだね、種族のようなものだと思ってもらえれば良いかな？
数が少なく大変デリケートな種族だ、扱いがとても困るね』

『種族？』

『ツンデレには二つの顔がある、表と裏の顔だ』

『表と裏の顔？』

『そうだ、外にいる彼が表の顔だ
彼はあまり素直ではない
君に冷たくするのには理由がある
君が好きだからだ』

『なん……だと……』
驚愕の事実を聞き、火霊（ヒレイ）に衝撃が走る。

『外にいる彼はツンの属性を持つ
その属性を持つ者は好きな人の前では
恥ずかしくてなかなか本心を見せない
冷たい態度を取るのも照れ隠しなんだよ？
好きな人ほどいじめたくなるタイプでもあるのかな』

『あれは照れ隠しなのか？

う～ん、すぐには信じられんな』

『フフフ……そうだよね
だから、その代わりとして僕がいる
彼の君に対する申し訳ないという贖罪(しゃくざい)の感情から
君だけのこの世界にこっそりと干渉してるのが
もう一つの裏の顔である僕』

『裏の顔……』

『そう、僕がデレの属性を司る
君を傷つけた心を癒すために君の前に現れた堕天使
ヌシフェル』

『ヌシフェル……』

『彼と僕は二つで一つ
ツンデレという特殊な種族なので
君には申し訳ないと思っている
許して欲しい』

愛する主様(ぬしさま)と同じ姿をしつつ、
生まれたままの姿の堕天使が微笑む。
外の世界の主様(ぬしさま)が火霊(ヒレイ)に普段見せる事が無い
状況だけにその破壊力は大きい。

『ゲフッ』
思わず吐血しそうになった。
聖霊には肉体というものが無いので
出血をするということはないのだが。

『な、なるほど……そう考えると今までの
主様(ぬしさま)の態度にも合点が行く
そういうことか！』

納得したとばかりに顔をガバッと挙げ、そしてヌシフェルの股の下をギラリと凝視する。
（意外と大きいな、外の主様(ぬしさま)もやはり……ゴクリ）

彼の股の下から雄々しくそびえ立つ巨頭に
火の聖霊は釘付けである。
ぶっちゃけ、今までの話はどうでも良かったりする。

『分かった、ヌシフェル
あなたを許そう！
だから、早く降りてきて私を抱きしめて欲しい』
ハァハァと鼻息が若干荒くなってきた気がするが
火の聖霊は気にしない。

『火霊(ヒレイ)、落ち着いて聞いて欲しい
先ほど言った様に僕たちはとても恥ずかしがりやな
人種なんだ、心の準備をさせて欲しい』

『心の準備か……心の準備なら仕方ない、待とう！』
待つとか言いつつ、タイミングさえ合えば飛び掛ってやろうと
考える火の聖霊。

（ハァハァ、かわいいよヌシフェル、ハァハァ
かわいいよヌシフェル、ヌシフェル、マジ堕天使！）

桃色の花畑をまだかなぁ？まだかなぁ？と呟きながら
火の聖霊がカサカサと蠢く。

その様子を外の主（あるじ）が見たら、
『変態！近づくな！』
と枕でも投げつけてきそうな感じだが、
目の前にいる彼はやさしく微笑む。

『そんな妄想で大丈夫か？火霊（ヒレイ）』
彼がやさしく問いかける。

『ハァハァ……ハァ？だ、だいじょぶひゃあ！』
興奮し過ぎて呂律が回らない。

（ヌシにゃん、ハァハァ……ヌシにゃん、ハァハァ）
なかなか降りてこない彼に火の聖霊はだんだん
痺れを切らしそうになってくる。

（ウヒャァァ！駄目だ！もう、我慢できん！）
意を決したように、彼の股間に狙いをすます。

『愛してるよ、火霊（ヒレイ）』
彼がやさしく囁く。

『イ゛ェアアアア！！！！』

火の聖霊の喜びの雄叫びが、妄想世界にこだまする。
喜びのあまり頭の中が真っ白になった変態(せいれい)はそのまま
桃色の花畑に崩れ落ちた。

第４話　ヌシフェル♂（後書き）

＞i338７３―３９９３＜

第5話　アフォオ

俺は少しだけ後悔している。
確かに隅っこでおとなしくしてろとは言った、
余計な事は喋るなとも言ったかもしれん。
少年は汚物を見るような目でそれを見る。

『ウヘヘ……ヌシフェル……ウヘヘ』

あの顔は完全にトリップしてる状態だと思われる。
阿呆のように口からよだれを垂らし、その瞳はどこを
見てるかはよく分からない感じで宙を彷徨っている。

（クスリでもやってるのかこいつ……）

『うわぁ……』

声のする方に少年が視線を移動すると白髪の少女が
汚物を見るような目でソレを見ている。
おそらく少年と同じモノを見てしまったのだろう。

しばらくした後、見てはいけないものを見てしまったという感じで
少年の方に視線を移動させ、少年と目が合う。

（ルメリアさん、何も見てませんよね？）
少年はやさしく少女に微笑む。

（ええ、タクヤ様
私は何も見ておりませんわ）

少女もやさしく微笑み返す。
なぜか目と目で通じ合う二人。
次元を超えても以心伝心というものは
存在するようだ。

『ルメリアさん、もし宜しければ
聖霊を石化する魔法の本を
紹介してもらうことは可能でしょうか？』

『聖霊を石化する魔法は聞いたことは
ありませんが、聖獣を石化する魔法は
聞いたことがあります
後でフウ＝リンに探させときますね』
少女はニコリと微笑む。

『ありがとうございます』

どうやら彼女はコッチ側のようだ。
少年はすごく安心した。
この一連の短いやりとりだけで、少年の意図を
汲む返事をしてもらえただけに、少年の中で
目の前の少女の好感度は急激に上がった。

この世界で異端なのは自分の聖霊だけなようだ。
その事実に少年はちょっとイラッとした。
そして、アレが自分の記憶の一部で作られているという
事実に改めてショックを受けた。

『タクヤ君？

この聖剣触っても良い？』

『えっ？ああ、良いッスよ
どうぞ、どうぞ』

声を掛けられた方向に少年が視線を移動させると
女性が周りから聖剣と呼ばれる剣を片手で
ひょいっと持ち上げていた。

彼女はリディアと名乗った。
どうやら、ルメリアの母親のようだ。

姫様のお母さんと言うことで、ちょっとビビッてしまったが
思ったより軽い感じの人なようで
『堅苦しいのは嫌いだから楽にしてくれて良いわよ』
という感じで割とフランクに話しかけてくれる。
こちらとしても元いた世界で王様とか王妃様だとかいうのに
会った事ないので、そういった場でどう対応すれば良いのかを
悩んでただけにその言葉はありがたかった。

そういえば、ルメリアと初めて会った時も
お姫様という感じの印象がなかったので
その辺をあまり気にせず、同世代と喋る感じで
喋ってたなあと今更ながら思い返す。
ルメリアの人懐こい感じはお母さん譲りかなと
も思った。

『へぇ～これが聖剣ねぇ』
聖剣を見る彼女の瞳はルメリアと違い赤く、
その瞳はやさしくも鋭い目をしているという印象を受けた。

髪は長く、顔の左半分を前髪で隠している。
『ルメリアも持ってみる？』
リディアが娘に問いかける。
『あっ、はい、母様（かあさま）』
聖剣には前々から興味があったので、
迷わず少女が手を差し出す。
『片手ではムリよ
両手を出しなさい』
『？』
少女は少し不思議な顔をして、母親に言われるがままに
両手を差し出す。
そして、その剣が少女の両腕に渡される。
『！？……ぐっ、重っ！』
少女はその重さに驚く。
まるで成人男性をお姫様抱っこしてるかのような気分になりながら、
聖剣を持つというよりは抱き上げる。
油断して膝が付きそうになる前に、母親が聖剣を持ち上げてくれた。
『ふぅ……驚きました
見た目と違ってずいぶん重いんですね』
少女は額から汗をぬぐうような仕草をした後、少年を見る。
こう言ってはなんだがパッと見た感じ、少年はそこまで

力があるように見えなかった。だから、少年が聖剣を
ひょいひょいと持っている様子から随分と軽い印象を
持ってただけにすごく驚いた。

『タクヤ様って意外と力あるんですね？』

『えっ？そうなの？
そんなに重いのソレ？』
少年としてはその辺に落ちてる棒切れを振り回してる感じで
聖剣を持ってただけに目の前の少女のリアクションに少々驚く。
（う～ん？こっちの世界に来て筋力がアップしたのかな？）

『ありがとう
そういえばタクヤ君はここと違う世界から
来たという話だったわね』

リディアは聖剣をもとの位置に戻し
少年に視線を移す。

『あっ、はい
信じてはもらえないかもしれませんが
どうにも自分がいた世界とは違うようで
最初は外国かなとも思ったのですが、魔法とかは
自分の世界には無いものでその……』
若干、しどろもどろになりながら答える。

『へぇ、そうなの？
でも、黒目に黒髪っていうのはめずらしいわね
こっちの世界では見たこと無いわ』

そう言ってリディアが、少年の瞳を覗き込むように顔を近づける。
（！？……近っ）
突然、女性に目の前まで近づかれたため少年は驚いて
後ろにのけぞりそうになる。

『フフフ……そんなに驚かなくても良いじゃない
それと、さっきルメリアから魔法が使えないって聞いたけど
そうなの？』

『あっ、はい、まだ確証は持てませんが
たぶん、使えないと思います』

『ふ～ん』
そう言って、彼女は更に少年に近づく。
鼻と鼻が触れそうだなと思う所にまで近づいてきて
少年はドキドキしてしまう。
そして、ふと彼女の前髪に隠れた部分が視界に
入ってくる。
（あっ……そういうことか）

少年の意識は別の所に向けられていたため気付くことはなかった。
目の前の女性の瞳に一瞬、怪しげな色が灯った事を。

『！？……火霊（ヒレイ）？』
突然、リディアと拓也（たくや）の間に一つの影が滑り込んでくる。

『なんのつもりだ？』
火の聖霊が目の前の女性を睨み上げる。

『あら、ごめんなさい
何か気に触る事でもしてしまったかしら』
いきなり割り込んで来た火の聖霊に少々驚きつつも
何事も無かったかのようにリディアは少女を見下ろす。

『……』
『……』
王妃と火の聖霊の突然の睨み合いが始まり
その場が一瞬の静寂につつまれる。

『女狐(めぎつね)』
少女がボソリと呟く。
その呟きにリディアの体が微かにピクリと反応する。

『おい、火霊(ヒレイ)？どうした？』
妙な空気に少年は耐え切れず、目の前の聖霊に声を掛ける。

『……』
だが、少女は主(あるじ)の問いかけに答える事無く
目の前の女性を睨み続ける。

『フフフ……ごめんなさいね
何か気に触るようなことをしたのであれば
あやまるわ、ルメリア？』

女性は近くにいる、少女に声を掛ける。

『あっ、はい、母様(かあさま)』
『ちょっと急用を思い出したから
またしばらく出掛けるわ

タクヤ君の事、宜しくね』
『はい、分かりました』
『タクヤ君も自分の家だと思ってゆっくりしていってね
何かあれば、ルメリアに遠慮する事無く言って頂戴ね』
『あっ、はい、ありがとうございます』

少年は目の前の女性にペコリとおじぎをする。

『フフフ……』
王妃は少年にやさしく微笑み、少年がいる部屋を出て行った

～・～・～・

『はっ！何でしょうか？リディア様』
赤髪のメイドがどこからともなく、王妃の横に現れる。
『すぐに聖剣と聖霊とやらについて調べろ！
あんなもの呆けた老人の戯言(たわごと)かと
思ったがアレを見て気が変わった』

『アレですか？
聖剣のことでしょうか？』

『違う、聖霊だ！
聖剣の勇者という少年も見た目はただの子供(ガキ)だが
どうにも気になる
他の者達を使ってすぐに調べさせろ』

『はい、承知しました』

『それと、あの少年についての情報規制も解け
聖剣と言っても本当の話なら１０００年前の話だ
少しでも情報が欲しい、もしかしたら聖剣の情報に
くいついた他国の連中から情報が入る可能性もある』

『しかし、宜しいのですか？
黒髪に黒目の人間が現れたとなると火国の者達が黙ってません。
３年前の魔王の件もありますし』
赤髪のメイドが眉をひそめ、王妃に問いかける。

『ならば竜王に言ってやれ！
全責任はリディアが持つとな』

リディアがメイドを睨みつける。

『はっ！承知しました』

（まったく聖霊というのは忌々しい生き物だな
部屋の隅で阿呆のように呆けてたと思ったら
あの反応……）

王妃は少年を魔王の手先ではないかと疑いをかけ
彼を敵意のあるまなざしで覗き込んだ瞬間に
火の聖霊が間に突然入ってきた事を思い出す。

（そして、あの目）

王妃は前髪をかきあげ、その下にある傷に触れる。
その傷は額から顎にかけて抉(えぐ)るような傷跡を残している。

（そうだ、竜だ
あれは竜の目だ）

幼き日に竜に傷つけられた古傷がうずく。
そして、数多くの竜との死闘を繰り広げた中で
つちかった経験が己の本能に警鐘を鳴らす。
（あれは危険だ
すぐに対処せねば
万が一という事もある
まさか、我が城に竜を招くことになるとは
思わなかったがな）

『フフフ……』

王妃は自嘲気味の笑みを浮かべる。

『リディア様？』

『ダイナ、これから忙しくなるぞ
すぐに事を始めろ！』

『はっ！では、失礼します』
そう言ってメイドは音も無く、王妃の前から消え去る。

『竜か、本当に厄介な事にならなければ良いのだがな』

王妃の中に一抹の不安を残しつつ、王妃の手の者達による
暗躍が静かに始まる。

第6話　古竜

『スゥー……ハァー』

大きく息を吸いこみ、そしてゆっくり吐き出す。
幾度かの深呼吸を終え、ようやく一息つく。

『フフフ、さすがに竜姫とまで言われた
お前でもあれにはまいったようだな』
『生きた心地がしませんでした
あれは何ですか？』
『古竜だよ』
『古竜？』
『１０００年以上前から生き続けてる
竜といわれてるらしい、聖剣の話くらいは
お前も知ってるだろ？』
『ええ、まあ……』

自分の目で確かめたもの以外は信じない性格なので
正直な話、昔からおとぎ話のように言われる
聖剣の話はあまり信じてない。

『その顔はあまり信じてないという顔だな……』
『１０００年も前の話ですよね
正直信じろと言われても難しいですね』
『まあ、お前の性格だとその反応が正しいんだろな』
『アラン隊長は信じてるんですか、聖剣の話？』
『古竜がいるからな
もしかしたらという気持ちはあるな』

隊長と呼ばれた男は目の前の女性に苦笑交じりで答える。

『お前、今いくつになった？』

『２０歳です』

『たしか、竜を初めて倒した時は……』

『１２歳の時です』

『１２歳か……普通、あれって２０歳くらいからやるだろ？
俺でも挑戦した時は１８歳の時だったぞ？』

『フフフ……その代償がこれですよ？』

女性は顔の左に出来た大きな傷を指差す。

『それでも、生きてただけ充分だと思うがな』

『たしかに今思えば少し無謀過ぎたかも知れませんね』

左目を失う程の重傷を負った帰りに
こっぴどく目の前の男に叱られた事を思い出す。
彼とは幼い時に父を亡くしてからの長い付き合いになってる。
父の親友でもあった事も有り、小さい時から稽古の相手を
してもらって随分鍛えられた。

『お前がそんなことするから、第一皇子がひどい目にあってたな』

『別に競う必要は無いと思うんですがね』

『そうはいかんだろうな
竜王の息子としての面子（めんつ）もあるしな
あれってお前の二つ上だろ？』

『そうですね』

『お前が最年少記録なんて作るから
その一年後には急遽竜殺しに行く破目になったんだよな

かわいそうに……』

かわいそうにと言いつつも笑ってる男の表情を見て
顔に傷を負った女性が苦笑する。

『仮にも第一皇子の話ですよ
竜王の親衛隊長が笑い話にしてはいけないと思うのですが』
『あ～俺、竜王嫌いだしな』
『フフフ……』
『まあ、もうすぐ俺も親衛隊長の任を解かれそうだしな
次は第一皇子がなるんだとさ』

男はやれやれと言った表情をする。
『それよりも、古竜を見た感想は？』
『そうですね』

男との笑い話で先ほどまでの緊張がほどけて来たのを
見計らっての話の方向転換だろう。
先程あった事を顔に傷を負った女性は探るような表情で
思い出そうとする。

『正直、溶岩（マグマ）の中を泳ぐ竜がいるとは思いませんでした』
『たしかにその辺を飛んでる竜程度の鱗だと
人が溶ける程の熱さもつ溶岩（マグマ）の中を泳ぐことはできないんだろ
うな
古竜以外にあれをやる竜は……俺は知らないな』
『それにも驚きましたが、空飛ぶ竜達を撃ち落とす隊長の
火の魔法がまったく効かない竜がいる事にも驚きました』
『お前はあれに勝てると思うか？』
『正直、今の私には難しいでしょうね

隊長があれに勝てないと言われれば火国(ヒコク)に勝てる者は
いないのでは無いでしょうか？』
『フッ……あれには俺も驚いたよ
しかも何事もなかったのように溶岩(マグマ)の中をまた泳ぎだすからな』
『我々の存在に気付いてないかのようなふるまいでしたね
いや、気付いてるけど気にかけてないと言った感じでしょうか
？』

女性はその時の目の前で起こった信じられない光景を
思い出すかのように目を細める。

『やつらは気付いてるさ、ただこちらに必要以上に干渉しないだ
けさ』
『なぜですか？』
『聖剣の勇者様の恩恵ってやつかな
１０００年前に竜をまとめてた竜王を倒した話は知ってるだろ』
『ええ、まあ……』
『その時に約束をしたんだとさ古竜達を滅ぼさないかわりに
この世界の人々に干渉するなってね』
『信じられませんね』

その話が本当だとすると過去に現れた聖剣の勇者という人物は
竜と話す事ができたという事になる。
確かに竜は他の生物にくらべて賢いと思う所があるが、
会話は到底できる相手とは思えない。

『でも、俺の攻撃を受けても何も反応しなかっただろ？』
『たしかにそれはそうですが……』
『だが、奴等にも不干渉という約束を破ってまで守ろうするモノ
がある』

男が発したその一言に女性は身震いをする。
彼女が先程、古竜と対峙した時に最も恐怖を感じた瞬間。

『卵ですね？』
『そうだ』

男が目を瞑り、苦々しい表情を浮かべる。
隊長と呼ばれる男が古竜の後ろにある卵に火の魔法を放とうとした瞬間、
それまで我々に興味も示さなかった古竜がこちらに強烈な殺気を放ったのだ。
歴戦のつわものである彼でもやはりあれ程の殺気に当てられるとしんどいものがあるのだろう。

『古竜の卵には触れてはならん』
『はい』
『お前が自分で見たものしか信じない性格ゆえにあれを見せた』
『はい』
『この世にはお前の想像をはるかに超えた者達がいる
お前は強い、いずれ俺も超えるだろう』
『はい』
『そこはもっと謙遜してくれよ』
『父が父ですしね』
『まあな……』

竜王の弟である父は、その類まれなる力を持つが故に早くから目をつけられ、
その力に嫉妬する者達に謀殺された。
くだらない身内達の権力争いだと思うが、王様になるかならない

かという
話になるといつの時代もそのような事はたびたび起こるものである。
自分もその厄介な立場上、幾度か命を狙われる事があった。
だが、早くから父親の親友である彼にそのような権力争いで、
生き残るための知恵と力の使い方を教わり今日まで生きてきた。

『お前の父親が亡くなった時に俺にはお前と同じ年の子供がいた』
『分かってます』
『まあ、聞け
人質と言われれば都合の良い言い訳に聞こえるだろう
だが、俺にとって一番に守るべき者は子供だった』
『……』
『故にお前の親父を助ける事ができず、俺は親友を見殺しにした』
『仕方のないことです』
『子供がいないお前にはまだ分からない話だな
だが、いずれお前にも分かる時がくる』
『そんな時が来るのでしょうかね？』

愛と言う感情は今の自分には良く分からない感情である。
生涯独り身だと思ってる自分に、愛する者ができる時が来るとは
到底想像できない、
故に少々ぶっきらぼうな返事になってしまった。

『いいか、リディア
守るべきものが出来た時には良く考えて行動をしろ
一番大切なものを失わない選択をするんだ』

隊長と呼ばれた男の言葉にリディアはうなづく。
そして、古竜と対峙した時の事をもう一度思い出し身震いする。

卵に手を掛けようとした我々に対して、古竜は溶岩(マグマ)の中から
ゆっくりとその大きな頭を出し、その牙を剥き出しにして
こちらに笑いかけてきたのだ。
その時のリディアには、古竜の表情はそう見えたとしか言えなかった。
私の大切なモノに手を出してみれば分かっているだろうなと、言葉を発せずとも
古竜から放たれる殺気にはそれに近いものを感じた。

～・～・～・

こっちの用事もついさっき終わったので
一息つこうと思っていたところだ』
王妃は入ってきたメイドを一瞥し、腕を伸ばした後に
肩を揉みほぐし始める。

『例の少年の件か？』
『はい』
赤髪のメイドがうなづく。

『さて、それでは報告を聞こうか？』
椅子に深く腰掛け、王妃がメイドに催促をする。

『はい、先日よりリディア様に言われ
少年を監視しておりましたが
特に目立った所は無く
やはり普通の少年のように見えるとのこと』
『上級魔導士達にも調べさせたのか？』
『はい、魔法が使えないとの話もありましたので
上級魔導士達の協力のもと調査をしましたが
いずれの加護にも当てはまらないとの
報告を聞いております』

王妃がメイドを睨みあげる。
『本当かそれ？
この世界で加護が無い者など聞いたことがないぞ？
必ず何らかしらの加護の反応があるはずだ』
『正確には微弱ながら加護の反応を感じるのですが、
何の加護かを特定するまでの調査ができませんでした』
『調査できなかっただと？
どういうことだ？』

王妃の問いかけに、メイドの表情が暗くなる。
『それ以上調べようとする前に
上級魔導士達が皆、逃げ出してしまうのです』
『なぜだ』
『それ以上探りを入れようとしたら、その……
火の聖霊に警戒されてしまいまして』
『ああ、そういう事か』
先日、聖剣の勇者と言われる少年に会った時に
火の聖霊に睨まれた事を思い出す。

（あの気に当てられたら怖じけづくのも無理はないか
竜を相手にするつもりで挑まなければ、
あれには少々面食らうものがあるしな）

『という事はやはり警戒すべきは
聖霊ということになるな』
『その聖霊の件ですが……その……』
『なんだ？』
『いえ、実はその、メイドの一人が、その……』

歯切れの悪いその口調に王妃は眉をひそめる。

『！？』
突然、部屋全体を何者かの殺気が包み込む。

『……何だ、これは？』
『ぐっ！？リ、リディア様』
メイドがその顔を苦悶の表情にゆがめ、地に片膝をつく。

『ダイナ……何をやらかした？』
王妃は赤髪のメイドを睨みつける。

～・～・～・

最近、少年が魔法が使えないという事を調べに、いろんな人達が部屋に尋ねて来る。
姫様のお願いという事で、こっちの世界に来てから何かと世話になってる身ゆえに
むやみに断ることもできず、部屋に来た人達を招いている。
ただ、火の聖霊である火霊(ヒレイ)は、あまり彼らの事を良く思ってないみたいで
少年の事を調べてる人達を逆にジロジロと調べだし、尋ねて来た人達が最終的に
顔色を悪くして帰ってしまうという妙な現象が起こってる。

正直なところ、他人にジロジロと体を調べられるのも良い気がしないので、
尋ねて来る人達には申し訳ないが、なんか早く終わるしと思って
放置していたのだが、今日はいつもと状況が違った。
いつものように、上級魔導士だとかと言う人とそれに付いて来た赤髪のメイドが部屋に入ってくる。

部屋に入って来てから妙に気になってたが、メイドの目つきが
今までの人達に比べてかなり鋭く、終始まとわりつくような視線を少年に絡ませてきた。
上級魔導士よりもある意味ねっとりとした視線に、あまり気分は良い感じが
しなかったが姫様の頼みだし、我慢するかと少年は何事もないような態度をとる。

『ちょっと背中を見せてもらいたいので、うつ伏せになってもらっても
良いですか？』
『あ、はい……』

なんか体も悪くないのに、毎日病院で診察を受けてる気分だなと思いながら
少年はベッドに横になる。
赤髪のメイドから、チクチクするような痛い視線を感じながらうつ伏せになってると、突然背中にゾクリとするようなものを感じる。

――――――――――バタン！

何かが倒れるような大きな音がして、ドアの方に目を向けると先程まで自分を睨んでたメイドが倒れており、
火霊（ヒレイ）がその隣でそれを見下ろすように立っていた。

『え？』
何が起こったのか訳の分からない状況に少年は混乱し、
上級魔導士が慌てて倒れたメイドにかけより、
腕を肩に回して起き上がらせようとする。

『だ、大丈夫ですか？
手伝いましょうか？』
『いや、大丈夫です
申し訳ございません
き、今日はこれで失礼します！』
なぜか、上級魔導士の人に何度もあやまられ、
メイドと一緒に部屋を出て行った。

（ていうかメイドの人、痙攣してたような気がするけど、
本当に大丈夫かあれ？）

部屋のドアから顔を出し、廊下をヨロヨロと歩いてく後ろ姿を
見送った後、隣にいる火の聖霊に視線を移す。

『火霊(ヒレイ)？何やった？』
『主様(ぬしさま)をすごく睨んでたので、睨み返しただけですよ？』
悪びれた様子もなくニコリと赤髪の少女は少年に微笑む。

はあとため息をつき少年はドアを閉め、椅子に座って
最近の日課である読書を始める。

その様子を火の聖霊がニコニコと微笑んでしばらく見た後、
少年に背を向ける形でベッドに腰を下ろし、視線をドアに向ける。

（前々からお前達の態度には気に入らないものがあった、
主様(ぬしさま)の命令が無いから今日までおとなしく
していたが……）

クスリと少年に聞こえぬように小さく笑った後、
目を鋭く細めて目的の者を探す。

（さすがに今日のは限度を超えているな、
そちらがそのつもりなら相手になるぞ？）

目的の者を見つけた瞬間、少女の目は大きく見開き
口は頬まで裂け、するどい牙をむき出しにする。
その笑みは少年が見れば驚く程、醜悪なまでに歪んでいるが
少女は気にしない。

（ククク……貴様が何を企んでるか知らんが

火狐(ひぎつね)ごときが私に勝てると本気で思ってるのか？）

～・～・～・

おそらく、今日少年に接触した者は触れてはいけないものに、触れてしまったのだろう。
殺気に近いものでも放たねば、ここまでの怒りに触れることはないはずだ。

（警告というやつかな？）
王妃はメイドとは対象的に、涼しげな顔で椅子に深く座りなおす。

『ダイナ、今すぐ少年に接触しようとしてるメイド達をさがらせろ、これ以上の干渉はこちらに被害を出すだけだ』

『しかし、リディア様
あの者達についてはまだ不可解な点が多々あり
もう少し詳しく調べる必要が……』
震えながらもメイドは、王妃の意見に反論を唱える。

『ならば、貴様がこれの相手をするのか？』
『……』
王妃の問いかけに、メイドはすぐに答えられる事ができず沈黙をしてしまう。

『今、少年の身の回りを世話してるメイドは誰だ？』
『フウ＝リンです』
『フウ＝リン？ああ、風国のメイドか……』
自分の嫌いな風国の者の名前がでてきたことに、
王妃は眉間に皺を寄せる。

『ふん、だがある意味では都合が良いかもしれんな
良いだろう、ならばフウ＝リン以外のメイドに少年への直接干渉を

さけるように命令しろ、すぐにだ』
『しかし、フウ＝リンは風国の……』
『ダイナ、そもそも今回の失態はメイド長であるお前の責任でもあるのだぞ
分かってるのか？』
『も、申し訳ございません』
王妃からの怒りも混じった言葉に、メイドはうなだれる。

『分かったら、さっさと行ってメイド達に指示をして来い！』
話は終わりとばかりにメイドを睨む。
『わ、分かりました……』
メイドはようやくといった感じで立ち上がり、ヨロヨロと部屋を出て行く。

（ふぅ……やはり、狙いは私か）

先ほどから、部屋を包んでる強烈な殺気による頭痛が王妃を悩ませる。

竜姫とも呼ばれ、周りから恐れられる自分を
初対面で狐扱いした火の聖霊の事を思い出す。
握り締めていた手を広げると、じっとりと汗をかいていた。

（今の私一人であれば多少は相手をできるかもしれんが、
あの時とは状況は違う）

かつて隊長と呼んでいた男と共に、古竜と呼ばれる竜と対峙した記憶を思い出し苦笑する。
（一番大切なものか……）
今でこそ、あの時の隊長の言葉の意味を理解する事ができる。

子供がいなかった当時は気にもしなかったが、娘ができた今なら思う
何を捨てても守りたいと思う我が子。

一人身であった当時とは違い、今は背負ってる者がいる。
この城であれと戦いを始めれば、周りの被害は甚大なものになるであろう。
火の聖霊には、初めて対峙した時から、過去の嫌な記憶を思い出させるものを
薄々と感じていた。そして、それがついに現実となる。
娘を守りながら、あれと対等に戦う事ができるかと思えば自信が無い。

（お互い大切なものをそばに置いてる身だ
できれば平和的に終わらせれば良いのだが）

今日までに、メイド達が調べた少年に関する資料の束から、
一枚の紙をとりだす。
（火の聖霊、火のエーテルでその身を作り主（あるじ）を守る存在か……
フフフ、意思をもった火の魔法相手に、どうやって戦えば良いのかしらね？）

自嘲交じりの笑みを浮かべ、城の中で強大な殺気を放つそれを
探るように視線を移す。
（だが、いずれは相手をしないといけない時が、くるかもしれんな）

どんなに強い者であっても、大切な娘に危害を加える者であれば
容赦を
するつもりはない。

その時が来ない事を願いながら、王妃は深いため息をつく。

第7話　傷跡

『ごめんね、ルメリア』
『母様？』

いつもは見せない母親の悲しそうな表情に少女は驚く。

『醜い母親でごめんね』

母様の事を醜いだなんて思った事は一度も無い、
だからそんな事は無いと言ってあげようと思った。

『ごめんね』

母様の頬に一粒の雫が落ちる。

『母様……』

母様がその傷を前髪で隠すようになったのはいつからだろう。

～・～・～・

『なるほど、ガッコウという所は集団で勉学をする施設なのですね？』
『まあ、そうですね
大抵の子供は学校に通って勉強をしますね
自分の所でも１０００人くらい超える生徒がいましたね』

スープを食べていた手を止めて、白髪の姫様の質問に答える。

『１０００人は多いですわね
こちらでは魔法等を学びたい時には高名な魔導士のもとへ伺って学びますが
タクヤ様の所のように大人数で学ぶような施設はありませんね』
『まあ、人が多過ぎて名前が覚えきれませんけどね』
『たしかにそうですわね
でも、うらやましいですわ』

少女はため息をつき、手に持っていたスプーンを皿の上に置く。

『えっ？何でですか？』
『実は私、そういった集団での勉学をした事が無いんです
私の場合、皇女という立場的なものがありますので何かを学ぶときは
魔導士を城に招いて勉学をします』
『へぇ、そうなんですか？』
『はい、だから年が近い人と一緒に何かを学ぶというのに
少し憧れてたりします』

（自分は学生時代にあまり良い思い出が無いから何とも言えんな

……）

目の前の少女の反応とは対照的に冷めた感じで黒髪の少年は
過去の記憶を思い出してため息をつく。

（まあ、誰かと一緒に勉強した経験が無い人からすれば
憧れたりするものなんかね）

皿に入ってるスープを掬い、口に運ぶ。

（しかし、こういう食事の仕方は落ち着かんな……）

少年は周りの状況を確かめるように視線を動かす。

最近なんとなく火の聖霊の扱い方に慣れてきたので今日はめずらしく

ルメリアの夕食のお誘いに招かれてみた。

両親は二人とも外出中なようで光国（コウコク）のお姫様と二人で

少年の世界の事を話ながら食事中なのである。

（女性と二人で食事という状況にも困るけど、こう周りに人がいっぱいいる

状況で飯を食うっていうのがもっと落ち着かん）

若干疲れた表情で部屋の隅に並んでるメイド達を見る。

目の前の少女は普段からこのような環境に慣れてるためか気にせず

食事をしながら少年に話の続きを催促してくる。

普段と違う状況にいろいろと困惑してしまって正直ご飯の味も

良く分からない状況である。

『主様（ぬしさま）、大丈夫ですか？』

隣に座ってる火の聖霊が少年に小さな声で話し掛ける。

普段より食の進みが悪いから少年の心境が何となく分かるのだろう

心配そうな表情で少年を見上げている。

『ん？ああ、大丈夫だよ』
本当はあんまり調子が良くないが火の聖霊を心配させないように
声を掛け、そばにある水が入ったコップに手を掛ける。

『おい、淫乱ホワイト
今日は主様（ぬしさま）の調子がすごく悪いのだ、空気を読め！』
『えっ？』
『ブフォォ！？』

おそらく誰もが想定していなかった言葉であろう何を言われたか
理解できなかった姫様は目を丸くして食事をしていた手を止め、
黒髪の少年は飲みかけていた水を噴き出す。

『え～と、今なんとおっしゃいましたか？』
きっと、聞き間違いだろうと思ってルメリアは火霊（ヒレイ）に聞き返す。

『だから、少しお前は自重しろと言ってるのだ
淫乱ホワイト』
『い、い、淫乱ホワイト！？』
ホワイトという言葉の意味は良く分からなかったが、今まで生き
てきた中で
淫乱という言葉を言われたことがなかったので、驚いてルメリアは
立ち上がり
その拍子に座っていた椅子を倒してしまう。

『なんだ自覚無しか、女狐（めぎつね）の子はやはり狐だな
そうやって周りを騙して生きてるのか？』
『どういう意味ですか？』

クククと火の聖霊は笑う。

『心が醜いから、お前の母親は顔も醜いんじゃないのか？』
瞬間、姫様の前にあったスープの入ってた皿が消える。

――――――――ドスッ！

『むっ？ほう、思ったより早いじゃないか』
目にも止まらぬ勢いで火の聖霊の腹に突き刺さった皿がお腹に吸い込まれている
というよりは溶けていくのを確認した後、ゆっくりと火霊（ヒレイ）はうれしそうに顔を上げる。

『ようやく化けの皮が剥がれたか、それがお前の本性か？』
『これでも手を抜いた方よ？
顔を狙わなかっただけありがたいと思って欲しいわ』

皿を投げ終わった手をゆっくりと下ろし、火の聖霊を睨みつける。
その瞳はいつものような穏やかさを失くし、母親を思い出させるような
燃えるような紅色の瞳を爛々と輝かせていた。

母親から女性の顔は故意に傷つけてはいけないと強く言われてるため
腹を狙って皿を投げたのだ、幼少期であれば間違いなく今の母を侮辱する
言葉で顔面を殴り骨を砕いてたところだ。

クスクスと火の聖霊は笑い、次にどうやって目の前の少女を挑発しようかと
思考をめぐらせる。
その思惑を読み取ったのか、ルメリアは拳を静かに強く握り締め

る。

『あやまれ火霊(ヒレイ)！』

一触即発の空気が突然、別の者の怒号によって遮られる。

『ぬ、主様(ぬしさま)？』

火の聖霊は驚いた表情で隣に座る主(あるじ)に視線を移す。

『お前がルメリアさんのお母さんの事をあまりよく思ってないこ
とは
分かってるし、その事で最近イラついてるのも知ってる
だが今の言葉は見逃せん、あやまれ火霊(ヒレイ)！』

『……』

そこまで己の主(あるじ)に怒られると思ってなかったのだろう
明らかに狼狽した表情で、その視線は定まらず宙をさ迷う。

『な、なぜ私がコイツにあやまらないと……』

『すみません』

火の聖霊が言い終わる前に、少年が姫様に頭を下げる。

『……』

ルメリアは頭を下げる少年を静かに見つめる。

『うぅ……す、すみません』

若干しぶしぶと言った表情で火の聖霊も頭を下げる。

おそらく少年と違って自分が頭を下げる理由を理解してない
ためであろう困惑の表情が読み取れる。

『顔を上げて下さい』

ふぅとため息をついてルメリアは水をゆっくりと飲み干す。
少年がゆっくりと顔を上げると、少年を見る姫様の目は変わらず厳しいものではあったが、瞳は紅色ではなくいつもの色に戻っていた。

『すみません』

『……』

申し訳なさそうにする少年と困惑した表情を隠せない火の聖霊を見ていると母親との昔の記憶を呼び起こす。

（そういえば母様（かあさま）が前髪で顔の傷を隠すようになったのはあの時からだったかしら）

～・～・～・

『教えてルメリア、怒らないから
どうして顔を殴ったりしたの？』
母親は娘がおびえないようにできるだけ優しく尋ねる。
『だって、だって……あの子が母様の事を娼婦だって』
『えっ？』
『あんなお化けみたいな顔の女が王様と結婚できる訳がないって
きっと、娼婦みたいに体を使って父様を
誘惑したって……だから』

だから殴りましたと少女は母親に聞こえるか聞こえないかの小さな声で答える。

それは光国の城に庭の手入れに来てた庭師が連れてきた男の子とルメリアがたまたま知り合った事から始まる。
同世代の友達がいないルメリアにとっては、年の近い子供がいる事に喜び
近づいたのだが、この城の姫様と知られればあまり仲良くなれないと思って
素性を明らかにせず、この城で働いてるメイドの子供だと嘘をついて彼と仲良くなろうとしたのである。

いろいろと話をしてる内に話の内容が王妃の話に移る。
彼の大人達がよくする世間話のひとつであろう、お世辞にも
火国から嫁いできた王妃にあまり良い噂は無い。
同じ火国のつわものでさえ恐れる程に強く、その顔の大きな傷と
鋭い瞳が
周りの人を近づかせないすごみを兼ね備えてる。

父親がリディアを嫁にすると宣言した時には光国(コウコク)どころか火国(ヒコク)を巻き込んでの大騒ぎになったそうだ。
光国(コウコク)の皇子を竜姫が脅迫して結婚させただとか、火国(ヒコク)の謀略だとか、
いやどちらかというと光国(コウコク)の謀略だというふうに謎が謎を呼び
他国を巻き込んでの大事件の一つとなったくらいなのだ。

今でこそ両親達の笑い話になってるが当時は相当大変だったらしい。

当時の噂は今でも根強く残っておりその中にはリディアの事をあまり良く思ってない人達による悪い噂もあったりする。
たまたま、その話をルメリアはその男の子を介して聞いてしまったのだ。

話の半分は意味の分からない言葉だが、母親を侮辱している事だけは分かった。
気付いた時には怒りのあまり男の子の顔を殴っていた。
娼婦(しょうふ)だとかの意味を知るのはもう少し後になるのだが
その内容を詳しく知るようになってから男の人はみな同じような事を考えているのかと思うと若い男の人は嫌いになっていた。

本来ならあやまるべきはルメリアの方なのだが皇女でも有り、
周囲からも恐れられる王妃を侮辱した噂という事も有って
庭師とその子供があやまりに来るという状況になった。
彼らから事の顛末(てんまつ)は一応聞いているが、改めて娘にその真意を聞きたいと思い二人だけで話をしているのが今である。

母親はやさしく娘を抱きしめる。

『ごめんね、ルメリア』
『母様？』

いつもは見せない母親の悲しそうな表情に少女は驚く。

『醜い母親でごめんね』

母様はいつも誇らしげにその顔にある傷を竜を初めて倒した時に付けられた勲章だと言っていた。
ルメリアにとってもその傷は怖い物では無く憧れに近いものであったので、
自分も母様みたいな勲章が欲しいなとよく言っていた。
それを話すたびに母様に女の顔はとても大切なものなのだから故意に傷付けては駄目だといつもたしなめられていた。

『ごめんね』

母様の頬に一粒の雫が落ちる。

『母様……』

幼い頃には分からなかったがその顔にできた大きな傷によって色々と
女として苦労した事があったのであろう。
男の人の顔の傷は勲章と言われるかもしれないが、女の顔にできた傷を
うらやましいと思って見る人はいない。

その日以降、王妃はルメリアが事件を起こすきっかけとなった一つである

その傷を前髪で隠すようになった。

～・～・～・

もう少し母様(かあさま)の事はうまく対処できると思ってましたのに)

今後の事も考えると皇女としてはあまりよくない行動なので
もう少し戒めようとルメリアは今一度決意する。
だが、それ以上にルメリアの興味は別のところにあったりもした。

『そういえば、タクヤ様はどうしてあんなに怒って下さったのですか？』
『えっ？』
『火霊(ヒレイ)……様が母様(かあさま)の顔の傷を言った時の話です』
火の聖霊の名前をだしたとたん、その時の怒りがこみ上げて来たのか
顔の頬が一瞬ひくつくが、何事もなかったかのように話を続ける。

『それは、やっぱり女性の顔は大切なもので
自分のいた世界でも顔と髪は女の命と言いますし』
『あら、そうなのですか？』
世界を超えても女性に対する認識は同じであるのかと
ルメリアは思う。

『タクヤ様もやはり母様(かあさま)は怖いと思いますか？』
『すみません、ちょっと苦手な所はあります』
申し訳なさそうに少年はリディアへの感想を正直に話す。

『そうですか……』
予想していた答えだけにルメリアは少し残念そうな顔を見せる。

『あ、いや怖いとかじゃないんです
すごく美人なんでその……』
『えっ？』

少年からの意外な言葉にルメリアは驚く。

『いやその周りにあんな綺麗な人とかいなくて
そのドキドキしたというか、あっ、でも、ルメリアさんが
美人じゃないって言ってるわけじゃないんですよ！』
少年は慌てて言い訳をしようとするがうまく言葉がまとまらず
しどろもどろになってしまう。

それを見て白髪の少女はクスクスと笑う。
（あれ？俺、なんか笑われてる？）

『母様（かあさま）は美人だと思いますか？』
『えっ？美人だと思いますよ？
違うんですか？』
『フフフ、そうですね』

リディアはこの世界では割と悪い意味で有名なほうだ。
火国（ヒコク）から光国（コウコク）に嫁いだ王族ではめずらしい人という事もあるが
その特徴的な容姿と竜姫と呼称される程の実力者である事から
ルメリアの想いとは裏腹に国民からは畏怖の象徴として恐れられて
いる。

（この世界の方でないからこそ、そういった物指しで
母様（かあさま）を見ることが無いのかしらね）

『タクヤ様って変な人ですね』
『え？やっぱり俺って変ですかね？』

少年がいた世界でも周りから年に似合わず妙に達観した人だとか、
考え方が老けてるとかいろいろ言われてただけに自覚は多少あった

りする。

『あっ、ごめんなさい
悪い意味では無いんです』
『いや大丈夫です
同級生からもよく変わってるとか言われるんで』
『あら、そうなんですか？』

あまり多くを語らないその少年から今日はいろいろな人物像を見ることができた。
特に大好きな母の事に関しては周りから良い評価を得たことが無いだけに、今日の彼からもらった言葉にはすごく嬉しいものがあった。

（やっぱり、変な人ですわね
聖剣の勇者様と呼ばれる人はそういった事は
あまり気にしないのかしらね）
『クスクス』
『ハハハ……』

ルメリアは少年を見て楽しそうに笑い、それにつられる形で少年も笑う。

（あるぇええ？私って今すげぇ空気じゃねぇ？）

楽しそうな二人だけの世界を展開する状況から
完全に取り残された火の聖霊は愕然とする。
己の主（あるじ）以外に興味が無い火の聖霊にとっても
今回ばかりは見逃せない事態である。

（おのれ、主様（ぬしさま）をたぶらかすとは
淫乱ホワイトめぇ……）

その視線に気付いたのか、ルメリアはちらりと火の聖霊を一瞥する。

少年には気付かれないように交わされた視線。
火霊（ヒレイ）にとってはもはや宿敵とまでに昇華した者を睨みつける視線をルメリアは正面から受け止める。
お前だけは別だと言わんばかりに火の聖霊を睨みつけるルメリアのその瞳には燃えるような紅色が混じっていた。

～・～・～・

『元気？遊びに来たわよ？』
『……』
瞑想をする者に黒髪の少女は楽しそうに声を掛けるが
いくら待てども答えは返ってこない。

『あいかわらずだんまりなの？
早く全てをこちらに委ねてくれれば
すぐにでもあなたの愛する人との仲が
うまく行くようにしてあげるのに』
『……』
『私は魔王よ
いずれこの世界の王になる存在
この世界を支配できた後には
あなたの願いをすべて叶えてあげられるのよ？』
『……』
『フフフ、強情ねぇ』

このやりとりはいつもの事なので気にせず
魔王と名乗る者は話を続ける。

『ようやく彼がこちらに来てくれたわね
3年という時間は長かったけど聖剣の勇者さえ
こちらの世界に来てくれれば後は何もかもがうまくいくわ』
魔王は嬉しそうに微笑む。

『けど、あの人の理想の姿になってまで
あちらの世界に顔を出したと言うのに
なかなか接触してこなかったわね』
『……』
『実は自信失くしてたりして？

もしかして内心焦ってたりした？』
『……』
嬉しそうな顔で正座をしている者を挑発するような質問をしてみるが目の前の者は反応をしめさない。
『3年間待った彼がこっちの世界に来たのよ嬉しいんでしょ？
ねえ、今どんな気持ちなの？
すぐに会って彼を抱きしめたいって思わないの？』
『……』
魔王は自分自身を抱きしめる仕草をする。
『ふぅ……あいかわらずね
まあいいわ、心配しなくても
彼はここにすぐに来ることになるわ』
沈黙を続ける者を無視して、魔王は話を続ける。
『聖霊の力はすごく大きいもの
自分達に制御できない力に弱者は恐怖する
きっと彼はこの世界ですぐに孤立するわ』
『……』
『今は火の聖霊だとかいうのが邪魔して
すぐには近づけないみたいけど
それについては問題無いわ
既に手は打ってある』
怪しげな笑みを浮かべて自分と同じ姿をした黒髪の女性に魔王は顔を近づける。
『彼はすぐにこちら側に堕ちるわ
人の心はすごく脆いもの、フフフ……』

楽しげに笑いながら魔王は女性の前から静かに闇の中に消えていく。

『楽しみにしていてね
闇の聖霊様』

魔王と名乗る者の気配がなくなった事を確認して
闇の聖霊と呼ばれた者は静かに目を開ける。
その瞳はこの世界に来た少年と同じ黒。

（火の聖霊が守っているのなら
ひとまずは安心と考えて良いのかしらね）

彼は普通の人間だ。
こちらの世界に来て何らかしらの力が身につければ良いのだが
その確率は決して高くはないだろう。
だとすると、頼れるのは自分と同じ聖霊だけとなる。
魔王の言い方から察するに火の聖霊が彼の身を守っているようなので、
今は静観をしていてもたぶん問題無いであろう。

（そうですか
主様（ぬしさま）がこちらに来てくれたのですね）
その事実に思わず顔の頬が緩んでしまう。

（しかし、喜んでばかりもいられない、本当に大変なのはこれからね）
己の主（あるじ）がこの世界に来た事に喜びつつも、警戒するかのように
魔王がいなくなった方向に鋭い視線を向ける。

（主様（ぬしさま）がこちらに来た感覚は既に感じていた
という事は他の聖霊達もその事に気付いてるはず
勘が良いものはすぐにでも主様（ぬしさま）との接触を試みるはず）

この世界で信じれる者は同じ聖霊のみ。
この世界に生まれてすぐに魔王と名乗る者と接触している闇の聖霊には
この世界にせまってる危機がどれ程のものかがよく分かっていた。
だが、分かっていても今は動くことができない。
（あせっても仕方ないわね
今は他の聖霊達を信じるのみ
私は私のやるべき事をやりましょう）

他の聖霊達が己の主（あるじ）と早く接触する事を信じて
闇の聖霊は静かに目を閉じ、また瞑想を始める。

（主様（ぬしさま）……お気をつけて）

【第二章】登場人物紹介・用語補足・◆更新報告（前書き）

◆更新報告

２０１１／１１／２６

第１５話を追加しました。

いきなり、シリアス展開になったな。

次回の話で【第二章】は終了予定です。

もうちょっとだけ、続くんじゃよ

２０１１／１１／２７

第１６話を追加しました。

今年最後の小説追加。【第二章】完結。

何かに追われるように小説を書くこの生活に、

ぶっちゃけ疲れました、当分は小説はいいです…ｏｒｚ

（アクセス数とかお気に入りとか、このサイトの

システムは何かと精神に悪いね…）

こんなわけの分からない小説を、お気に入り登録してくれた

人達には感謝です、不定期更新ですまんかったのぉ。

また、やる気が出たら来年、続きを書くかもしれませんが、

気分屋の俺の事だから、期待はできないな（苦笑

じゃあ、またね。ノシ

【第二章】登場人物紹介・用語補足・◆更新報告

＞i34941―3993＜

◆登場人物紹介

（※ここにある内容は作者の脳内プロットを起したメモであり、
内容は本編の話が進むにつれ随時変更されます。
挿絵が描けたら追加する予定・・・まあ気分次第かな）

・本条（ほんじょう）　拓也（たくや）

黒目と黒髪のどこにでもいる普通の高校生でした、
現在は異世界【フレードム】にて聖剣の勇者様として行動中。
かと言って魔法が使えるわけでもなく、お姫様抱っこが軽々できる程度の
筋力が増えた事以外は普通の人。
厄介事に巻き込まれないように無難にその場を切り抜けようとするが、
大抵が聖霊の介入（一部悪ふざけ）によりカオスになる。
口下手。人見知りが激しいが、自分の分身である聖霊には気さくに話す。
趣味は読書、ニコニコする動画鑑賞。
異世界で起こる厄介事をすべて放り出して、早く元の世界に帰りたいのが本音。

・火霊（ヒレイ）

火の聖霊。
『大丈夫だ、問題ない』

【封印の間】といわれる場所に１０００年に渡り、聖剣と共に封印されていた聖霊。
拓也(たくや)が聖剣を抜いた事によりこの世界に出現した。
紅色の瞳と髪。（髪は首の後ろ辺りで縛ったツインテール）
火のエーテル（魔法の素）で構成され、少女の姿となっている。
拓也(たくや)の股下の性剣にしか興味が無い変態(せいれい)。
頭の中は常に桃色お花畑。
腐っても聖霊、その底知れぬ魔力の大きさは、竜姫と呼ばれる光国の王妃でさえも警戒させる程。
得意なのは聖獣召喚の中でも最高難度の竜召喚（火竜）
好きなもの：主様(ぬしさま)（本条(ほんじょう)　拓也(たくや)）
嫌いなもの：淫乱ホワイト（ルメリア）

・水霊(スイレイ)
水の聖霊。
『主様(ぬしさま)、唾液を下さい……』
拓也(たくや)の前に現れた、第二の変態。

・闇の聖霊。
黒目、黒髪。（ロングヘア）
魔王と同じ姿をした少女。

魔王と行動を共にしているようだが現在はその行方は不明。

＞ｉ３２０６５―３９９３＜

～・～・～・～・～・～・～＜　光国（コウコク）　＞～・～・～・～・～・～・～

＞ｉ３３７６０―３９９３＜

・ルメリア（光国（コウコク）の姫様・第一皇女）

髪は長く、白髪。（白髪は光国（コウコク）出身者の特徴である）

陽の光を浴びるとキラキラと光り、白金（プラチナ）と例えられる。

笑顔を絶やさず、おしとやかな性格でしたが最近は聖剣復活により崩壊していってる。というか素が出始めてる。

火国（ヒコク）の武人達が得意とする動の気と、光国（コウコク）の武人達が得意とする静の気を

操る事ができる稀な人。

火の精霊とすごく仲が悪い。

どんなに怒っても女性の顔は傷つけない事を信念としているが、淫乱聖霊は例外とする。

嫌いなもの：下ネタ（下ネタを言う若い男性も嫌い）

火霊（ヒレイ）（火の聖霊）

・リディア（光国（コウコク）の王妃）

ルメリアの母。竜姫。
火国(ヒコク)出身。
髪と瞳は赤。
竜と戦った時に左目を負傷。（当時１２歳）
竜王と呼ばれる現国王の弟の娘。

・フウ＝リン・メイ（光国(コウコク)の城に仕えるメイド）
拓也(たくや)の身の回りを世話してくれるメイド。
城のメイドの中ではただ一人の風国出身のメイド。
明るい緑色の髪と瞳が特徴的。
家事もできて喧嘩も強い万能メイド。

・ダイナ
光国(コウコク)の城に仕えるメイド長。
赤髪。女性。火国(ヒコク)出身。

・ダンネ
愛称はダン。運び屋。
火国(ヒコク)出身の運び屋。短髪で赤髪の青年。
たまに言葉遣いが荒くなる時があるが、根は良い人。
実績は有り、その腕を買われ光国(コウコク)からの
多少訳ありな荷物も運んだりする。
見た目は火国(ヒコク)出身の人間に見えるが、父親が光国(コウコク)の出身者で、
火の攻撃魔法よりも光の防御魔法が得意。

＞ｉ３３２２６―３９９３＜

・アリサ
水国（スイコク）にてダンネと行動を共にする謎の女。
短い髪を蒼色に染め、前髪をヘアバンドでとめている。
リディアとは知り合いのようである。

＞ｉ３３２２７―３９９３＜

～・～・～・～・～・～＜　水国（スイコク）　＞～・～・～・～・～・～・～・～

・スイ
本人曰く、情報屋らしい。自称１８歳。
料金次第では観光案内をしてくれると言うが、
妙に奇行が目立ち、拓也（タクヤ）を悩ませる。

・ミスティア（水国（スイコク）の第二皇女）
水国の亡き姫君。
初代女王であるレイティア姫の再来と言われる程の
天才的な魔法のセンスと強大な魔力の大きさを持つ少女。

また、それだけの力を持っていながらも鼻にかけることなく
誰にでも優しく接するその性格から、国民からも絶大までの
人気と信頼を得ている。
王族の次女でありながらも次の女王に最もふさわしいとされた姫
君。
しかし、３年前にその才能に嫉妬した現女王である長女により暗
殺され、
その行方は不明。

＞i３４４９５―３９９３＜

・サリティア（水国（スイコク）の第一皇女）
３年前に突如失踪したミスティアと王族達の謎の変死に
関わったと噂される人物。
王族達や両親たちの死をきっかけに女王となり、いつしか毒姫と
呼ばれ
国民からは恐れられている。

・レイティア
水国の初代女王。
聖剣の勇者様と共に世界を平和に導いた伝説の英雄の一人。
水国の水源ともなる巨大な湖は、初代女王の功績を称え
レイティア湖と呼ばれている。

・エレナ
風国(フウコク)の郷土料理（米料理）が食べられる店
【居酒屋　人魚姫(マーメイド)】の店主
風国のドレスを着て、お客さんを出迎えてくれる。

・マイルズ先生
レイティア湖の近くにある診療所の医者。
顎から無精ひげを生やし、見た目はあまりよろしく無く、物言いも乱暴ではあるが、腕は確か。
エレナとは知り合いのようである。

・ティア
レイティア湖のある森の近くで、ダンネとアリサの前に現れた小さな少女。
かわいらしい大きな蒼い瞳に、腰まで届く長い青髪が特徴的。
二人の前に突然に現れ、意味深な言葉を残し、また突然にその姿を消した。

～・～・～・～・～・～・～＜　火国(ヒコク)　＞～・～・～・～・～・～・～

・火国(ヒコク)の王
竜王。

・火国（ヒコク）の第一皇子
現竜王親衛隊の隊長。
歳はリディアの2つ年上。
最年少記録を持つリディアへの競争心から
15歳の時に竜殺しに挑戦したと言われてる。

・アラン（元竜王親衛隊の隊長）
リディアの師匠でも有り育ての親とも呼べる人。
亡きリディアの父の親友。火国（ヒコク）出身。
リディアの唯一尊敬する人。
竜王親衛隊の隊長という身分でありながらも竜王の事は嫌っている。
リディアと同い年の子供がいる。

～・～・～・～・～・～＜　その他　＞～・～・～・～・～・～・～・～

・魔王
3年前に竜の大群を操り火国（ヒコク）を襲撃。
目撃者によると黒髪に黒目の少女の姿をしていたと聞く。
髪と瞳が黒という人間は異世界には存在しない。

・ヌシフェル
火霊（ヒレイ）の妄想世界に住む堕天使。
背中から黒い翼を生やしている。
拓也（たくや）と同じ姿をしており、裸。
主に火霊（ヒレイ）の目の保養担当。

◆用語補足

・聖剣
伝承によると【封印の間】に１０００年以上前から封印されていたとのこと。
拓也（たくや）の身長と同じくらいの長さが有り、振り回すのにはかなりの訓練が必要である。
鍔（つば）には聖石をはめるための８つのくぼみがある。
成人男性程の重さが有り、剣というよりは鈍器のイメージが強い。

・聖霊
異世界に存在するエーテル（魔法の素）が人の形を持ち、
さらには意思をもったもの。
（召喚者の一部の記憶をベースに構成されている）
旅に出る時は、聖石という形で聖剣の鍔（つば）にはめ込まれて拓也（たくや）と共に行動をしている。

特徴としては
（１）エーテル（魔法の素）で構成された体なので通常の攻撃では

傷をつけることすら不可能。
（2）魔法を唱えるためには
詠唱→構築式の完成→魔法という手順なのだが、
その過程を完全に無視して魔法を好きなだけ使える。
（ノーモーションで上級魔法を連発し放題。）
（3）聖獣を召喚する魔法はあるのだが、これはあくまで異世界に存在する
生物の形をした魔法を出現させただけであり、意思をもっているわけではない。

・異世界【フレードム】の世界地図

氷
火　　水
風　　光
　　土
　　雷

・光国（コウコク）
拓也（たくや）が聖剣を抜いた【封印の間】がある国。

・火国（ヒコク）
7国の中で武力においてもっとも大きな力を持つ国。
本世界で最強とされる生物である竜を倒す程の実力者が多く、竜人と例えられる。
3年前、突如現れた魔王の襲撃により中心地は大きな被害を受け

る。

・水国（スイコク）

水の町というだけあって、中心地は噴水が所々にある。
最近、町に亡き姫君の亡霊が出るという噂が絶えない。

・貨幣（1枚当たりの拓也（タクヤ）の世界での貨幣価値）

銅貨＝　　１００円相当。
銀貨＝　１，０００円相当。
金貨＝１０，０００円相当。
白金（プラチナ）入り金貨＝１０万円相当。

・古竜（こりゅう）

１０００年以上も前から生きていると言われる竜。
溶岩（マグマ）の中を泳ぐ事もできる程の硬い鱗を持ち、
火国（ヒコク）の竜人と呼ばれる実力者達の魔法を受けても
傷一つ付けられない。
　過去に聖剣の勇者との約束により異世界の人々には不干渉という
状況であるため
そこまでの脅威は感じられていない。
　ただし、大切な卵を壊そうとする者達には容赦なくその牙を向け
る。

・魔法印（まほういん）
手紙を出すために封筒に封をするためのものであると同時に、差出人を特定するための証拠となるもの。
拓也（タクヤ）の世界での指紋のようなもの。

・魔晶石
魔力を増大させる特殊な石。
土国（ドコク）が国の予算をつぎこんで、開発しているモノである。
自国の武力の無さを補うために魔晶石を売ることにより他国との友好的な関係を築いてる。

【第二章】登場人物紹介・用語補足・◆更新報告（後書き）

>i34940/3993<

>i35213/3993<

第8話　亡霊からの手紙

――――――――バタンッ

客室のドアが盛大に開く。

『私に断りなく主様(ぬしさま)を呼び出すとは、
いい度胸だな淫乱ホワイト？
だが私の目の黒いうちは……ホギャー！！』
（お前の場合は、黒というよりは赤だがな）

客室に入って早々蹴り飛ばされ地面を転がる火の聖霊に
少年は心の中でツッコミを入れる。

『誰が淫乱ホワイトですか！
その下品な言葉遣いをやめないと、蹴り飛ばしますよ！』
（いや、ルメリアさん、既に蹴ってます）

視線を移した先の姫様にも心の中でツッコミを入れる。

『おのれ淫乱ホワイト
今日という今日は……プギャー！！』
『まだ言いますか！』

目にも止まらぬ速さで火の聖霊に接近した後にものすごいスピードの
回し蹴りが放たれる。

（この人って、実は感情的になると口よりも先に手が出るタイプ

だな）
部屋に入った瞬間に始まった謎の戦いにさてどうしたものかと考える少年。
『止めた方が宜しいですかね？』
隣にいるメイドのフウ＝リンが少年に問いかける。
『う～ん、どうしようかな
でも、とてもじゃないけど止められる雰囲気じゃないですよね？』
『仮にもルメリア様は、竜姫と呼ばれたリディア様のご令嬢です
素人が下手に手を出すと大怪我をします』
少年の問いに真剣な表情でメイドが答える。
『ですよね～』
『私はまだこちらに来て日が浅いのですが、メイド長であるダイナ様の
話ですと、これでもかなりおとなしくなった方だそうですよ
幼少期は感情的になると、壁を殴ったりしてたくさん穴を開けて、
修理費がかさんで大変だったそうです』
ルメリアの昔話にメイドが苦笑する。
（なるほど、俺も体に風穴を開けられないように気をつけよう）
『ちなみにリディア様の場合は、幼少期に火国（ヒコク）の城を全焼させた事が
あるので、それに比べればかわいいものだとダイナ様は言ってました』
メイドがニコリと笑う。

（わ、笑えねぇ……）
ルメリアの母親の話に少年の顔がひきつる。
『大丈夫ですタクヤ様、万が一の事があれば私が止めに入りますので』
『え？フウ＝リンさん、これを止められるんですか？』
『はい、一応こちらに仕えてるメイド達は、ルメリア様の護衛もできる事を
条件に採用されてますので』
涼しげな顔でメイドが微笑む。
（メイドすげぇ！家事もできて喧嘩も強いってマジで万能じゃん！）
光国（コウコク）の城に仕えるメイド達のレベルの高さに、少年は目を輝かせる。

（むむ！主様（ぬしさま）が、メイドと楽しそうに話をしている
はっ！？まさかあのメイド、主様（ぬしさま）をたぶらかそうと）
主（あるじ）の貞操の危機を感じ取って、火の聖霊が拓也（たくや）のもとに駆け寄ろうとするが、そこにルメリアが両手を広げ、立ちふさがる。
『まだ、話は終わってませんよ！』
『ええい！うっとしい、淫乱ホワイトそこをどけぇい！』
邪魔者をのけるために火を放とうと構えるが、思い止（とど）まる。
（はっ！いかん、主様（ぬしさま）との約束を破るとこだった
あぶない、あぶない）
ふぃーと手で額の汗を拭う仕草をする火の聖霊に、鋭い拳が飛んでくる。
『誰が淫乱ホワイトじゃぁあああ！！』

『げぶぅっ！？』

殴られた反動で地面を転がる火の聖霊。

『くそぉ！調子にのりおって……火さえ使えればお前など』

わなわなと体を震わせ、目の前に立ちふさがるルメリアを睨みあげる。

（しかし、今日は何も燃やさなければ、主様がおでこにキスをしてくれると

言ったのだ！何としても私はおでこのキスを手に入れ、主様と添い遂げる！）

主様への熱い想いを胸に秘め、少女は宿敵に立ち向かう。

『お前の血は何色だぁああ！！』

『赤だぁああ！！』

火の聖霊からの問いかけに答えつつも、放たれた拳をルメリアはひらりとかわし

カウンターパンチをくらわす。

『グハァア！！』

宙を舞い、地を転がり、それでも火の聖霊はまた立ち上がる。

（こいつを倒さなければ私は主様のキスを手に入れられない

立つんだ火霊！主様のキスを手に入れるために！）

殴られすぎたせいか、だんだん主の約束と己の妄想が

ごちゃまぜになってくる。

『主様！ちゅぅううう！！』

『何ですか！その顔は！馬鹿にしてるのですかっ！！』

これだけ叩きのめされても余裕の表情どころか、馬鹿にしてるとしか思えない
火の聖霊の表情に、ルメリアの怒りは頂点に達する。

『キェエエエエエエ！！！！！』
『ホゲェエエエエエエ！！！！！』

光国（コウコク）の姫様から振り下ろされた怒りの鉄拳が
火の聖霊の顔に勢い良くめりこむ。

～・～・～・

火の聖霊の反論を無視して、少年があやまる。

『ぬぐぅ……す、すみませんでした～』

不満タラタラながらも主(あるじ)があやまってるので
仕方なくと言った感じで、火霊もあやまる。

『いえいえ、こちらこそお恥ずかしい所をお見せして
申し訳ございませんでした』
（もぉ～私としたことが、どうして火霊(ヒレイ)の挑発にすぐに
乗ってしまったのかしら？戒めなければ！）

『コホン……それでは本題に入りますね』

火の聖霊の挑発に対して、自分の予想以上に感情的になる部分を早く
コントロールせねばと今一度心に決め、拓也を呼び出した理由について語り始める。

『まずは、こちらを読んで頂けますか？』
『はい、手紙……ですか？』

姫様に手渡された手紙を少年は読み始める。

『これは……』
『主様(ぬしさま)？何が書いてるんですか？』
手紙の内容を読み始め、驚きの表情を見せる主(あるじ)を見て
火の聖霊も覗き込むようにして、手紙を読み始める。

『むむむ？聖剣の勇者様を……噴水の前で待つ？何ですかこれ？』
眉間に皺を寄せて、火の聖霊が主に問いかける。
『誰がこの手紙を？』
『差出人は水国の姫君です』
『えっ？姫様？ど、どういうことですか？』
何故、水国の姫様が自分宛てと思わしき手紙を
出してきたのだと、いいたげな困惑した少年の表情に、同じ事を
考えたのか、ルメリアも困惑の表情を見せる。

（女？待ち合わせ場所を書いた手紙……ハッ！？ということは、
主様宛てのラブレター！！）
火の聖霊だけ違う答えを導き出し、なぜかルメリアを睨みつける。
『主様をたぶらかす女を増やすとは
どういうつもりだ！淫乱ホワイどぶぅうう！！』
すべてを言い終わる前に、火の聖霊の顔にルメリアの剛拳がめり
こむ。
『お黙りなさい！淫乱聖霊！』
『ぬぉおお！目の前が真っ暗に！主様ぁ？どこですかぁ？』
フラフラと立ち上がり、己の主を手さぐりで探し出す火の聖霊。

『え～と、自分はその方と面識が無いと思うですが……』
『う～ん、そこなんですよね
この手紙には、不可思議な所がたくさんありまして
私も真偽を確かめきれずに、困っているのです』
亡者のように部屋の中をさ迷う、火の聖霊を無視して二人は会話
を続ける。

『ただ、確実に分かっている事が、一つだけあります』
『何ですか？』

『ええ、こちらにその手紙を入れてた、封筒がございまして』
手紙が入ってたと思わしき封筒を少年に見せる。
『問題は、此処(ここ)にある魔法印(まほういん)というものです』
『魔法印(まほういん)？』
『はい、魔法印(まほういん)というのはですね、手紙を出すために
封筒に封をするためのものであると同時に、差出人を特定する
ための
証拠となるものです』
『へぇ』
『この特殊な加工をされた魔法印に、己の加護を通して封をする
のです』
実際に、封筒に封をする仕草をして、少年に実演してみせる。
『己の中にある加護の作りについては、同じ人はいません
誰が以前、その魔法印に封をしたかの記録さえあれば
差出人の特定が可能なのです』
『ふ～ん、指紋みたいなものですかねぇ？』
『指紋？』
『あっ？いえ、何でもないです、こっちの話です』
ルメリアは一瞬不思議な顔をするが、何事もなかったかのように
話を続ける。
『彼女とは面識が有ります
以前、手紙のやりとりもしてましたし、記録も残ってます』
『はぁ……』
記録が残って、姫様からの手紙だという確証がとれても
結局なぜ面識の無い自分宛てに、手紙が来たのかの理由が分からな
い。
腕を組み、少年は考え込む。

『これは間違いなく、水国の第二皇女であるミスティア姫からの手紙でしょうね
ただ……』
『ただ？』

話を続けたものか、どうしようかと悩む姫様に、少年は首をかしげる。
『どうしたんですか？』
『それが……』
『？』

意を決したように、ルメリアは話を続ける。
『亡くなってるんです』
『えっ？亡くなってる？どういうことですか？』
『正確には3年前に突如行方をくらまし
水国の公式発表では、亡くなった事とされてるのです』
『つまり？』
『この手紙は亡くなられたはずのミスティア姫からの
タクヤ様宛てに届けられた、手紙ということになるのです』
その驚きの事実に少年は息をのむ。

『はい、私も驚いてます
母様（かあさま）とも相談したのですが
この件に関しては、タクヤ様にも協力をお願いしたいのです』
『と言いますと？』
『この件については、真偽を確かめに水国へ調査に行ってほしいのです』
真剣な表情でルメリアにお願いされ、少年は今一度その手紙を見る。

『真実を知りたくはないですか？』と書かれたその手紙を。

～・～・～・

『観光目的という事で入国許可を求めているのは良いが
遠まわしに、この者が見たいものは極力嘘偽りなく開示せよ
という言い方なのが気になる』

まるで王族級の扱いだなと、手紙の文面を睨みつける。

『光国（コウコク）の大切な客人とあるが……
たしかに、私の知っている王族の中には無い名だな』

自分の記憶の中にある各国の王族の名前を今一度呼び起こし
照合してみるが、同じような名の者が出てこない。

『まあ、いい……
竜姫が何を考えて送りこんで来るかは分からぬが
すぐに正体をつきとめてやる』

適当な監視でもつければ良いかと独り言を言い、手紙を握りつぶし放り投げる。

『フフフ……
ホンジョウ　タクヤ殿よ、せいぜい観光とやらを楽しんでいけ』
怪しげな笑みを浮かべる女性が見下ろした先に、どこからともなく大蛇が現れる。

『ただし、水国（スイコク）には凶暴な蛇が多くてな……』
大蛇は女性を一瞥した後、舌を何度かチロチロと出し、餌と勘違いしたのか
口を大きく開け、床に落ちた手紙をゆっくりと飲み込んでいく。

『この国の蛇の牙にある毒は猛毒ゆえ、

せいぜい余計な詮索をして噛まれぬようにな』

床を這いずりまわる大蛇を見下ろし、邪悪な笑みを浮かべ、クスクスと笑う水国の王女の瞳が蒼から、仄暗い紫色に染まる。

第9話　レイティア湖の記憶

3年前――――――――

『どうした、ミスティア？
私をわざわざこのような所に呼び出して
大事な話とは何だ？』
『……』
夜風にその身を任せ、涼しげな顔でレイティア湖をみつめる女性
とは
対照的にその横に立つ少女は厳しい目で女性をみつめる。

『お姉様、どうしてですか？
なぜこのような事をするのですか？』
『何の話だ？』

大きな湖の上にある切り立った崖に対峙する二つの影。

『最近臣下の者達の不審な死が目立っております』
『それがどうした？』
『彼らは皆、お姉様に反感を抱く者たちでしたが
今回の件に関しては目に余るものがあります』
『ほう、その言い方から察するに
私が手を出して殺したと言ってるのか？』

問いかけられた女性は涼しげな顔で目の前の少女を見つめる。

『……』
『証拠でもあるのか？』

『証拠はありません、しかし……』

少女は目の前の女性を見上げる。

『何か隠し事をなさってるのではないのですか？』

『隠し事？何も隠してなどいない』

少女の問いかけに女性はフフフと笑う。

『最近のお姉様には不安なものを感じます

この世には存在しない魔力という言い方が正しいのかは分かりませんが

私達王族が使う水の魔力とは違う何か、邪悪な気配とでも言うような……』

『……』

邪悪な気配という言葉に反応した女性の表情が曇っていく。

『！？』

次の瞬間、女性の背後から黒いもやのようなものが現れる。

無言で少女を見つめる女性から、今まで感じた事のない魔力を感じとって

少女が言葉を止める。

『感が良すぎるのも困りものだな

やはりお前だけはごまかせんか、ミスティア』

『お姉様？』

寒気にも似たその感覚に少女が後ずさる。

『お姉様、何ですかそれは？』

『私はお前が嫌いだった』

少女の問いかけを無視し女性は独り言を呟く、懐から出されたその手には
闇夜に浮かぶ月の光に照らされたナイフが光る。

『幼き頃から天才と呼ばれ、その魔力の強大さから
初代女王であるレイティア姫の再来とも言われたお前が……』
『お姉様？』

ゆっくりと近づいてくる女性に異様なものを感じ、少女は後ずさるが
逃げ場は無く、後ろを見下ろすと切り立った崖から巨大な湖が見える。

『お姉様、その目は？』
女性の蒼く煌めいてた瞳が黒に染まっていく。

『まさか、闇に堕ちてしまったのですか？』
驚愕の表情を浮かべる少女に静ずかに女性が近づく。

『さようなら、ミスティア』
サクリと小さな音が静寂の闇の中に聞こえ、少女が後ろによろめく。

『お姉様……』
腹から溢れ出る血を押さえ、悲しそうな表情を見せ、目の前の女性に何かを
言った後、少女は崖下に落ちていく。

女性がその巨大な湖を見下ろすと、水面が大きく波打っていた。

『……』
『これで邪魔者は消えたわね
後はあなたの好きなようにやれば良いわ』
無言で湖を見下ろす女性の背後から出ていた黒いもやが人の形となる。
『……』
『さあ、湖にあれを落として
そうすればこの国の者たちはあなたの意のままとなる
誰も逆らうことのないあなただけの国が、フフフ』
長い黒髪をなびかせ、うれしそうに少女が笑う。
『どうしたの？まさか今更怖気づいたとでも言うの？』
『……いや、何でもない』
そう言って女性は懐から小瓶（こびん）を取り出す。
小瓶の中を見ると、どろりと黒い液体がその中で意思を持ってるかのように蠢いてる。
ナイフの刃に己の指の腹を当てゆっくりと動かす。
そして、小瓶の蓋を開けその中に己の血を入れる。
しばらくした後に小瓶の中にあった液体が黒に近い紫色に変化する。
血を吸いこんだためか液体が更に激しく蠢く。
『魔王とやら、本当にこれを落とせば私に絶大な力が手に入るのだな？』
『そうよ、それであなたはこの世の誰にも負けない強大な魔力を

手に入れるの
さあ、早く
それを湖に入れて』
急かす様に黒髪の少女が囁く。

『……』
小瓶の中をしばらく見つめた後、女性はその中身を湖に落とす。

『フフフ、これで世界はあなたのもの
これからが楽しみね、時代が大きく変わるのを私は遠くから
ゆっくり眺めているわ』
楽しそうに少女は笑い、そして闇の中に消える。

（もはや、後戻りはできない
私は闇の力を手に入れ、この国の王となる）

刺した者の血と己の血が混じったナイフをしばらく見つめた後、
女性はそれを湖に放り投げる。

（餞別だ……持っていけ）

長い蒼髪をなびかせ、女性は闇夜に消えていく。

～・～・～・

湖の中を泳ぐ一つの影がある。
（綺麗……）
昼とは違い、月の光に照らされ蒼く透き通った美しい夜の顔を見せるその湖に
魅せられ、それは嬉しそうな表情を浮かべる。
（フフフ、ずっとこの中でこうしていたいけど
そろそろ外の世界にも出ないとね
体の使い方もだいぶ分かってきたし）
己の体を確認するような仕草をし、それは湖の中をゆっくりと泳ぐ。
（ここはすごく居心地が良いからなかなか出たくないんだけど
探しモノもしないと行けないしね）
今日は月が綺麗なので、なんとなく外に出たい気分になり、それは地上を目指して
楽しそうに泳いでいく。
――――――――ドボォォン！
突然、頭上に何かが落ちてくる。
湖に棲む者は驚いたような表情を浮かべ、おそるおそる落ちて来たものに近づく。

（何かしらコレ？
人？女性かしら？）
己の中にある断片的な記憶から、落ちて来たものが女性であると判断する。
（この赤いのは何かしら？）
落ちて来た女性から、湖の中に広がるようにあふれだす赤い液体に、
湖に棲む者は目を鋭く細める。
（血ね……お腹からでてる
ん？刺されたの？）
女性の腹から血が出てるのを確認し、その血の記憶をのぞいてみる。
（かわいそうにね
まあ、私にはどうする事もできないんだけどね）
湖に棲む者は落ちて来た女性を回収し、地上に向かって泳ぎだす。
（とりあえず、このままじゃ死んじゃいそうだし
適当に外に放り出して置いとけば良いかしら？）
せっかく綺麗な湖を楽しんでたのに、湖を赤く染めるそれに台無しにされたと
不機嫌な表情を浮かべつつ、どうしたものかと考えながら湖に棲む者は泳ぐ。
――――――――ポチャン

女性が落ちて来た所と同じ所にまた何かが落ちてくる。

『！？』

次の瞬間落ちて来たものがものすごい勢いで湖の中に広がりだす。

『何これ！？気持ち悪い！！』

何かが落ちてきた所に視線を移すと、透き通るような蒼い湖が黒に近い紫色に
染まり始めていた。
吐き気をもよおすようなそれに、湖に棲む者は驚愕の表情を浮かべる。

『湖が……汚れる！！』

湖に棲む者は蒼い瞳を煌めかせ、両手を広げ、急いで己の中にある魔力を
全て解き放つ。
湖の中が強大な魔力に包まれ、湖への浸食が止まる。

（とりあえず、浸食は食い止めれたかしら？）

なおも広がろうとするそれを湖の表面部分でなんとか隔離する事に成功し、
安堵の表情を浮かべるが、次の瞬間には怒りの表情を浮かべる。

（こんな綺麗な湖を汚そうとするなんて許せない！）
怒りに震え、落ちて来たものをそのまま返してやろうと、
何が上で起こってたかを調べるために、先程落ちて来た少女から

血の記憶を探る。

目の前にいる女性と何かを言い合ってるような映像が見える。
しばらくした後に突然、記憶の持ち主が女性に刺される。
ふらつきながらお腹をおさえ、記憶の持ち主が後ずさる。
さらにとどめを刺そうとするつもりなのか、目の前の女性が
ゆっくりとこちらに近づいてくる。

『お姉様、私はやはりいらない子だったのですね？』

その言葉は目の前の女性に言ったものなのだろう。
その言葉を聞いて、女性の動きが突然止まり、苦しそうな表情を
浮かべた所で記憶が終わる。

『……』

湖に棲む者はしばらく考えるような表情を見せた後、少女と一緒に
落ちて来たナイフを回収し、既に意識を失ってる少女と共に
仄暗い湖の底へゆっくりと沈んでいった。

第１０話　異国の旅（前書き）

今回は苦手な戦闘描写にも挑戦してみました。
戦ってる雰囲気が少しでも伝われば、これ幸い！

第１０話　異国の旅

『この森を抜けたら、すぐに水国（スイコク）が見えます』
『……』

街へと続く街道をガタガタと揺られながら、森の中を荷馬車が移動する。

『この辺の道は舗装されてないので、少々揺れますが、もう少しの辛抱です』
『……』

荷馬車を誘導する赤髪の男が、心配そうに中にいる少年に声をかける。
しかし、少年は男の問いかけに答える事は無く、終始うつむき加減で
大きな剣を腕にかかえるような体勢で目を閉じている。

『んっ？何だあれ？』

赤髪の男が視線を前に移すと、フードを頭から被った怪しげな人が道を遮るように立っている。

『はいはい、止まって止まって
まったく、何だよ、もぉ……』

馬を止め、若干いらただしげに男は荷馬車から降りる。

『おいおい、道の真ん中で何やって、うぉっ！？』

声を掛けようとした瞬間、目の前の人間が腰に下げた鞘から剣を引き抜く。
そして、フードの中から金の瞳を輝かせ、剣を構える。
『抵抗するな、抵抗しなければ、命までは取らん』
男が何か指示を出すと、森の中から複数の人間が出てくる。
『はぁ、盗賊かよ
ついてないな……』
『悪いが金目のものをもらっていく』
ため息をつく赤髪の男に、フードを抜いだ金髪の男がニヤリと笑う。
『てやんで、バァロオォ！
こっちはどんな荷物でも確実に届ける、一流の運び屋で通っているんでい！』
荷馬車から降りた赤髪の男は、周りと取り囲む者達を睨み返し、腰に下げた剣を鞘から引き抜く。
『盗賊が怖くて、運び屋がやってられっかよ！ペッ！』
手に荒らしく唾をかけ、剣を構える。
『フンッ！後悔するなよ！やれっ！』
リーダーと思わしき男の号令の下、周りを囲んでいた者達が被ってたフードを脱ぎ、
剣を構える。

男達が詠唱魔法を唱えると、その剣に激しい光が走る。
『けっ！雷国（ライコク）の連中が盗賊の真似事かよ』
『クックックッ、降参するなら今のうちだぞ』
『誰が、降参するかよ、
おらよっと！隙ありっ！』

瞬間、男は目にも止まらぬ速さで一人の男に近づき、反射的に振り下ろされた
剣を跳ね返し、回し蹴りをくらわす。

『ぐはっ！』
『こいつ、できるぞ！油断するな！』
『オラオラ！どうした、どうした！』

男に飛び掛ってくる者達の攻撃を、己の剣で巧みにはじき返す。

『ちっ！調子に乗るな！
これでも喰らえ！』

リーダーが詠唱魔法を唱え、男の隙をついて手から雷を放つ。

『ぐあああ！』
『今だ、殺れ！』

雷にうたれ、倒れそうになる所に一人の男が駆け寄る。

『なんちって』
『！？』
瞬間、近づいてきた者に回し蹴りをくらわし、その肌から小さな

光の粒子を
撒き散らし、男はニヤリと笑う。
『その魔法は……
貴様、火国の者では無いのか！？』
『残念、俺の得意魔法は光だぜ！』

してやったりと赤髪の男はニヤリと笑い、動揺する盗賊達に飛び掛かる。

『おい、何か劣勢っぽいぞ』
『チッ！何やってんだあいつら
とりあえず、金目のものだけ取っていくぞ』

赤髪の男にばれないように、森の中から荷馬車の陰に隠れるようにして
近づいてきた盗賊達が、荷馬車の中に入ろうとする。

『早くしろよ！』
『分かってるよ、オラオラ抵抗するな
抵抗すれば殺すぞ！』
荷馬車の中にいる少年を脅すように、盗賊の一人が中に入る。

『おっ？綺麗な宝石じゃねぇか
グッヘッヘッ、その剣をもらっていくぜ』

おびえているのか、体をプルプルと震わせている少年の剣を奪おうとした瞬間、
男は輝くような紅色の光に包まれる。

『ぎゃあああああ！』
『な、なんだ？』
荷馬車の中から突然叫び声がし、男が荷馬車の中から飛び出る。
『アチィ！アチチチチ！』
飛び出た男が地面を転がる。よく見ると髪の毛が燃えており、男は必死に
火を消そうともがいている。
『何だてめぇは！？』
男達が荷馬車からでてきた赤髪の少女を睨む。
少女は男達の問いかけを無視し、何かを探すように周りを見渡す。
『何を遊んでるんだあいつは？』
少女は不機嫌そうな顔をして荷馬車を降りると、周りを取り囲んでる
男達を無視して歩き出す。
『てめぇ！無視してるんじゃねぇ！』
一人の男が少女に剣を振り下ろす。
――――――――ジュウゥゥゥゥ
『へっ？』
男が振り下ろした剣を持ち上げると、少女に触れた部分が無くなっていた。
正確には消えているというよりは溶けているという感じであり、

無くなった
部分からは強烈な熱気がでている。
『ふむ、なるほどな
お前達が原因か』
剣を構え荷馬車を取り囲む男達を一瞥した後、少女はようやく今の状況を
理解したという風に頷く。
『てめぇ！ふざけんな！
俺の髪を燃やしやがって、ぶっ殺してやる！』
髪が焦げた男が怒りの表情をあらわにして、少女に近づく。
目の前の少女は、声を掛けてきた男に視線を移し、ニヤリと怪しげな
笑みを浮かべる。
『そう言えば、さっきお前、主様(ぬしさま)を殺すとか言ってたな？』
次の瞬間、少女の背中から炎が左右に走り、それが翼の形になる。
少女の周りにいた男達が突然のできごとに悲鳴をあげ、逃げ出す。
『ヒィッ！？』
少女から放たれる強烈な殺気に目の前の男は腰をぬかして、地面
にへたりこむ。
『やってみろよ？
お前がどれだけできるのかは知らんが、主様(ぬしさま)に手を出すという
のなら

私が相手になってやる』
少女はその瞳を大きく見開く。笑みを浮かべるその口は耳まで裂けている。
男を睨む少女の体が紅色に発光し、炎に包まれる。
炎はみるみるうちに大きくなり、天高く舞い上がり、その先にあるものが
男を見下ろす。

『ひ、火竜だと？
なんだこいつは？』
赤髪の男と対峙していたリーダーらしき金髪の男が、驚愕の表情を浮かべる。

『おいおいおい、護衛もつけねぇから何事かと思ってたけど、そういうことかよ』
赤髪の男が苦笑を浮かべる。

『チッ、撤収だ！』
舌打ちをし、リーダーが他の者達に合図をする。
『ちょっ、てめぇ逃げてんじゃねぇぞ、コラァ！』

赤髪の男を無視して、盗賊達は蜘蛛の巣を散らしたように森の中に逃げていく。

荷馬車の周りにいた男達も撤収の合図を受け、慌てて逃げ出すが盗賊達の
うちの一人が足をもつれさせ、荷馬車にぶつかる。
ガタガタと大きく揺れる荷馬車から、黒髪の少年がよろよろとでてくる。
その顔はひどく青ざめており、傍から見ても体調が悪いのすぐに

分かる。

『うっ』

一瞬口を押さえるが、我慢の限界だったのかゲロゲロと口から吐き出す。

『ぬ、主様(ぬしさま)！？』

火竜の背中から少女が飛び出し、慌てて少年のもとに駆け寄っていく。

『火竜に人型の聖獣召喚？
本当に何者だこの人……』

火竜に威嚇され、泡を吹いて気絶している盗賊と、その中からでてきた少女に
背中をさすられ、介抱されている少年を男は終始、不思議そうに見つめる。

～・～・～・

『いやぁ、護衛も付けずにいた理由をすごく疑問に思ってましたが、
上級魔道士のかたでしたか』
『いえ、別に魔導士とかじゃないんですけどね』
『またまた、聖獣召喚の中でも竜召喚の類は最も難しいとされてます』
『ああ、みたいですね』
『リディア様から大切な客人と言われて、俺一人でどうやって護衛したものかと
悩んでましたが、なるほど、先生程の実力者の方でしたら、たしかに護衛は
必要ないですね』

納得したように男はうなづく。

『あのぉ、ダンネさん
その先生って言い方やめてもらえませんか』
『ダンです』
『えっ？』
『親しい人間からはダンと呼ばれてます
いやあ、しかし大先生の魔法はすごいですね』
『ええっと……』
『俺の知り合いにも竜人と呼ばれるようなすごいやつがいるんですが
そいつも火竜を召喚できるんですよ
あっ、でも、人型の召喚は初めて見ました』
そう言って男は荷馬車の中にいる、赤髪の少女を見る。
『あのぉ……』

『あっ、ちなみに俺は見た目が火国出身に見えますが
親父が光国出身者でしてね
得意魔法が光だったりするんですよ』
『はぁ』
『光魔法って言うのはですね
攻撃魔法としては使いにくい所が多いんですけど、防御魔法としては
どんな属性魔法からも身を守れるので、結構便利でしてね』

荷馬車を誘導させながら、男は嬉しそうに少年に語る。
本当は呼び方の訂正をしてほしかったのだが、いつの間にか先生から大先生に
昇格した事に少年はため息をつく。

『この人はどうするんですか？』
黒髪の少年が若干疲れたような表情で視線を荷馬車の中に移す。

『あ～、そうですね
とりあえず、仲間の一人は捕まえれたので、他の逃げたやつらを
捕まえるために、水国（スイコク）の警備隊に身柄を渡しておきます』
少年の視線の先には、縄でしばられ火の聖霊に燃もやされたのか
髪がチリチリの
状態になってる男と、睨むような視線で見下ろしている赤髪の少女が
男の前に立っている。

『ガルルルル』
『ヒィッ！』

何か気にいらない事でもあるのか、少女が同席している男を威嚇
し、男が怯える。

（う～ん、さっきから威嚇してるけど、盗賊の人とは言え、何か、
かわいそうになってくるな）
『火霊（ヒレイ）……こっちに来い』

少年が火の聖霊を手まねくと、少女は男との視線を外さないようにしながら
少年に近づいてくる。

『火霊（ヒレイ）、おすわり』
『ガルルルル』
男を睨みながら、少年の隣に座る。

『火霊（ヒレイ）、お手』
『ガルルルル』
男を威嚇ながら、少年の手に己の手を乗せる。

『火霊（ヒレイ）、威嚇』
『キシャァアアアア！！』
『ヒィイイイ！！』
少年と手をつなぎながら、口を大きく開け牙をむき出しにし、男を威嚇する。

（器用な事をするなこいつ、でも手をつないでることには気付かないんだな）

いつもの火霊だと手などつないだものなら、性的なサインだと勘違いして
飛び掛ってきそうだが、今は意識が盗賊の男に集中してるためか
まったく気付く様子が無い。

（なるほどな）

少年が何かを納得したように頷く。

『おぉ、すごいですね』

黒髪の少年と赤髪の少女の一連のやりとりを見て、男が感心したような表情を見せる。

『しかし、先ほども思いましたが火竜を操る程の人型の聖獣召喚となると

かなりの魔力を使うのではないでしょうか？

俺が心配するのもどうかと思いますが、大丈夫ですか？』

『何がですか？』

『いや、火竜の召喚っていうだけでも詠唱にかなりの時間がかかるので

大抵の人はその構築式を魔法発動する直前の状態まで完成させて、

己の加護に納めてますよね』

『そうなんですか？』

『ん？あれ？ん？

違うんですか？えっ？』

（あっ、やべぇ、俺もしかして非常識な発言をしてる？）

『あっ、そうです、そうです！

そんな感じです』

慌てて、少年が男に話を合わせる。

光国の城を出るときに、姫様から聖剣の勇者という存在はこの世

界では
おとぎ話のような存在で、この世界の常識に囚われない事が多々あり、
いろいろと質問攻めされる可能性があると言われたのを思い出す。

『ですよね、あ～びっくりしました
大先生、脅かさないで下さいよ！』

（正直、自分でも説明できない事が多いからな
適当に話を合わせとくか）
『えっ、でもそうなると、やっぱり必殺の魔法になるわけですよね？
すみません、俺何かのためにそんな魔法を使わせちまって』

なぜか、男が申し訳なさそうな顔をする。
『あっ、いえ、大丈夫ですよ』
『おお！さすが、大先生！！
魔力の器もでかければ、人としての器もでかいですね！
おみそれいたしやした！』
『えっ？あ、はい……』

この雰囲気だと何言ってもおかしな方向に転びそうなので、少年は仕方なくうなづいておく。

『あ～、助かります
この事がリディア様にでもばれた日には、護衛もまともにできないのかと
仕事をくれなくなって、干されてしまう可能性もありますからね
恩にきります』
『リディアさんって、やっぱり怖い人なんですか？』

『そりゃあ、竜姫って言われるような方ですよ？
えっ、もしかして怖くないんですか？』
『う～ん、あんまり怖いイメージは無いですね……』
『おお！さすが、大先生！！
竜姫さえも恐れないその力強さに、俺は感服しました！』
男は目をキラキラ輝かせ、少年をみつめる。

『ぜひぜひ、今後とも何かあればうちをごひいきにして下さい！
大先生と一緒だったら、どんな旅も安全ですね！』

先程、吐いた事で少し酔いが醒めて、気分が落ち着いてきたのだが、
水国（スイコク）にたどり着くまでは終始こんな会話が続くのかと思うと
少年は再びめまいをおこしそうな感覚になる。

『いやぁ、楽しい旅になりそうですね！』
『はぁ～、そうですね』

嬉しそうに笑う赤髪の男とは対照的に、黒髪の少年は深いため息をつく。

第１１話　噴水前の出会い

『スゥー……ハァー』

大きく息を吸いこみ、そしてゆっくり吐き出す。
修練場にて、呼吸を静かに整える一人の少女の姿がある。

その少女の前には砂袋が吊るされており、少女は何かを確認するように、
幾度となく握り締めた拳を、砂袋に触れては引いて戻すという作業を繰り返している。

『スゥー……』

最後にまた大きくを息を吸い込みつつ、瞳を閉じる。
修練場に一瞬の静かな間が出来る。

『ハッ！！』

次の瞬間、少女は燃えるような赤い瞳を見開き、流れるように腰を落とし
せいけん突きを放つ。

――――――――ドゴォォン！！

打ち抜かれた砂袋が、宙を舞い上がる。
天井に届かんばかりに舞い上がった砂袋を少女は一瞥し、
呼吸を整え、また構える。

『スゥー……』

大きくを息を吸い込みつつ、重力によって勢いよく落ちて来る砂袋に、
タイミングを合わせるように広げた手の平を突き出す。

『ヒュッ！！』

――――――――ボスンッ！！

次の瞬間、少女から流れるように静かに放たれた掌底（しょうてい）により、
少女を吹き飛ばさんとばかりに勢い良く落ちて来たそれは、
少女の手によって勢いを相殺され、ピタリと止まる。

『よし、良い感じですわね』

そう言って頷く少女の瞳からは、紅色の輝きは既に無く、
その肌と髪からは白金（プラチナ）の粒子をキラキラと周りに振りまいている。

――――――――パチパチパチ

『お見事です、ルメリア様』
少女が音のする方に視線を移すと、両手を叩き、嬉しそうな顔で
こちらに近づいてくるメイドの姿がある。

『あら、ダイナ
来てたのですか？』
『はい、たまたま修練場の近くを通りかかった時に
人の気配がしましたので覗いてました』

そう言って、メイドは砂袋に視線を移す。
『しかし、随分腕を上げましたね
私も火国の武人達が得意とする動の気を操る事はできますが、
光国の武人達が得意とする静の気を操る事はできません』
『母様(かあさま)や父様(とうさま)に比べれば、私なんてまだまだですよ』

少女はメイドに褒められて、恥ずかしそうに微笑む。
『いえ、その年でここまで見事に操つれる者はそうはいません、
私が保証します』
『ありがとう、ダイナ』

しかし、次の瞬間にはメイドの顔は暗い表情になり、少女を心配そうにみつめる。
『しかし、大丈夫なのですか？
そのように体を激しく動かしても、また以前のように発作を
起こしたりはしませんか？』
『フフフ、大丈夫ですよ
最近は体の調子も良くて、前のようにすぐに高熱が出る事も
無くなりましたので、心配しないで下さい』

ルメリアはメイドを安心させるように微笑む。
『そうですか？
それは安心しました』
『特に感情が大きく高ぶる事が無ければ、昔みたいに物を
壊したりしませんよ』

恥ずかしそうにそう言って、砂袋に手を当てながら
少女は最近の記憶を思い出す。

（一番最近、怒ったのだって……）

次の瞬間にルメリアの脳裏に浮かんだのは、少女の姿をした火の聖霊。

火霊と名乗るそれが、記憶の中で怪しげに微笑む。

（淫乱ホワイト……）

――――――――ピクッ

頬の筋肉がひきつる。

（なんだ？淫乱ホワイト）

記憶の中の火霊がルメリアを馬鹿にした表情でこちらを見ている。

――――――――ピクピクピクッ！

こめかみの血管が浮き出てくる。

（ブフォオ！淫乱ホワイト！！）

最後には吹き出して、こちらを指差し、ウケケと笑い出す。

――――――――ブチンッ！

『誰が淫乱ホワイトじゃぁあああ！！』

瞳を燃えるような紅色に輝かせ、怒りの鉄拳を砂袋に向かって打ち抜く。

――――――――ドシュンッ！！

『あっ！？』

声を出した瞬間には時既に遅く、砂袋をルメリアの拳が貫いており、砂袋から
サラサラと砂が落ちて来る。

『あぁ、やってしまいました……』
頭を抱え、少女は悲しそうに砂袋から落ちる砂を見つめる。

『だ、大丈夫ですよ
後で私が片付けて置きますので』
『ごめんなさい、ダイナ』
苦笑するメイドにあやまりながら、少女はため息をつく。

『私もまだまだですね』
『フフフ、ルメリア様はまだ若いので、焦る必要はありませんよ
どうですか？せっかくなので一つ稽古の相手でもしましょうか？』
『あっ、本当に？ぜひ、お願いしたいわ』
『そうですね、それでは着替えをしてきます
今のルメリア様の実力ですと、さすがにメイド姿のままで相手をするのは
難しそうなので』
しばらくお待ちくださいと言って、メイドは更衣室に着替えをするために
その場を離れていく。

メイドの後ろ姿を見送りつつ、少女は物思いにふける。

（そろそろ、タクヤ様も向こうに着いた頃ですかね

母様(かあさま)は火霊がいれば、護衛を付ける必要はないと
言ってましたが……）

火の聖霊の実力はこの目で見てるので、ルメリアとしてもたぶん問題は
無いと思ってる。
しかし、少年にとっては初めての旅、信用できる者を案内役として付けてるので問題無いはずなのであるのだが、それでも心配そうな表情で、
視線を宙に向ける。

（何事もなければ、良いのですが……）

～・～・～・

『ていうか、場所は書いてても、日付も時間の指定も無いんじゃ
会う事が難しいような気が……』

今更ながらに気付いた事実に、黒髪の少年は苦悶の表情を浮かべる。

（ていうか、国の姫様がこんな所で待ってるとも思えないし、
誰か代わりの人が来るとしても、お互い面識も無いんじゃ
ぶっちゃけ会うのは無理じゃね？）

はぁと大きくため息をつき、少年は背負ってた長剣を隣に下ろし、噴水に腰掛ける。
どうしたものかと考え事をしつつ、噴水から流れ出る水に視線を移す。

（へぇ、綺麗な水だな、天然の水なのかな？）
底が見えるくらいに透き通った水を手ですくい、匂いを嗅いでみる。

（消毒液の匂いはしないし、山から流れて来た自然の水なのかな？）

さすがに水国（スイコク）と言われるだけの事は有り、水をふんだんに使った施設が多い。
噴水が街の所々に有り、ここに来るまでも随分、迷いながら歩いてきた。
最終的には、手紙にも書いていた噴水の中心に立つ、美しい女性の姿をした石像が

目印となり、なんとかたどり着けたのである。

（聖剣の勇者様と共に世界を平和に導いた姫君
水国（スイコク）初代女王　レイティア姫か……）

噴水の近くにある文字を刻まれたそれには、その石像の女性を記した名前と
その輝かしいばかりの業績（ぎょうせき）が書かれていた。
その内容から察するに、かなりすごい人なのであったのだろう。

（思えば遠い所に来たもんだな
本当にいつか、元の世界に帰れるんだろうか……）

突然この世界に飛ばされ、周りに流されるままなんとなく
今日まで過ごしてきた。
今振り返れば、小説の中だけの世界だと思ってた魔法や聖霊が出てくる
異世界での出来事に驚かされるばかりであった。

（もし、元の世界に帰れたとしても
誰も信じてくれないだろうなぁ）

少年は自嘲気味な笑みを浮かべつつ、まずは目の前の問題をどうやって
解決しようかと思考を巡らす。

（ん？魚？）

ふと、噴水から流れる水の中に視線を移すと小さな影がこちらに
近づいてくる。

――――――――バシャン！

『冷たっ！？』

それが少年の前まで来たかと思うと、突然跳ね、水が少年の顔にかかる。

『ちょっ！？何だよもぉ……』

服の袖で顔の水を荒々しくふきとる。

『へぇ、綺麗な石ね
魔力を感じるから魔晶石かしら？』

少年の隣で突然声がして、隣に視線を移すと一人の少女が、少年の長剣の
鍔（つば）にはめられた聖石を指の腹でなでていた。

『あら、こんにちわ』
『あっ、こんにちわ』
『ごめんなさい、めずらしい物を見たので
つい触ってみたくなっちゃって』
『えっ、あっ、良いですよ別に』

短い蒼髪をなびかせ、少女は少年の隣に座る。

『お兄さん、もしかしてこの街は初めて？』
『えっ？はい、そうですけど……』
『フフフ、やっぱり？
さっきから周りをキョロキョロしながら

不安そうに歩いてたから初めてなのかな？って思って』

そう言って、少女は微笑む。

（げっ、もしかして見られたのかな）

そんなに目立つような行動はしてなかったはずと思いつつ、
何度も地図を見ながらこの辺りをうろついていたから、
周りから目立って見えてたのかなと思うと、少し恥ずかしくなって
少年は若干赤面してしまう。

『こちらに来たのは、観光か何か？』
『はい、観光です』
『一人なの？』
『連れはいるんですが、ちょっと用事があるらしく
今は別行動してるんです』
『ふ～ん、そうなの』

少女は視線を宙に移し、何か考え事をするような表情をした後、
少年に視線を移し直して微笑む。

『ねぇ？もし良かったら私を買わない？』
『えっ？買う？』
『あ～、別にいやらしい意味で言ってる訳では無いのよ？
私、この町では情報屋の仕事をしてるの』
『情報屋？』
あまり聞かない言葉に少年は訝しげな表情を見せる。

『そう、この国では結構多い職業よ、知らないの？』
『自分この国は初めてなので、あんまり知らないんですよ』
『そうなの？じゃあ、なおさらね

この国は私にとっては庭みたいなものよ
行きたい所があるなら、どこへでも連れて行ってあげるわよ』
『へぇ～、どこへでもですか？』
『そうよ、どこでもよ
もちろん、その分の報酬はもらうけどね』
少女はニヤリと笑う。

『観光の期間はどれくらいを予定してるの？』
『１ヶ月くらいかな？』
『そう、じゃあ、白金（プラチナ）入り金貨３枚で仕事するわ』
『えっ、３枚！？』

こちらの通貨は下から、銅貨、銀貨、金貨、白金（プラチナ）入り金貨という順番で価値が上がっており、この噴水の場所まで来るまでに見つけた宿には
一泊銀貨５枚と書いていた。
自分の世界でホテルに宿泊した時の値段が一泊５０００円であるから、
銀貨１０枚で金貨１枚、銀貨１００枚で白金（プラチナ）入り金貨１枚の
価値があるというルメリアからの言葉を信じると、目の前の少女から言われた
値段は３０万円相当になると予想される。
（いくらなんでも、高過ぎるだろ）

ちなみに光国（コウコク）の姫様から旅の駄賃としてもらったのは、
白金（プラチナ）入り金貨５枚、つまり手持ち金の半額以上を支払う事になる。

『この街で腕利きの専属の情報屋を雇おうとすれば、大抵それくらいの
価値になるわよ、でも良い仕事するわよ？

もし、良ければ紹介料も含めて、格安の宿も紹介してあげるし、
実際に観光したい施設まで、同行もしてあげるわよ』
『う～ん、でもやっぱり高過ぎます』
少年はため息をつき、腰を上げる。
『すみません、とりあえず観光は、連れの人に案内してもらう事にします』
『そうなの？残念ね』
寂しそうな顔をする少女を一瞥した後、少年は長剣を持ち上げてその場を立ち去ろうと少女に背を向ける。
『それって、聖剣でしょ？』
背中から掛けられた言葉に少年の足が止まり、思わず振り返る。
（俺って、まだ聖剣の話をしてないよな？
たしか、ルメリアさんもこの世界の人で聖剣の事を知ってる人はほとんどいないって……）
『ちなみにその石は、聖石（せいせき）ってやつでしょ？』
少年が振り返った先にいる少女は、噴水に座ったまま視線を宙に向け、
足をパタパタと上下に揺らしている。
『この情報は、たぶんこの国の人はまだ誰も知らないわよ
ちなみに私は、この街では一番の腕利きの情報屋よ
まあ、信じる信じないは、あなた次第だけどね』
少年から向けられた視線に、わざとらく気付かないふりをしなが

らも
少女は楽しそうに微笑んでいる。

『でも、まあ、今回はめずらしい人に会えたし
特別サービスを考えてあげても良いかな？
今なら、初回限定のサービスで、まけにまけて
半額で雇ってあげられても良いわよ』
『それでも、高いんですけど……』
『とりあえず、話だけでも聞いてかない？
聖剣の勇者様』

少年に視線を移し、少女はニヤリと怪しげな表情を浮かべる。

～・～・～・

（とりあえず、水国（スイコク）の国境警備隊には盗賊の身柄は渡したし、
タクヤ様とも進展がなければ夕方くらいでいつも俺が泊まる宿で
合流するって話をしてるしな）

それまで、どうやって時間を潰そうかなと男は目を閉じる。

『へぇ、暇なんだ』

荷馬車の下から誰かの声がする。

『……』

しかし、男は何事もなかったのように無言となり、
気配を殺すように息を潜める。

『へぇ、私を無視するとは良い度胸ね』

そう言うと、突然何者かが男の上に移る気配がする。
『そんなやつにはコレをくれてやる』

一瞬、危険な気配がして男が目を開くと、一人の女性が宙高く舞い上がり
男の顔に蹴りを入れようと飛び降りて来ている。

――――――――――ドスンッ！

『ぬおっ！？てめぇ、何しやがる！
あぶねぇじゃねえか！？』

寸前の所で女性の蹴りを避け、男は怒りの表情で起き上がる。

『フンッ！私を無視するお前が悪いんだよ』
女性は左手を腰に当て、右手で蒼に染めた髪をかき上げ、男を見下ろす。

『ダン、暇なんだろ？』
女性は腰を下ろし、ニヤリと笑い、男を見つめる。

『暇じゃねぇよ、俺は忙しいんだよ』
『さっき、暇だって言ってたじゃない』
『ていうかなんで、お前がここにいるんだよ、アリサ』

訝しげな表情で、男は目の前の女性を見つめる。

『仕事よ、し・ご・と
リディアから頼まれてる事があるから
その用事をしてる所よ』
『なんだよ、用事って
ていうか、俺もリディア様から大切な用事を
任されてて忙しいんだよ
ほら、あっちいけ、しっしっしっ』

もうお前には用はないと、男は追い返すように手を振る。

『用事って、聖剣の勇者様とやらの案内役でしょ？』
『なんで、お前がそれを知ってんだよ』
不満気な表情で、目の前の女性を男が睨みつける。

『私も似たような用事を頼まれてるから
それで、どうなの？聖剣の勇者様ってやつは、強いの？』
『あん？そりゃあ、お前、強いってもんじゃねぇぞ！

特に聖霊ってやつは、こう背中から火の翼がブワァーっと広がってさあ、
首がビューンっとこう伸びて竜になってさ、
火をブヲォーっと吐いて威嚇するんだぜ！
詠唱無しで、あんなめちゃくちゃな魔法するやつは見たことねぇぜ！』
嬉しそうに赤髪の男は、黒髪の少年と行動を共にした時の事を話す。

『なるほどね、ダン
さっぱり分からないわ
とりあえず、一発殴って良い？ていうか、殴る』
『へっ？ぐはっ！？』

そう言って男はいきなり目の前の女性におもいっきり殴られ、荷馬車から転げ落ちる。

『てめぇ！何しやがんだ、コラッ！』
『何しやがんだじゃねぇよ！
人様に説明をする時は、相手に分かりやすく説明しろっってんだろ？』
そう言って、蒼髪の女性は荷馬車から飛び降りてくる。

『とりあえず、リディアに報告書を書かないといけないから、ついて来い！
後、この街で調べ物するから、お前もとりあえず付き合え、暇なんだろ？』
男の首根っこを捕まえ、女性は男を無理矢理連れて行く。

『ふざけんな！おい、ババア！』

『誰がババアじゃ、ゴラァ！！』

――――――――メゴォオ！！

『ぐぼぉ！？』

女性から振り下ろされた拳が、男の顔面に勢いよく当たり、鈍い音を放つ。

『まったく、死んだ人間の捜索なんて、どうやってやれば良いのよ？

とりあえず、最近よく噂になってる、死んだ姫様の亡霊が街で出るっていう

情報から調査しに行くよ！って気絶してるし！？』

そのまま気絶した男を、あきれた表情で見下ろした後、

まあいっかと言って男をひきずりながら、街に連れて行く。

第12話　情報屋のスイ

3年前――――――――

ベッドの上で眠る一人の女性。
頬はひどく痩せこけ、一見すると老婆のようにも見える。

（ひどいものだな……たった一ヶ月で、ここまでの状態になるとは）
自分の体の状態を確認しようと上体を起そうとするが、予想以上に力が入らず、
すぐにあきらめる。

（力を求めるあまりに、例の教団に接触した結果がこれか……）
くやしさのあまり歯軋りをしようとするが、口元にも力が入らず、それもあきらめる。

（人の魂をも弄ぶ、禁忌の闇の魔法か
なるほど、この世界に伝えられていないのも納得できる）

どこからともなく吹いてきたそよ風が、女性の肌をなでる。
（だが、それも今となっては、もはや何もかもがおそい
私は奴の手の平の上で、もて遊ばれ、
後は、このまま朽ち果てていくのみ）

女性の眠るベッドの傍らに、何者かの気配がする。
眠っていても分かるぐらいの強烈な魔力に、女性は心の中で苦笑する。

（暗殺者を雇ってきたか
好きにしろ、今の私には、何の抵抗もできぬ）

女性の唇に何かが触れるような感触がして、口の中に
何かの液体が流れ込んでくる。

（毒か……証拠を残さぬ良い手だな
私もよくやったものだ）
その者が流し込んだ液体を受け入れ、私にはお似合いの末路だな
と苦笑する。
だが、次の瞬間には驚き、女性は閉じていた目を開く。

（どういう事だ？体に力が入る）
液体が体中に染み渡り、朽ち果てていくだけだった体の急激な変
化に驚き、
女性はよろよろと上体を起こす。

黒に近い紫色の瞳が、ベッドの傍らに立つ者を見つめる。

『お前は何者だ……』

女性の問いかけに、透き通るような蒼い瞳を持つ少女が微笑む。

～・～・～・

『居酒屋　人魚姫（マーメイド）？』

眉をひそめ、黒髪の少年は建物の前にある看板を読む。

『心配しなくても大丈夫よ
お酒を飲まなくても、食事くらいはできるわよ』
少年の心配事を悟ってか、蒼髪の少女が苦笑する。

『ほら、入るわよ』
『うーん……まあいっか、こんちわー』
未成年だけど大丈夫か？、と不安になりながら少年は店に入る。

『あっ、いらっしゃい
あら？、スイじゃない、まだ日も暮れてないのに、えらく早いわね』
店内に入ると、この店の人らしき女性が笑顔で出迎える。

『今日は、お客さんが早く見つかったから
早めの出勤よ』
『夜の準備はこれからだから、今はお昼ご飯しかだせないわよ？』
『おそめの昼食を食べに来ただけだから、大丈夫よ』
困ったような表情を見せる女性に、少女は笑顔で答える。

『あらそうなの？まあ、ゆっくりしていきなさい』
『あそこに座りましょ』
そう言うと少女はカウンターの席に座る。

（う～ん、なんかこの人の衣装、どっかで見たことあるような）
出迎えた女性の衣装に釘付けになりながらも、少女の隣に少年も座る。

（なんだっけかな？
チャイ……なんとかドレスだっけかな？）
歩くたびにサイドスリットから太ももが見え隠れし、体のラインを強調させるようなその独特の衣装の名前を、思い出せそうで思い出せない状況に
腕を組み、うーんと少年はうなり声を上げる。

『めずらしい服でしょ？
風国（フウコク）のドレスよ』
女性を食い入るように見つめる、少年の視線に気付いたのか、スイと呼ばれた少女が答える。

『この店はね、この街ではめずらしく
風国（フウコク）の郷土料理が食べられる店なの
エレナは……たしか昔、風国（フウコク）に住んでたんでしょ？』
『そうよ
ご希望があればこちらでは食べられない
米を使った料理も作れるわよ』
そう言うと、少女からエレナと呼ばれた女性は、米が入った袋を少年に見せる。

『え？米？
米が食べられるんですか？』
こっちの世界に来てから、今までパンを主食とした食事ばかりだったので、米料理は

あきらめていたのだが、まさかの米という単語を聞き、少年は驚きの表情を見せる。

『あら？水国（スイコク）の事は良く知らないのに、
風国（フウコク）の米料理は知ってるの？
あなた、風国（フウコク）出身だっけ？』

少年の特徴的な黒髪と黒い瞳を見て、蒼髪の少女は不思議そうな表情をする。

（えっ？米料理で出身とかバレるの？
まずったなぁ……そういえば、出身を聞かれた時の適当な話を考えてなかったなあ）

『フフフ、まあ良いわよ
あなたの事はこれから色々聞くことになるから
先に注文しましょ、それで？米料理にするの？』

さて、どう答えたものかと頭をかき、悩みだした少年に少女が苦笑して
注文を尋ねる。

『あっ……じゃあ、米料理でお願いします』
『エレナ、私もそれでお願いするわ』
『分かったわ、ちょっと待っててね』
そう言って、女性が厨房に入っていく。

『それじゃあ、改めて自己紹介をするわね
私はスイ、この街では情報屋の仕事の一つとして、主に観光案内をしてるわ』
『タクヤです』
『タクヤね、
それで？私を雇う気になってくれた？』

『う～ん、やっぱり、ちょっと高いんですけど？』
『そんなこと無いわよ、このあたりではそのくらいの値段が普通よ』
水差しを手に取り、コップに水を注ぎながら少女が答える。
『でも、そうねぇ
君みたいな子供だと、やっぱり高いのかな？』
『子供って、俺１８なんですけど……』
子供と言われてムッとした表情で少年は少女を睨む。
『ちなみに、私も１８なんだけどね』
（えっ？同い年？）
驚いた表情で少年が少女を見る。

『怒ちゃった？ごめんなさい
それじゃあ、お詫びのしるしに……』
少女はそう言った後に、口をモゴモゴさせ、コップに唇を近づけ、そしてなぜかコップを隠すように少年に背を向ける姿勢で何かをした後に、
少年に姿勢を向き直す。

『はい、どうぞ！』
うれしそうな表情で少年にコップを差し出す。

『いや、どうぞじゃないですよ！？
さっき、それに唾入れてたでしょ？』
『あら？何で分かったの？
ちゃんと隠してたのに』
不満そうな表情で少女は少年を見つめる。

『いりませんよ、そんなの』

嫌そうな顔で少年は少女から差し出されたコップを返そうと手を伸ばす。

『えっ？私の世界では、ご褒美です？』

『言ってません！』

どうしたらそんな風に聞こえるのか、嬉しそうな表情で少女がコップを

少年に握らそうとする。

『あら、良いの？そんな事を言って

ちなみにこれを飲むと、契約料が無料になるって言ったらどうする？』

『えっ？』

思わぬ言葉に、少年の動きが止まる。

『これを飲まずに、私の指定した契約料で私を雇うか……』

『うっ……』

怪しげな笑みを浮かべ、少女がコップを少年の顔に近づけてくる。

『それとも、私の唾液入りの水を飲み、無料で私を雇うか……』

（いや、これ飲むと同時に変態の称号も手に入れるんじゃ？）

『さあ！どっち！？』

（しかし、これを飲めば無料になるのなら……）

悪魔のようなささやきに、思わず少年の手がコップに伸びそうになる。

（あら、めずらしいわね

スイが無料で雇われる条件を出すなんて）

ウフフと怪しげな笑みを浮かべる少女と、
頭を抱え苦悶の表情を浮かべる少年との謎のやりとりを、
厨房から顔を覗かせた女性が不思議そうな表情で見守る。

～・～・～・

男はふてくされた表情で、文句を言う。
『計画って言っても、どうせその金使って、女のいる店に
遊びに行くだけでしょ？』
（ぎくっ！なぜ、ばれた！？）

ベッドの上で頬をつきながら、女性がニヤつく。
『私に隠し事をしようだなんて、１００年は早いよ
ダンはすぐに顔に出るからね』
はぁとため息をつき、男はそばにあった椅子に腰掛ける。

『それで、さっき話してた幽霊とやらはいったい何なんだ？
幽霊なんかと会ってどうするつもりだ？』
『あ～、死んだ姫様の亡霊が街に出るってやつ？
お前、本当にそんな話を信じてるのか？』
女性が馬鹿にした表情で男をみつめる。

『はぁあ？さっき、お前いろんな人に聞き込みしたりして、
真剣に探してたじゃねぇか？』
『あん？私の探し物は幽霊じゃないわよ
その幽霊とやらの噂を流してるやつの方よ』
『なんで、そんなやつを探してるんだよ』
『もちろん、何でそんな自分の身を危険にさらすような情報を
流してるかを聞くためよ』
『危険？ああ、まあ、確かに危険っちゃあ、危険だなぁ』
男が何かを納得したように頷く。

『そもそもの始まりは、３年前のミスティア姫の失踪事件』
『あ～、公式発表では行方不明って話だけど、
でも、あれって噂だと暗殺されたって話だろ？』

『しーっ！この国ではその言い方は禁句よ
気をつけなさい』
『分かってるよ、下手すれば毒姫に、俺も暗殺されるかもしれないからな』
男をたしなめる女性の意図を、見透かしたように男が笑う。
『あんたの怖いもの知らずな所は良い事かも知れないけど
話す内容には気をつけなさい』
『わ、分かってるよ、そんなに睨むなよ、アリサ……』
すごみを効かした女性の睨みに、怖いもの知らずの男も、おもわず怯む。
『まあ、でもその噂もあながち嘘じゃないかも知れないけどね
ミスティア姫の失踪事件をきっかけに、直系の王族の血を持つ者が
次々と亡くなっていった話は知ってるでしょ』
『知ってるよ
そして、残ったのが第一皇女である
サリティア姫』
『証拠は何一つないけれど
誰もがその王族達の死に疑問を抱いたわ』
『そして、その証拠を掴もうとして
探りを入れようとした者達も次々に行方不明になっていったと』
おー怖い怖いと大げさな仕草で男が両手をあげる。
『一ヶ月と言う期間で大量の人間が亡くなったわ
それ以降、彼女に逆らおうとする者は誰もいなくなった』
『それ故に公には呼ばれてないが、毒姫とまで呼ばれるようになったと』
『そうよ』

『そして、その亡くなった連中の恨みつらみが募って
姫様の亡霊が街に出るようになったと……』
男はニヤリと笑い、恨めしや～と両手を前に出す。
『んなわけあるかっ！！』

――――――――メゴォオ！！

『ぬごぉ！？』

女性から振り下ろされた拳が、男の頭に勢いよく当たり、鈍い音を放つ。

『イテテテ……冗談じゃねぇか』

頭を抱えながら、うずくまる男を見下ろしながら、女性は物思いにふける。
（しかし、この噂に関しては妙に具体的な目撃情報が多いのよね
ダンが言うように幽霊がいるとは思えないし
う～ん、まさかねぇ……）

『まあ、難しい事はまた明日考えれば良いし、私は寝る！』
そう言って、女性は布団に潜り込む。

（本当に勝手な女だよなぁ……
くっそう、こいつのせいで死んだら、化けて出てやる！）
ブツブツと恨み事を言いながら、男も自分のベッドに潜り込む。

第13話　水の聖霊（前書き）

変態について真面目に考察していたら
ゲシュタルト崩壊してきた
あばばばばば

第13話　水の聖霊

『しかし、物々しい雰囲気だな
何をおっぱじめるつもりだ？』
赤髪の青年が訝しげな表情で、物陰から森を囲むようにして立つ兵士達の様子を見つめる。

『おかしいわね、いつもだったらここの警備にこれだけの人数は、割いていなかったはずだけど』
青年の隣にいる女性も、腰をかがめその様子を見つめる。

『本当にタクヤ様が、この中にいるんかねぇ？
蟻の子一匹、入れやしねえじゃねぇか』
『聖剣の勇者君が泊まってる宿屋の主人に聞いたら
レイティア湖を見に行ったって言ったんでしょ？』
女性が男に視線を移す。

『でも、レイティア湖って、たしか3年前から規制が掛かってて、一般人は入れないはずじゃなかったかしら
今、あそこに入るのが許されるのは、王族とかだけでしょ？』
女性が眉をひそめ、男に問いかける。
『そんなことは知ってるよ、だから同じ事を宿屋の親父に聞いたら
そこに入る許可を持ってる人が見つかったから、見に行くんだってさ』
『許可もってるやつって誰？』
『情報屋のスイだってさ』
『そっちが来たか』
女性が苦虫をつぶしたような表情をする。

『スイは確かにこの街じゃ、情報に関しては信用のできるやつだけど』
『後ろについてるのが毒姫って噂があるってんだろ？知ってるよ』
女性に視線を移し、男も苦虫をつぶしたような表情をする。
『だったら、何でそんなやつに聖剣の勇者君なんかを預けたのよ』
『昨日は、泊まる宿が見つかったって話だけしか、しなかったんだよ』
『はぁ、まったく詰めが甘いねぇ……
もし、今回の事で聖剣の勇者君に何かあったら、リディアにどつかれるのは
あんただよ？』
『うっせぇ、分かってるよ』
文句を言いたいのは山々だが、自分にも落ち度があると分かってるため
男は渋々といった表情で視線を兵士達に移す。
『万が一っていう事もあるからなぁ、とりあえず様子見がてらで、こっそり
中に入りたいんだけど』
『何人か、ぶっとばして中に入るか？』
女性が自分の顔の前で拳を握り締め、ニヤリと笑う。
『バーロー、こっそりって言っただろ？
アリサはすぐにそうやって、力で解決しようとする』
『冗談にきまってるだろうが！』
――――――――ゴスッ！！
『ごふっ！？』

女性から放たれた拳が、男の腹に突き刺さる。

『てめぇ、この暴力女が……』

『冗談だったんですか？』

『そうよ、冗談よ……ってアレ？』

女性が不思議そうな顔で、腹を押さえてうずくまる男を見つめる。

『こっちです』

『！？』

突然声を掛けられ、反射的に男と反対側に視線を移すと、腕で膝を抱えるようにして、腰をしゃがめた蒼髪の少女がこちらを見上げていた。

（いつの間に……？）

驚いた表情の女性と少女が、しばし見つめ合う。

『ティアです』

小さな少女がニコリと笑う。

『あのぉ、今日は湖は大変危険なので、近づかない方が良いと思いますけど』

（私が、こんな子供に背後を取られるなんて……）

一見すると、その少女は１０歳にいくかいかないかと言う感じで、地面に

届きそうなぐらいの長い蒼髪に、青い瞳を大きく開けて、女性を困惑した

表情で見つめる。

『あのぉ、聞いてますでしょうか？』
『お譲ちゃん、心配はいらないぜ
俺達はかなりの凄腕の人間でね、二人揃えば１０００人くらい
ちょちょいのちょいってやつだぜ！』
（何がちょちょいのちょいだ、阿呆
子供の前だからって調子に乗りやがって）
じゃあ、お前一人で１０００人相手にして来いと呆れた表情で、女性が
男をみつめる。

『１０００人ですか、それは困りましたねぇ……』
男の冗談交じりの言葉に、なぜか少女が本当に困った表情をする。
『でしたら、戦いには参加せず、遠くから見るだけという条件で
湖には近づいてもらえないでしょうか？』
『どういう意味？』
少女の謎の言葉に、女性が訝しげな表情をする。

『ちなみに、もう少ししましたら、あそこにいる人達が交替の時間に
なりますので、その隙に森の中に入って頂くのが、安全だと思います』
少女が指を指した方向に、二人が視線を移す。

『なんで、お嬢ちゃんがそんな事を……あれ？』
男が振り返った時には、少女の姿は既に無くなっており、男が驚いた表情で
辺りを見回す。
『消えた？えっ？えっ？
おい、アリサ、さっきのお譲ちゃんはどこ言った？』
『さあ、どこだろうねぇ……』

女性は先ほどまで少女がいた所を、訝しげに見つめ、それに触れる。
（土が湿ってる……さっきまでは無かったはず）
『おい、アリサ！
なんか兵士達が移動してるぜ、もしかしたら本当に交替するかもしれねぇ
行こうぜ！』
ダンネが立ち上がり、アリサもそれに追随するように後を追う。
（さっきの子供、どこかで見た顔よね
それに、さっきの湿った所から、微かだけど魔力も感じたわ）
『なんか良く分からんけど、ツイてるぜ
急げば、タクヤ様にも追いつくかもしれねぇぞ！』
嬉しそうな表情で男は兵士達の隙を突いて、森の中に入っていく。
（ミスティア姫の幽霊って、もしかして……）
アリサは何かに気付いたような表情をした瞬間、男を追い抜き、森の奥に
向かって勢い良く駆けていく。
『早っ！アリサ！
ちょっ、待っ！』
男も引き離されないように、女性の後を急いで追いかける。

～・～・～・

それでも、気になるものなのですか？』
『それは、気になるよ
もし、自分が助けられる力があるなら、助けてやりたいと思うのが
普通じゃないのか？』
『主様（ぬしさま）は、お優しいんですね』
少年の答えに、少女が微笑む。

『ごくろうだったな、スイ』
突然、二人に何者かの声が掛かる。

振り返るとそこには、こちらに歩み寄ってくる一人の女性。
腰まで届く長い蒼髪をなびかせ、足に悪い所でもあるのか、杖をつき、
若干心許無い足取りでこちらにフラフラとしながら近づいてくる。
そして、その女性に追随するかのように森の中から、たくさんの兵士と
思われる人達も現れる。

『サリティア、あまり無理をしてはいけないわよ』
蒼髪の少女が心配そうに、その女性に近づき、体を支えようとする。

『フン、ぬかせ
スイ、あれがお前の言ってた、聖剣の勇者と言うやつか？』
『そうよ、彼が光国（コウコク）で噂になってる、聖剣の勇者様』
『ククク、竜姫もこんなやつを懐に隠しておいて
何をするつもりかな……まあ、いい』
女性は視線を後ろにいる兵隊に移し、目配せで何かの合図を送り、
兵が頷く。

『やれ』
『はっ！弓兵部隊、前へ！』
――――――――ザッザッザッザッ
その兵の号令で、兵達が前に歩み出てくる。
『サリティア、本気でやるの？』
『当然だ、聖剣の勇者というのが、どれ程の実力を持っているのか、
確認する必要がある』
『やめといた方が、良いと思うけどね』
蒼髪の少女がため息をつきながら、サリティアを見上げるが、
その視線の先の女性は気にした様子も無く、鋭い視線を湖の前に立つ少年に向け続ける。
『全体、構え！』
指揮を執る兵の号令で、兵達が手に持っていた弓を少年に向けて構え、
詠唱魔法を唱え始める。弓兵達の持つ弓が次々と水魔法に包まれていく。
それに呼応するかのように、突然、少年の背にもつ長剣の鍔（つば）にはめられた
紅色の石が輝きだす。
『くるか……』
サリティアの言葉と同時に、少年の背にある長剣から、炎が左右

に走り、
巨大な翼となる。

『サリティア様……』
兵隊の中に、あきらかな動揺が現れる。
『うろたえるな、こちらにはスイがいる』
『ちょっと……あたしにふらないでよね』
不満そうな顔で文句を言う少女の視線を、サリティアは怪しげな笑みで
受け止める。

『やれ』
『はっ！撃てッ！』
弓兵部隊から一斉に、水魔法の加護が付いた矢が放たれる。

――――――――ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

矢が放たれると同時に、炎でできた巨大な翼が、少年を護るかのように
その翼を閉じ、少年を包み込む。
四方八方から飛んできた無数の矢が、その翼を次々と貫いてく。

『どうした、火の聖霊と言うのはこの程度か？』
その光景にサリティアはクスクスと笑い、隣にいる蒼髪の少女に
視線を移す。

『いいえ、むしろ大変なのはこれからよ』
『！？』
突然の強烈な殺気に気付いて、サリティアが少年に視線を移す。

――――――――ドォオン！！

次の瞬間、巨大な爆発音と共に、少年を護っていた翼の周りを、巨大な火柱が
空高く舞い上がる。

『何事だ……！？』

炎の中から現れるは一匹の竜、その姿は火で形を作っており、巨大な翼を広げ
ホバリングをしつつこちらを見下ろしている。

『火竜！？……聖獣召喚か、やりおるわ！』
先ほどの余裕の笑みから一転、女性はひきつった笑みを浮かべる。

『オォオオオオオオオオオオオ！！！』
鼓膜が裂けんばかりの、その咆哮から放たれる強烈な熱風と殺気に兵達がたじろく。

――――――――ドォオン！！

次の瞬間、再度、大きく開けたその口から、巨大な火の玉が放たれる。

『！？』
火の玉は狙い済ましたかのように、サリティアの元にゆっくり飛んで来る。

『サリティア様！？』
『チッ！』

女性はせまってくる巨大な火の玉を見て、舌打ちするが、杖をつき走る事も
ままならぬ体なため、ただただその場に立ち尽くす。
何人かの兵士達がサリティアを護ろうと水魔法を唱え、巨大な火の玉に当てるが
その勢いは衰えない。

『だから、言ったでしょ？
やめといた方が良いって』
立ち尽くす女性を護るかのように、少女がその前に立ち、両手を前にかざす。
広げた手の平の前に、水が集まり凝縮されていく。

『いくら水の魔法が火の魔法に強いと言っても、貴方達の魔法程度じゃ
焼け石に水よ』

蒼髪の少女の前にできた水泡から、巨大な水柱が射出される。
巨大な火の玉と水柱が衝突し、しばらく均衡を保つ。

『まだまだ』

余裕の笑みを浮かべる蒼髪の少女の両手が、何かを包み込むように閉じる。
それに呼応するかのように、火の玉と衝突していた水柱の先が広がり、
火の玉を包み込む。

――――――――バシュゥウウウウ！！

しばらくした後に、巨大な水泡に包まれた火の玉は、その勢いを衰えさえ、
小さくなり、消失する。

『まったく、聖霊というやつは、どいつもこいつも化け物揃いだな』

女性の視線の先にいる少年の頭上を飛翔する火竜とその少年の前に仁王立ちする赤髪の少女を見て、サリティアは苦笑する。

『あれでも手加減してくれてる方よ、本気でやろうとしたら、たぶん、
もっとたくさんの、火球の嵐がこちらに来てるわよ
私でも止めきれないくらいのがね』

こちらに振り向き、笑みを浮かべながら答えるその台詞に、サリティアは
思わず身震いをする。

『さすがに攻撃魔法に特化してない水国(スイコク)では、
聖霊を相手するのは、荷が重いか……』

若干疲れたような表情で、サリティアはその場に座り込む。

(はぁ、ていうか事前に打ち合わせてなかったら、もっと大変な事に
なってたわね。最初の予定では火竜を出して、適当に脅かすだけの
はずだったのに……)

スイは少年の前に立つ、一人の少女に視線を移す。

その顔はまだまだやりたりないと言った感じで、怒りに満ちており、
終始こちらを睨み続けてる。

その両腕は炎に包まれており、隙あらばこちらに放とうとしているのが、
目に見えて分かる。

（もう少し、手加減というのを覚えさせる必要があるかしらね）
蒼髪の少女は苦笑し、昨夜の事を思い出すかのように物思いにふける。

～・～・～・

次の瞬間、長剣の鍔(つば)にはめられた紅色の石が輝き、その光が
少女の姿となって少年の前に現れる。

『では、私めが主様(ぬしさま)のお背中をお流ししましょう』
『遠慮します』
『まあ、そんな遠慮なさらずに
体の隅々まで、私めが洗ってさしあげます
特にお股の辺りなどは念入りに、グヘヘ』
『グヘヘ、じゃねえよ』

口元から流れ出る涎(よだれ)を、手で拭う仕草をする変態(せいれい)を
呆れた表情で見下ろす。
(出来ることならば、他の聖霊はまともなやつであって欲しいな)

その願いが叶う事を祈りつつ、ふと、少年は手に握っていた水筒
に気付く。

(ああ、そういえば、スイさんから水筒もらってたんだっけ?)
先程の少女とのやりとりを思い出し、ため息をつく。
契約料が無料になる条件と言われて、なぜか少女の唾液入りの水
を飲む
という、罰ゲームなのか何なのかよく分からない条件に、終始悩ん
だのだが、
結局飲む事は断ってきた。
しかし、少女は諦めきれないという表情で店にあった水筒にその
水を移して、
明日まで待つから飲む気になったら飲んで下さいと、無理矢理その
水筒を
渡してきたのだ。

（ていうか、これって、このまま捨てれば飲んだことになるのかな？）
『火霊、これやる』
『えっ？何ですか、それ』
不思議そうな表情で、火霊が少年から手渡された水筒を受け取る。
（とりあえず、喉かわいたから、俺はこっちの水を……）
少年は部屋に置いていた水差しに気付き、その水をコップに注ぐ。
『私は、水は飲まないんですけど……ん？』
困惑した表情で火霊が水筒の蓋をあけ、何かに気付いたように水筒の中の匂いを
嗅ぎ、水筒の中をじっとみつめ、水筒の水を一気に飲み干す。
横目でその様子を身ながら、少年もコップに入っていた水を飲み始める。
『むっ！？』
『ブフォォ！？』
突然、火霊の口内を何かが暴れるように激しく動き、それに合わせて火霊の頬が
上下左右に膨らんだり、縮んだりする。
『えっ？何？何？』
突然の事に驚いた少年が水を噴き出し、危険な物から逃げるように後退する。
『ぶぉふぇっ！』
――――――――――ベチャッ！！

火霊の口から吐き出された水が、まるで意思をもったかのように床の上を跳ねる。

『何コレ？キモッ！？』

床の上を縦横無尽に跳ねてた水の塊らしきものが、突然膨らみ、人の形を作り出す。

『うぅ……まさか、そっちに行くとは予想外でした』

『えっ、何でここにあなたが……』

その見覚えのある姿に、呆然とする少年。

『主様（ぬしさま）……これ、聖霊です』

『えっ？』

火の聖霊が人の形を成したそれを、指差す。

『まさか……スイさんが、聖霊？』

『ひどいですよ、主様（ぬしさま）

捨てるならまだしも、火の聖霊に私を飲ますなんて、

もう少しで体内で蒸発する所でしたわ』

恨めしそうな表情で少年を見上げる少女。

その瞳は透き通るように青く、短い蒼髪を手でかき上げ、深くため息をつく。

『はあ、私としたことが3年間楽しみにしていた主様（ぬしさま）との口内合体の

機会を二度も妨げられてしまうなんて、およよよ』

蒼髪の少女は悲しそうに、その瞳から流れ出る雫を手でぬぐう。

『悲しむことは無い、スイとやら、私なんかまだ主様（ぬしさま）と

手すら握らせてもらった事が無い』

（いや、この前握ってたけどね）

『一度や二度の事で諦めることはない、チャンスはあるさ
一緒に主様（ぬしさま）との合体を目指そうじゃないか！
もちろん、性的な意味で』
スイの肩に火の変態（せいれい）が手を当て、やさしく微笑む。
（合体を目指すな……）

『おお、あなたとは噴水の前で触れた時から、何か通じ合うものを感じてたわ
そうね、また、隙をついて狙えば良いのよね』
スイもやさしく微笑み返す。
（隙を突くな、そして、狙うな）

『スイよ、隙をつくのも良いが、時には正面からまっすぐにお願いしてみるのも良いかも知れんぞ』
『なるほど、妙案ね、やってみましょ！』
二人の少女が頷き合い、そして、少年のもとにやって来る。

『主様（ぬしさま）、お願いがあります』
蒼髪の少女がその瞳をキラキラと輝かせ、少年を見上げる。

『唾液を下さい……』
（どんなお願いだよ）

『主様（ぬしさま）、ついでに、私にチューを下さい』
なにがついでなのか分からないが、その隣にいるもう一人の変態（せいれい）が口付けをせまってくる。
（なんだその顔は、梅干でも食ったのか？）

『はぁ〜、最悪だな』
異世界で会った二人目の変態が、またもや自分の聖霊であることにショックを受け、少年は両手で顔を覆い、ベッドの上に崩れ落ちる。

〜・〜・〜・

『スイは仮の名前でして、名前が無いと呼びづらいという事で、
とりあえず国の名前から取っただけなのです』
主(あるじ)の問いかけにスイが答える。
『主様(ぬしさま)、スイが欲しがってるのは主様(ぬしさま)が決めた真名の方です。
私達聖霊は、真名が決まってこそ、本来の力が発揮できるのです』
(火霊がまともな事を言ってる、何か悪いモノでも食ったか?)
火の変態(せいれい)が、聖霊っぽい真面目な発言をしてる事に、少年がひどく驚く。

『えっと、名前ねぇ……
水国(スイコク)の聖霊でしょ?』
腕を組み、少年がしばらく考え込む。

『よし、決めた!
水霊(スイレイ)、君の名前は水霊(スイレイ)、どうだ?』
スイが目を大きく見開いて、少年を見つめる。

『えっ?駄目?』

――――――――――プシャァアアアア!!

『!?』
突然、目の前の少女が顔の穴と言う穴から水を噴き出す。

『喜んでるみたいですね』
『えっ?これ喜んでるの?』
(てっきり、怒ってるのかと思った、あんま俺ネーミングセンスとかないしな)

女の子として、その喜びの表現方法はどうなのかという疑問を持つリアクションに、少年は全身に水を浴びせかけられ、終始無言となる。

第１４話　水国のミスティア姫

『主様（ぬしさま）、改めて紹介をします
こちらが、水国の女王、サリティア様です』
『初めまして、聖剣の勇者殿、サリティアよ』
そう言って、目の前の女性が微笑み、少年に握手を求めるように、手を前に出す。

『ガルルルッ』
だが、その少年とサリティアの間を火霊（ヒレイ）が遮るように立ち、サリティアを威嚇する。

『こら、火霊（ヒレイ）、威嚇するな
水霊（スイレイ）がもう、大丈夫だって言っただろう？』
すみませんとサリティアにあやまりながら、少年が火の聖霊の肩に手を当て、
後ろに下がらせようとする。
『主様（ぬしさま）、こいつは信用できません
どこぞの火狐と同じく、腹に一物を抱えてるようなやつです』
『まあ、確かにいつも何か、悪巧みを考えてる人ではあるわね』
火霊（ヒレイ）の言葉に追随するように発言する、水霊（スイレイ）の言葉に
サリティアが苦笑する。

『否定はできんな
まあ良い、握手はまたの機会にしておこう』
そう言って、サリティアが前に出していた手を引っ込める。

『まずは、こちらからいきなり攻撃をしたことを詫びておこう。

聖剣の勇者と言っても、今の時代ではおとぎ話のような存在でな。
どうしても、その実力をこの目で確かめておきたかったのだ』
そう言って、サリティアが頭を下げる。

『あっ、大丈夫ですよ
今日の事は、事前に水霊(スイレイ)から話しは聞いてましたし、それに』
少年が隣にいる火の聖霊に視線を移す。
『火霊(ヒレイ)もいましたしね、そんなに問題は……うっ』
そう言って微笑む少年の視線を、火の聖霊が目をキラキラと輝かせて見つめる。
『おお、主様(ぬしさま)、そんなに火霊(ヒレイ)の事を信頼して、
じゃあ、ご褒美のチューを！』
うーと口をすぼめて、火霊が主(あるじ)に口付けをせまる。

『調子に乗るな！』
そう言って、せまってくる火の聖霊の頭を、少年が嫌そうな顔で押さえつける。

『ゴロゴロゴロゴロッ』
『後、そこ！さりげなく、うがいをしても唾液はやらんぞ！』
『ガハッ！』
口に含んだ水を吐き、水霊(スイレイ)が膝から崩れ落ちる。

『お前ら変態共の行動は、すべてお見通しだ、阿呆』
残念そうな表情で主(あるじ)を見上げる二人の聖霊を、少年が呆れた表情で見下ろす。

『クスクス、そんな行動をとる、スイを見るのは初めてだな』
その光景をサリティアが楽しそうにみつめる。

『うっ、コホン、まあ、余興はこの辺にしておいて、
そろそろ本題に入りましょうか』
少々恥ずかしそうな顔をして水霊(スイレイ)が立ち上がり、湖に向かって歩き出す。

『あなたとの付き合いもこれまでよ、真名を手に入れた私の前では、
もう、あなたの思い通りにはさせないわ』
そう言って、湖に浮かぶ紫色に濁ったそれを睨みつけ、
手のひらを空に向けるようにして、両手を左右に上げる。
瞳を閉じ、なにかを集中し始めた水の聖霊の体が蒼く発光し始める。
その光は徐々に大きくなり、その光に呼応するように湖も、また、
眩いばかりの蒼い光を放ち始める。

『さあ、湖よ
その邪魔者を退けなさい』
そう言った瞬間、湖が大きく波打ち始め、そのうねりは大きなものとなり、
湖に巨大な渦を作る。
湖の表面に浮かんでいた紫色に濁った液体も、渦に飲み込まれていく。
水の聖霊が、両手でゆっくりと何かを掬い上げるような仕草をする。
すると、渦の中心から大きな水泡が現れる。
『とりあえず、呪術で汚された部分はあの水泡に、全て取り出し

たわ』
『これで、水国の危機は免れたという事か』
サリティアが水の聖霊の言葉に、胸をなでおろすように安心した表情を見せる。

『これで、もう心残りは無いな……』
『本当にそうかしら？本当にもう、何も心残りは無いの？』
サリティアの呟きに水霊（スイレイ）が問い掛ける。

『どういう意味だ、スイ？』
『あれよ』
そう言って、水の聖霊が湖を指差す。

サリティアが見つめる先、湖の中心に浮かぶ大きな水泡。
そして、その傍らに、人影のような物が薄っすらと見える。

『……何だ？』
その影が一瞬ゆらいだように見えた瞬間、湖が眩いばかりに輝く。

――――――――ドクンッ！

心臓の鼓動のように湖全体が、脈打つように蒼い光を放つ。

『まさか……』
湖の光と呼応するかのように、辺りを包み込む、巨大な魔力。
その覚えがある水の加護にサリティアが後ずさる。

『ありえない、そんな馬鹿な』
徐々に大きくなるその面影に、サリティアが大きく目を見開く。

『これは……夢か？』
『夢でもなく、幻でも無い、ましてや、街で噂になってる幽霊でも無いわよ』
サリティアの呟きに、水の聖霊が答える。

幼き頃から彼女は、既に才能の片鱗を示していた。
だが、この魔力の大きさは異常すぎる。
この巨大な湖が、彼女と一つになってるかのように感じる。
（これではまるで、世界の全ての水と呼応し、操ったレイティア姫、
そのものではないか）

水の聖霊がこちらに歩む者と共に来た水泡を操り、それを自分のもとに
たぐりよせる。
水霊（スイレイ）が手をかざすと水泡は見る見るうちに小さくなり、
手の平に乗る程の大きさに凝縮される。
『さんざん好き放題やってくれたわね、しばらくはそこにいなさい』
肩に下げた鞄から取り出した小瓶に、水泡に包まれた紫の液体を移す。

『さて、こちらはこれで終わり』
そう言って、水霊（スイレイ）がサリティアに視線を移す。

『サリティア、あなたには彼女の疑問に、すべてを答える義務がある』
『……』
『なぜ、彼女を殺さねばならなかったのか』
『……』

『目をそらさないで、サリティア。
これが現実よ』
無言でうつむくサリティアを、水霊(スイレイ)が見つめる。
『生きて……いたのか』
サリティアが顔を上げ、ひきつったような笑みを浮かべる。
『ミスティア……』
透き通るような蒼い瞳と長い髪をなびかせて、
湖の上を一歩一歩、ゆっくりと歩いてくる少女を、
サリティアの紫色の瞳が厳しい目で見つめる。

～・～・～・

荒々しく叩かれるドアに向かう。

――――――――ガチャッ！

ドアを開けた先にいたのは、一人の蒼髪の少女。
『あなたがマイルズ先生ね』
『おめぇ、誰だ？』
『湖の近くに診療所があって助かったわ、急患よ
急いで治療をして欲しい人がいるの』
蒼髪の少女が、後ろに背負ってる人に視線を移す。

『何があったんだ……って！？』
『詳しい話は後よ、彼女、お腹をナイフで刺されて重傷を負ってるの』
『おいおいおい、嘘だろ？』
うなだれるその顔をあげさせて、男が驚く。
『ミスティア姫！？なんで、こんな所に？』
『とりあえず、彼女の血の記憶から応急処置はしといたけど。
専門的な知識は乏しいから、後をお願いしたいの』
『だったら俺じゃなく、城の連中に早く知らせて
治療をしねぇと……』
『彼女、お姉様に刺されたみたいなの』
『何？サリティア姫に……』

少女の言葉に、男の動きが固まる。

『できれば、今はこの事はなるべく秘密にしたいの。
あなたに危険が及ぶというのならば、治療さえしてくれれば、
後は私がなんとかするわ』
真剣な少女の眼差しに、男が困った表情をする。

『治療が駄目というのなら、治療の仕方さえ教えてもらえば……』
『馬鹿野郎ッ！素人がそんな簡単できるわけねぇだろ！
さっさとそこに寝かせろ、俺が治療する』
『大丈夫なの？結構、あぶない橋を渡る事になるかも知れないわよ？』
『フンッ！そんな事は分かってるよ。
でもな、医者って言うのはな、国とか権力とか関係無く、
そこに助けられる命があれば、
助けるから医者って言うんだよ！』
『フフフ、その台詞、彼女の記憶通りね。
あなたに最初にお願いしに来て、正解だったわ』

傷ついたミスティア姫をベッドに寝かせ、少女は医者にすべてをまかせた後、
壁にもたれるようにして床に座り込む。
『正直な話、私も彼女達から覗いた血の記憶を整理するので、
頭がいっぱいで、結構つらい所なのよね』
『おい、大丈夫か。
血の記憶って何の事だ？』
頭をおさえるようにして、床に座り込む少女を見て、
男は心配そうに声をかける。

『私の方は大丈夫よ。
まだこの世界に生まれてすぐだから、突然の事に情報の整理がしきれてないの。少し待って頂戴、後で分かる事から説明するから』
（見た目はただの子供（ガキ）だが……）
その少女から放たれる異常なまでの魔力に、男がおもわずたじろぐ。

（謎の多いヤツだな、
サリティア姫っていやぁ、あまり良い噂を聞かないし、
まあ、この様子からしてお家事絡みの暗殺か何かだろうな。
ろくでもない事に巻き込まれたのは間違いねぇなぁ）

壁にもたれかかりながら、何かをブツブツと呟き始めた少女を、男は訝しげな表情で見つめる。

（あ～余計の事を考えるのは後だっ！）
頭を激しく掻き、男は目の前の消えかかりそうになる命を救うために
治療にとりかかる。

～・～・～・

『あら、マイルズ先生、めずらしいわね。
朝早くから、うちの店に来るなんて』
女性は嬉しそうな顔で男に微笑む。

『でも、ごめんなさい、
まだ、お昼の準備はできてないの』
『今日はそっちじゃねぇ、
頼みごとがあって店に寄ったんだ』
『頼みごと？』
『……』

終始無言でうつむき、どうしたものかと悩む男を、女性は不思議そうな顔で
みつめる。

『ちと、昨日、厄介事に巻き込まれてな、
とりあえず、お前に相談した方が良い話が聞けるかと思ってな』
『私じゃないと、駄目な話かしら？』
『少し、やばめな話なんだ、そのぉ、なんだ、
無理強いするつもりは無いんだが……』

男の普段とは違う様子に、女性は何かを悟ったかのような、真剣を表情をする。
『聞かせて頂戴、その様子からして、私じゃないと難しい話なんでしょ？』

よっぽど重大な話なのか、頭を掻き、言葉を渋る。
しばらく無言となった後、意を決したように話し始める。
『実はな、ミスティア姫が暗殺されそうになったんだが……』
『ミスティア姫が暗殺？どういう事？』

『う～ん、できればもう、こう言った事から足を洗ってるお前だけは、
巻き込みたくはなかったんだが……』
『その話をした時点で、片足は突っ込んでる気がするけど？』
『うっ……』
男が苦虫を潰したような表情をする。

『それで、私に相談っていうのは？』
『それを調べるのに、その、都合の良い諜報員とかを紹介してもらいたいんだ』
『フフフ、なるほどね、そういう事』

そう言うと、エレナは自分自身を指差す。
『だったら、ここにちょうど良いのがいるわよ』
やさしく微笑む女性に、男はやっぱりかと、
顎から生えた無精ひげを乱暴に撫で、深くため息をつく。

第15話　姉のプライド

3年前――――――――

『それが条件か？』
『そうよ』
壁に背を預け、目を瞑る蒼髪の女性に、黒髪の女性が微笑む。
『その条件は飲めんな』
『なぜ？』
黒髪の女性が、ひどく驚いたような表情をする。
『でも、彼女の魂がないと、あなたが望むレイティア姫の魂を、あなたに宿すことができないのよ、サリティア？』
『それは分かった。
問題は、それでは無い』
サリティアが閉じていた目を開け、目の前の黒髪の女性を睨むような視線で見つめる。
『なにが問題なの？』
『ミスティアの命を、使わないといけないというのが、問題なのだ』
『どうして問題なの？』
不思議そうな顔で黒髪の女性が、蒼髪の女性をみつめる。
『邪教の魔導士達を統べる王とやら、悪いがこの話は無しだ』
この話は終わりとばかりに、サリティアはその場を立ち去ろうとする。

『いまさら怖気づいたの？
ミスティアの命を奪うことに、何の問題があるの？』
『くどいぞ。
レイティア姫の魂を蘇らせる力があると言うから、お前達に近づいたが、
やはり邪教、やり方が根本的に私と合わんな』
『どうするの？レイティア姫の事はあきらめるの？』
『あきらめはせん、他の方法を考えるだけだ、
短い付き合いだったな、さよならだ』
『そう、貴方とは馬が合うと思ったんだけどね』
立ち去ろうとするサリティアと黒髪の女性がすれ違う。

『だって、心の闇が、すごく深いんですもの』

ゾクリとしたモノを、背後から感じ取ったサリティアが、思わず後ろを振り返る。
黒い瞳を異常なまでに大きく見開き、クスクスと笑う、その女性の黒髪が
地まで伸び、そして、サリティアの周りを取り囲む。

『なんだこれは！？』
女性の黒髪が意思をもってるかのように、サリティアの肢体に絡みつく。

『もう、まどろっこしいわね。
私は闇の魔王よ？人の闇の心は、すごく敏感に感じ取れるのよ』
身動きの取れないサリティアに黒髪の女性が近づき、
右手をサリティアの胸に当てる。

『どんなに隠そうとしても無駄。
あなたの心の闇、見せてもらうわよ』
怪しげな笑みを浮かべ。サリティアの体を包み込むように黒いもやが現れる。

『！？』
サリティアの体の中に、黒髪の女性の手が吸い込まれるように、ズブズブと音を立て、侵入していく。
手で体の中をかき混ぜられるような異様な感覚に、サリティアは吐き気を
もよおしそうになる。

（何だ、これは……）
『あらあら、顔に出さないわりに、随分と大きな闇を持ってるじゃない』
黒髪の女性の、艶かしい赤い唇が歪んでいく。
自分の中に侵食して来る、その異常な感覚を、サリティアは必死に拒絶しようとする。

『フフフ、抵抗しても無駄よ。
あなたの心の闇は、他の人より大き過ぎるから、隙だらけだもの』
苦悶の表情を浮かべるサリティアを、黒髪の女性は楽しそうに見上げる。

『あらあら、これは何かしらね？
羨望？嫉妬？
妹に対して、随分と浅ましい感情を、たくさん持ってるわね』
『っ！？』
魔王が嬉しそうな表情を浮かべた後、その目を鋭く細め、
サリティアをみつめる。

『さあ、こちらにその身をゆだねなさい』
『やめろ……』
『妹を殺すのよ、憎いんでしょ？
自分より優秀で、出来の良い妹が』
『やめ……ろ……』
『自分は愛されないのに、
両親から愛され、国の人達からも愛され続ける、彼女が憎いんでしょ？』
『私の心を……覗く……な』
苦悶の表情を浮かべ、サリティアが必死に抵抗する。

サリティアの透き通るような青い瞳が、漆黒の黒に染まり、その体が
床に崩れ落ちる。
『うぐぐ……何を……した？』
『フフフ、貴方の心の闇を強くしてあげたのよ。
さあ、行きなさい。
彼女を殺し、その魂を使ってレイティアの力を、その身に宿らせるのよ！』

ひどく締め付けるような痛みに、胸を押さえ、サリティアはこちらを見下ろす、
女性を睨み上げる。
サリティアの意思とは関係なく、意識が朦朧としていき、視界が闇に染まり、
サリティアは意識を失くす。
『フフフ……アーハッハッハッ！』
魔王の嘲笑が、闇の中に響き渡る。

～・～・～・

ミスティアが水霊に支えられながら、力無く微笑む。
『魔王は最初から、私にレイティア姫の力を宿す気などなかった。
水国の王族の血を絶やし、国の者達を自分の意のままに操るようにするための
実験として、その呪術を使うために、私の血と心を利用しただけだった』
『実験ですか……』
その言葉に思わず、拓也(タクヤ)が驚いた表情で呟く。
『そうだ、魔王と強制的に呪いの契約をした時に、
奴の考えてる事の一部が見えた。
あれは危険な存在だ。放っておけば大変な事になる』
厳しい表情で、サリティアがその場にいる者達を見渡す。
『ミスティアが生きてると知れば、すぐにでも何か仕掛けてくるだろう。
奴はミスティアの生死に、なぜか異常に、こだわっていたみたいだからな』
そう言って、サリティアが杖をつき、ゆっくりと立ち上がろうとする。
『邪教の者どもについても、私で調べてることがある、それをもとに奴らを
……うぐぅ!?』
突然、サリティアが胸をおさえつけ、苦しそうな表情を浮かべて、膝を地につき、うずくまる。
『お姉様!?』
ミスティアが心配そうに、姉のもとに駆け寄る。

サリティアの体を、突然、黒いもやが包み込み、
ミスティアを見上げるその瞳が黒く染まる。
『クスクス、フフフ……』
姉の口から、誰の者とも分からぬ、笑い声が発せられる。

『お姉様？』
『ミスティア、生きてたのね？
じゃあ、また殺さないとね』
青い髪が黒く染まり、サリティアの肢体に絡み付いてくる。
何者かに操られるように懐からナイフを取り出す。

『ティア！？あぶないっ！』
水霊が、ミスティアとサリティアの間に滑り込み、ミスティアをかばうように抱きしめる。

次の瞬間、サリティアのナイフを持つ両腕が頭上高く上がり、勢いよく振り下ろして、胸を貫く。

赤い鮮血が、宙を舞う。

『お姉……さま？』
ミスティアが水霊に守られながら、その光景に驚いた表情を見せる。
そこには、苦悶の表情を浮かべ、膝を地につき、己の胸にナイフを突き刺す、
サリティアの姿があった。

『なめるな……魔王よ。
例え心を貴様に奪われようと、この体は……貴様には、くれてや

らん』
『サリティア！おのれぇ……』
黒く染まっていたその瞳の片方が蒼色に戻り、サリティアの意識を
のっとろうとする何者かと格闘するように、その両腕を震わせ、
その胸からナイフを引き抜こうとする意識にサリティアは抵抗する。
『水国の強き血を……絶やしはさせん！』
そう言って、サリティアはそのナイフを更に、深く刺し込む。
『グゥッ！』
（おのれ！サリティア、おのれぇ……）
己の中で何者かの声が遠のくのを感じながら、サリティアの体が
地に倒れる。
『お姉様！』
『サリティア！』
ミスティアと水霊が、地に横たわるサリティアのもとに駆け寄る。
『クックックッ、スイよ。
魔王に、一矢……くれてやったぞ』
嬉しそうに笑うサリティアを、水霊が睨みつける。
『何て無茶をするの！』
水霊が急いでサリティアの傷口の状況を確認する。
（傷が深過ぎる……私の、にわか程度の治療魔法じゃ……）
『お姉様！お姉様！？』
『お前はいらない子じゃない、ティア』
『お姉様？』
その体から大量に溢れ出る血に、動揺し、しがみつくミスティア
の頭を、

サリティアがやさしく撫でる。

『本当に、いらない子は、わたしだ……グハッ』
血を口から吐き、苦しそうにサリティアが悶える。
『お姉様！？』

（サリティア、もう喋らないで！）
サリティアから溢れ出る血に水霊が触れ、血を通して対話をする。
こちらを心配そうに見つめるミスティアの顔を、苦笑した表情で見た後、
サリティアが水霊に視線を移す。

（スイよ、お前には、随分世話になったな……）
（何言ってるのよ、待ってなさい、
マイルズ先生をすぐ呼んでくるから）
そう言って、水霊が近くにいる兵士に、マイルズを急いで連れてくるように
呼びかける。

（無理だ、既に心臓にまで傷が達している。
たとえ、マイルズが来たとしても間に合いはせん）
（あなた、もしかして、初めから死ぬつもりで！？）
（いくらお前の力で、私の体内から呪術の毒を抜き、体が元に戻りかけようとも、
私の魂を縛る、呪いの契約までは……お前には消せまい）
サリティアが水霊をみつめ、苦笑する。

（スイよ、私の最後のわがままを聞いてくれ）
サリティアが苦しそうな表情を浮かべながら、水霊の腕をつかむ。
（ミスティアを……たのむ）

『馬鹿いわないで！
姉のあなたが妹を守らないでどうするの！
そんな、約束、私はしないわよ！』
思わず、水霊から怒りの言葉が発せられる。

（こんな事ならマイルズ先生に、治療魔法を、
もっとちゃんと習うべきだったわ）
水霊から、あせりの表情が見える。
『フフフ……まだまだ……だな、スイ。
どんな、状況でも……人を欺けるぐらいの、冷静さが必要だぞ』
『ッ！？』

（そういえば、お前だけだったな……
王族の者達をその手にかけ、魔王の呪術により、
もはや身動きすらとれなくなった私に、手をさしのべてくれたのは……）
『あなたには、まだやるべき事があるんでしょ！
勝手に死ぬなんて、許さないわよ！』
水魔法で水霊が、必死に応急手当をしようとする。

（傍から見れば、気が狂った女としか見えぬ私の心を理解し、
今日まで私を支えてくれたのも、お前だけだったな……）

『お姉様！
もうすぐ、マイルズ先生が来ます。
しっかりして下さい』
姉の手を握り締め、ミスティアが必死に励ます。

（そして、今日まで妹を、その血を守り続けてくれたのも、スイ、
お前だ。

口は悪くとも、優しき聖霊よ、礼を言う）
『口が悪いのは、大きなお世話よ！
そんな言葉、あなたの口から聞きたくないわ。
しっかりなさい、サリティア！』
マイルズ先生はまだ来ないのかと、水霊が周りにいる兵士達に視線を移すが、
兵士は首を力なく横に振る。

『ミスティア……』
『なんですか？、お姉様』
その瞳に涙を溜め、姉をみつめる。

『魔王に気を許すな、奴はこの国だけでなく、
この世界をも、狂気に包もおうとしている』
『はい……お姉様』
『ふがいない、姉ですまんな……』
『お姉様？』
サリティアの手が何かを探すように宙をさまよい、ミスティアがその手を掴み、
頬に当てようとする。

『フフフ、お前が生きていて、本当に良かった。
叶うことならば……』
サリティアが優しげな笑みを浮かべ、その手がミスティアの頬に触れ、
頭を撫でる。

『お前と共に、この国を守りたかった……』
『お姉さま？』
サリティアの頬から一粒の涙が流れ、ミスティアの頭を優しくな

でた後、
その手が力なく落ち、地に触れる。
『……お姉さま？』
目を瞑り、眠るように横たわるその体を、ミスティアが揺さぶる。
『お姉さま！』
その瞳から、溜めていた涙が溢れ出、零(こぼ)れ落ちる。
『いや、いやよ……
私を一人にしないで』
『ティア……』
水霊がミスティアの頭を腕で抱えるにして、抱きしめる。
『うっ、お姉様……』
胸元ですすり泣くミスティアの頭を優しく撫で、水霊がサリティアの胸に
深々と刺さるナイフをみつめる。
（魔王よ、貴様だけは許さない……
この報い、必ず受けてもらうわ）
小さく唸り声をあげ、どこにいるかも分からぬ敵を探すように、
水霊が湖のはるか先を、睨みつける。
～・～・～・

数日後――――――――

『ティア、大丈夫？』
湖の前に佇み、静かにその水面を見つめる蒼髪の少女に、水霊が声を掛ける。

『スイちゃん、どうしたの？』
『もうすぐ、主様（ぬしさま）が光国に向けて出発するから、挨拶をしとこうと思って……』
申し訳なさそうな表情で、水霊がミスティアを見つめる。

『ああ、そういえば、今日だったわね』
『戴冠式の準備は、順調なの？』
『ええ、皆が良くしてくれて。暇を持て余してるくらいですわ』
そう言って、ミスティアが微笑むが、すぐに表情を暗くする。

『でも、その甘えが、お姉様をあのように、してしまったのかも知れません』
『ティア？』
『ずっと、考えてました』
ミスティアがその眼差しを湖に向け、物思いにふけるような表情で呟き始める。

『生まれたときから持て余すほどの魔力を持ち、

私は水魔法について、何も困った事など無かった。
周りからは天才ともてはやされ、レイティア姫の再来とも言われる事もあった。
姉も、私の事を自分の事の様に喜んでくれ、それが当たり前だと思っていた』
ミスティアの呟きに、水霊が真剣な表情で耳を傾ける。

『でも、現実は違った。私は、姉に嫌われていた。
姉は私の才能に内心は嫉妬し、妬み、私の知らぬ所で苦しんでいた。
だからこそ、魂さえも操る、禁忌の闇の魔法にまで手を出そうとした』
『でも、サリティアはあなたの命を差し出すことを拒んだわ。
本当に心の底からあなたの事を嫌ってたら、そんな事をするかしら……』
そう言って、水霊がミスティアの肩に優しく手を添える。

『当然のように自分に注がれる、皆の愛情に甘え、
姉の苦しみに気付かなかった私が、いけなかった』
『確かにやり方はいけない所があったかもしれないけど、
水国を守るためにも、あなたに頼られる姉になるためにも、
あなたとは違う、何かが欲しかったのよ』
水霊が慰めるように、優しくミスティアの頭を撫で、その顔をミスティアが
不思議そうに見上げる。

『なぜかしらね。スイちゃんに言われると、
何だかお姉様と話をしてるみたいな気分になるわ』
そう言って微笑むミスティアを、困った表情で水霊が見つめる。

『むぅ、何か微妙な気分ね。確かに、サリティアの血の記憶は混じってるし、
3年間、サリティアとも一緒にいたから、考えた方とかは少し、
似てる所があるかも知れないけど……』
なぜか不満そうな表情でブツブツと呟く水霊を、ミスティアがクスクスと笑う。

『ずっとそうだった。
優しかったお姉様に命を狙われ、そして、両親もまたその姉に命を奪われ。
ショックで誰も信じられなくなった私を、ずっと励まし、
支え続けてくれたのが、スイちゃんだった』
『う～ん。なんていうか、落ちてきたナイフにあった、サリティアの血の記憶を
覗いてから、妙にほっとけなくなったのよねぇ』
『なぜ？』
『もしかしたら……』
水霊が宙に視線をさまよわせ、何かを考えるような仕草をした後、
視線をミスティアに戻し、優しく微笑む。

『サリティアの中にある、あなたを想う良心が、
私の心を動かしたのかもしれないわね』
『スイちゃん……』
『ほら、泣かないのよ。
大変なのはこれからよ。次は女王として、頑張りなさい』
涙ぐむミスティアの頭を撫で、優しく励ます。

『ありがとう、スイちゃん』
『フフフ、じゃあ、私からあなたへの最後の贈り物よ』
『……？』

ミスティアから離れ、水霊が湖に歩みより、その手を湖の中に沈める。
トクンとまるで心臓が脈打つような音がした後、手の触れた所から、
水面に大きく波紋が広がる。

『私には、人の命を蘇らせる力は無いわ。
でも、私にはサリティアから受け継いだ血の記憶がある』
ミスティアに視線を戻した水霊の背後に、湖の中から巨大な鎌首が、
空中高く持ち上げられる。

『彼女の残した、最後の望みを叶える事ができるとしたら、
私にはコレくらい』
『嘘、まさか……』
ミスティアを見下ろすその巨大な水蛇から、辺りを包み込むように流れる、
大きな魔力。
その魔力から覚えある加護を感じ取り、ミスティアが自然と
その水蛇に歩み寄る。

『……お姉様なのですか？』
その言葉に呼応するように、水蛇がその頭をミスティアに摺(す)り寄せる。
鋭くもありながら、ミスティアをどこか優しく見つめるようなその瞳に、
己の姉の姿を重ねる。
『今度こそ、二人で仲良く、この国を守りなさい』

『スイちゃん……』
ミスティアが水霊を抱きしめ、感極まったようにその瞳から、大粒の涙をポロポロと零(こぼ)す。
『ありがとう、スイちゃん』
ミスティアの頭を優しく撫で、その視線を二人を見つめる水蛇に移す。
『良い、サリティア？今度からは、正しいやり方でこの国を守るのよ？』
その言葉に、なぜか水蛇が視線を逸らすような仕草をする。
『ちょっと、サリティア。
せっかく善意で私がここまでやってあげたのに、何よその態度は。
しょうがないでしょ、蛇の姿ぐらいは我慢しなさい』
先の分かれた舌をチロチロだし、水霊を一瞥した後、また視線を逸らす。
『フフフ、感謝はしてるみたいですよ。
照れ隠しですかね？』
水蛇にその手を触れ、涙を拭いながら嬉しそうに、ミスティアが微笑む。

～・～・～・

『変わった方たちですわね。
彼らには、感謝しても、しきれないものがあるのに、
報酬も何もいらないそうですよ』
自分の隣に佇む、大きな水蛇の頭を撫でながら、ミスティアが呟く。

『地位も名誉も力も望まない彼らに、私達がしてあげられるのは、
何でしょうね？』
うつむく少女の頬に、水蛇の頭が優しく擦り寄る。

『フフフ、分かってますわ。
拓也（タクヤ）様達には、やるべき事があります。
私達は、邪魔にならないように、そのお手伝いをしてあげるだけ』
そう言って、先程までの暗い表情を跳ねのけるように、明るい笑顔を見せ、
水蛇に視線を見上げる。

『さあ、お姉様、皆様を盛大にお見送りしてあげましょう』
その言葉に呼応するように、水蛇が頷き、その大きな鎌首を空高く持ち上げ、
その口から巨大な水柱を勢い良く、噴き上げる。

『これは、私達からのせめてものお礼です』
湖のそばに立つミスティアが、空を見上げ、その様子を一瞥した後、
両手を重ね、祈るような仕草をする。

『聖剣の勇者様と聖霊達よ。

その旅路に、幸多からんことを……』

～・～・～・

今から戻りますか？』
『いや、良い！光国に帰ろう！』
拓也が、それは嫌だと言わんばかりに、大きく首を横に振る。

――――――――ザアァアアア！

『ぬおぅ！？』
『あれ？雨？』
突然、荷馬車を大粒の雨が降り注ぎ、荷馬車を先導するダンネが妙な声をあげ、拓也達が視線を外に移す。

『ん？この雨、なんか妙な魔力を感じるぞ』
『本当ね、これは……』
火霊の言葉に、水霊も荷馬車の外に顔を出して、振ってくる雨粒に手を差し出す。

しばらくした後、雨が突然に止む。

『通り雨ッスかね？』
ダンネが訝しげに、空を見上げる。

『主様（ぬしさま）、アレ！』
『ん？おお、すげぇ！』
火霊が荷馬車の外に顔を出し、驚いたように指差す先を、拓也も顔を出し、
驚いたような表情でみつめる。

『こんな、でっかいのは見たことねぇな』
ダンネが手をかざし、口を大きくあんぐりと開け、空を見上げる。

『おそらくさっきの雨はミスティア達によるものでしょう。
しかし、派手にやりますね』
その光景に思わず、水霊が苦笑する。

一向が見上げた先には、水国の街の上空を覆わんばかりの、
巨大な虹の橋が架かっていた。

第16話　帰国

『拓也(タクヤ)様！お帰りなさい！』
嬉しそうな顔で、手を大きく振りながら、ルメリアがこちらに駆けてくる。

『でたな！淫乱ホワイト！
帰ってきて早々、主様(ぬしさま)に色目を使おうとは良い度胸だな。
退治してくれるわ！』
ルメリアを視界に捕らえるなり、火霊が怒りの表情で腕をまくる仕草をしながら、
勢い良く駆けていき、ルメリアの顔面に向かって拳を放つ。

『邪魔ですよ』
『げぼっ！？』
しかし、ルメリアはその拳を笑顔でさらりとかわし、すれちがい様に放った
中段回し蹴りが、火霊の腹に勢い良く突き刺さり、蹴られた反動で火霊が
激しく地を転がっていく。

『よいしょっと』
火霊が視界からいなくなったのを確認して、何事もなかったかのように
くるりと回って、拓也の前に歩み寄る。

『お帰りなさい、拓也様』
『あっ、ただいま帰りました』
『水国の件では、いろいろ大変だったみたいですね。

ご苦労様でした』
『いや、自分は大したことはやってませんよ』
困った表情で、頬を人差し指でかき、拓也が苦笑する。
『あら、こちらのかたは？』
拓也の隣に立つ、蒼髪の二人の少女に視線を移す。
『はじめまして、水霊（スイレイ）です。
ルメリア様、今日からいろいろとお世話になります』
蒼髪の少女が前に進み出て、深々と頭を下げる。
『あっ！お手紙で言ってた、水の聖霊様ですね？
はじめまして、ゆっくりしていって下さいね』
『こちらは、水国のおみやげです。
レイティア湖の深層水で作ったお菓子で、とてもおいしいので、
ぜひ食べて下さい』
『あら、わざわざ、ありがとうございます』
火霊とは違い、丁寧な口調の水の聖霊に、ルメリアは好感を覚える。
『お久しぶりです、ルメリア様
ミスティアです』
もう一人の幼い少女が、ルメリアの前に進みでる。
『えっ？ミスティア……様？』
『正確には、水魔法による水分身でできた体です。
本体であるミスティア様は、ちゃんと水国にいます』
水霊がミスティアの頬に指を強く当てると、指が頬の中に吸い込まれていく。
『まだまだ、私の水魔法は未熟なので、水霊様のように
本来の姿を保つのは難しいですが……』

幼い少女の姿をした、ミスティアが苦笑する。

『ほうほう、水魔法で作られた体ですか。
めずらしいですわね』
ルメリアが興味深そうに、ミスティアの体に触れる。

『拓也様が元の世界に帰るお手伝いをするために、
少し無理を言って、水分身になってついて来てしまいました。
ご迷惑でなければ、私もこちらで水霊様と一緒にいたいのですが、
宜しいでしょうか？』
『一応、両親には聞いてみますけど、
たぶん、問題は無いと思います』
人差し指を頬に当て、何かを考えるような仕草で宙をみつめながら、
ルメリアが答える。

『まあ、まずは皆様、旅の疲れを癒して下さい。
後、拓也様、水国の旅の話も、いっぱい聞かせて下さいね！』
ルメリアが嬉しそうに拓也の手を握り、一行を急かすように歩き出す。

『フンッ！』
『ふぎゃ！？』
途中、地ベタに転がっていた火霊の背中を、ルメリアが勢い良く踏みつけ、
何事もなかったのように一行を引き連れ、城に向かって歩いていく。

『ぐぬぬ、おのれ、淫乱ホワイトめぇ……』
背中に足跡をつけられた火霊が両拳を握り締め、わなわなと拳を震わせ、

くやしそうな顔で、遠ざかるルメリアの背中を睨みつける。

『いつもあんな感じなの？』

火霊の隣に腰を屈め、肘を膝に付き、両手を頬にあて、水霊が尋ねる。

『ひどい奴だろ？

子狐のくせに、生意気な暴力女め！

いつか、退治してやる！』

『良い人そうに、見えるんだけどね』

～・～・～・

顎に人差し指を当て、ルメリアが考えるような仕草をする。

『こちらにいる私は、水魔法で作られた体なので、
どのようなお部屋でも結構です。
お気になさらないで下さいね』

『そうですか。
でしたら、拓也様の隣のお部屋が空いてますが、
そちらでも宜しいでしょうか？』

『それは良いですね』

『それでは、案内しますね』

そう言って、ルメリアが後ろにいる者達に視線を移す。

『なかなかに、居心地が悪い所ね』

『なんか、言ったか、水霊』

『いいえ、主様（ぬしさま）、なんでもありません』

主（あるじ）の問いかけに、水霊が微笑む。

『拓也（タクヤ）様、ちょっと宜しいでしょうか？
ミスティア様のお部屋の件で、ご相談があるのですが』

『あっ、はい』

ルメリアに呼ばれて、拓也がルメリアの元に駆けていく。

『まったく、主様（ぬしさま）が帰ってくるなり、なんだあの態度は！
淫乱ホワイトめ、何を企んでやがる』

『ねぇ、火霊。
あなた、本当にここで、一人で主様（ぬしさま）を守ってたの？』

『ん？そうだが』

挨拶をしに行った時の、リディアとその隣りにいた赤髪のメイドの
様子を思い出す。

『なるほど、火霊の言ってた、火狐とは良い得て妙ね』

この城に来るまでに、火霊からはこの城での状況はある程度、聞いている。

あれは好奇の視線というよりは、敵意ある視線と言ったほうが正しいであろう。

（招かれざる客というわけね）

自分に注がれた視線を思い出し、ため息をつく。

（まあ、まずは様子見といった感じみたいだけど、

えらく警戒されてるわね）

『ぬぐぅ……それよりも水霊。

あの淫乱ホワイトを、主様（ぬしさま）から引き剥がす作戦を考えてくれ！』

じたんだを踏み、ルメリアを睨みつける火霊と、その視線に気付いたのか、

こちらをさり気なく睨みつけるルメリアのやりとりに、水霊が困ったような

表情を浮かべる。

（竜姫のあれをまったく気にしてない、火霊もさすがというべきね）

水霊がその視線に耐え切れずに、思わず後ろを振り向く。

水霊の視線のはるか先、開け放たれた大広間の扉の先に、鎮座する一人の女性。

まるで剣で体を貫かれるような、その鋭い視線を正面から受け止める。

（竜姫リディア。

……竜に例えられるほどの武力と魔力を持つ女。）

燃えるような紅い髪とその瞳、そして、顔の左半分にある深い傷が特徴的な女性が、こちらを見つめている。

（主様（ぬしさま）が元の世界に帰る手段に、魔王、そして、この城。
やる事は盛りだくさんね……）

『これはなかなかに、大変そうね』

そう言って、水霊がため息をつき、ゆっくりと閉まろうとする、その扉の先にいる者達を睨み返す。

『さて、サリティア仕込みの悪知恵が、どこまで通用するか。
試させてもらうわよ』

頬杖をつき、こちらを見つめるリディアが、その視線を受けとめ、怪しく微笑む。

～・～・～・

その女性の前に一人の男が、音も無く現れる。

『本日も魔王様は、ご機嫌麗しく……』

――――――――パリンッ！

魔王と呼ばれた女性の手に持っていたグラスが、突然砕け散る。

『おやおや、そうでもないみたいですね』

一瞬、男は驚いたような表情を見せるが、すぐに笑顔になり、こちらを睨みつけるように見下ろす女性に微笑む。

『毒姫が死にました』

『毒姫？……ああ、サリティアですか。

王族をその手で殺め、水国の女王になったとかいう

女性でしたかね？』

何かを思い出すように視線を宙に這わせ、その後、視線をまた目の前の女性に戻す。

『たしか、魔王様のお気に入りの女性でしたよね？

なぜ、殺したのですか？』

『私が殺したんじゃないわ、自害したのよ』

『ほう、それはまた』

男が興味深げに、目の前の女性をみつめる。

『かわいそうな女でしたね。

闇に堕ちやすい心を持ち、その隙を付かれ、あなたに意のままに操られ、

何も知らぬ人々に恨まれ、孤独に死んでいくその様が面白そう

だと言って、
生かしておいた女ですよね？
あなたもひどい方ですね』
男が楽しそうに、クツクツと笑う。

『毒姫が自害した事は、別段どうでもいい事です。
問題は、ミスティアが生きていたという事』
機嫌の悪そうな顔が、更に不機嫌な表情になる。

『ミスティアが生きていた？
どういうことですか？』
その言葉は予想していなかったのか、男が驚いた表情で
身を乗り出すように前に出る。

『まだ、詳細は分からないけど、おそらく毒姫と一緒にいた水の聖霊が、
何か関わりがありそうね』
『水の聖霊……あなたの呪術でその身をボロボロにされたサリティアを、
救った聖霊でしたかね。
身体はある程度治す事はできても、呪いは治せぬ状況に苦しむさまを、
見るのがおもしろいと言って放っていたのが、裏目にでましたね』
『聖霊だからか、心の読めないかたでしたけど。
ここまで、私を欺くとは、抜かりましたわね……』
そう言って、魔王が拳を握り、悔しそうな表情をする。

『遊び過ぎな性格も、ほどほどにしないといけませんね』
『夢魔（ムマ）、あなたの方は順調なの？』

『ええ、火の聖霊など大したことありません。
いくら、外からの攻撃には強くとも、中味がひどく脆いですからね。
すぐに堕ちると思いますよ』
夢魔（ムマ）と呼ばれた男が、その光景を思い出したのか、
楽しそうな表情を浮かべ、クツクツと笑う。

『せいぜい、あなたも遊び過ぎて足元を、すくわれないようにね』
頬杖を付き、つまらなそうな表情で、目の前の男を見つめる。

『フフフ、僕の方は心配いりませんよ。
ゆっくりと、慎重に、うまくやりますよ』
男の背から漆黒の闇のように、巨大な黒い翼が左右に広がる。

『そう言えば、夢魔（ムマ）。
火の聖霊に妙な名前で呼ばれてたわね。
何でしたかね？』
男は黒い瞳を怪しく光らせ、空高く飛翔する。

『ああ、思い出したわ、フフフ……
異界の者達の名前の付け方は、本当に変わってるわね。
さて、今日はどうやって、闇の聖霊をからかおうかしら』
そう言って、魔王が椅子から立ち上がり、手で黒い髪を掬い、
その髪をなびかせながら、闇の中に消えていく。

『頼むわよ、ヌシフェル』
クスクスと楽しそうな少女の笑い声だけが、闇の中を静かに響き渡る。

第１６話　帰国（後書き）

前に描いた挿絵がどうしても使いたくて描いた、漫画風な挿絵。

＞ｉ３５８９７－３９９３＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1004w/

異世界で聖霊少女とフリーダム！

2011年11月27日11時47分発行